

カウンター・ハンター

A・ZAP

例えば、そう例えば、だ。

利発そうな顔立ちをした少女がいる。服装から、短絡克つ的確に一言で表現するならば修道女^{シスター}。黒を基調とし、髪を全て包み込む被り物^{ウインブル}をした一般的な……ただスカートの右部は動きやすくするためか、深いスリットが入れられているが……そんな尼僧服を身にまとい、両手にはしつかりと槍を握りしめている。そんな少女が、満月の夜に人気^{ヒトケ}のないオフィス街の裏道にいるという非現実的な光景を想像できるだろうか？

更に、右手には日本刀。左手には拳銃^{オートピストル}。トレンチコートを羽織った男……こちらも短絡且つ的確に表するなら「狼男^{ウエア・ウルフ}」と呼ぶべき者。その男が少女と刃を交えているとしたら、どうだろうか？

あまりに現実離れしている光景だが、しかし昨今のアニメやゲーム、あるいは小説などに溢れたありとあらゆる幻想物語^{ファンタジー}に慣れ親しんでいる者ならば、想像するに難くないという者もいるだろう。美少女と怪物。あるいはこの組み合わせ、慣れ親しんでいる者からすれば定番^{お約束}と受け止められるかもしれない。

定番^{お約束}通りというべきか、状況は狼男^{ウエア・ウルフ} 有利に動いている。

少女は狼男^{ウエア・ウルフ} めがけ何度も槍を突き刺そうと試みるが、その都度^{ウエア・ウルフ} 狼男^{ウエア・ウルフ} は刀で槍先を突き突きをかわしている。金属音が幾度か静かなオフィス街に響くが、その音を耳にする者は二人を除いて周囲にはいない。そんな攻防が何度か続いたところ、隙を見て^{ウエア・ウルフ} 狼男^{ウエア・ウルフ} が左手に持った拳銃を発砲。少女の黒い服に真っ赤なシミ^{シミ}が広がる。どこか大人びた雰囲気^{ウエア・ウルフ} の、しかし印象的には中高生にも見える少女の顔が苦渋に満ちる。彼女の瞳はまるで炎を携えているかのように熱く怒りに燃え、狼男^{ウエア・ウルフ} を見据えていた。

それでも槍は怪物めがけ何度も突き出される。しかし結果は同じ。二発目の発砲音が周囲に響き、二つめの真っ赤なシミが出来ていた。

それでも、それでも。少女は眼光鋭く^{ウエア・ウルフ} 狼男^{ウエア・ウルフ} を射抜き、槍を確実に奴の身体へ貫き通さんと足を踏み出そうとする。

が、その足は踏みとどまった。

「チエックメイト……つとこかな、お嬢さん」

余裕の言動。少女は狼男^{ウエア・ウルフ} の見せる態度に腹を立てたか、僅かばかり目を細め眼光を更に鋭くさせた。

狼男^{ウエア・ウルフ} の持つ刀は、その刃を少女の喉元すれすれに突き立てられている。後は狼男^{ウエア・ウルフ} のさじ加減一つで少女の首はいつでも飛ばされる……そんな状況。これでは一歩も動けない。

美少女の危機^{ヒロイン}。さて、これがアニメやゲーム、あるいは陳腐な三流小説にありがちな定番^{お約束}通りの展開なのだとすれば、そろそろ超絶美形^{パーフェクト}な主人公^{ヒーロー}が登場するところだろう。

だがしかし、現実はその簡単でも短絡的でもない。

そもそも、何か勘違いをしてはいないだろうか？ この場を見ている第三者がいるとす

れば、確かにこの光景は少女が怪物に襲われピンチを迎えていると、そう見えるのは否めない。しかし現実には固定概念という思いこみ通りでは、決して無い。

「おおー、気の強いお嬢さんだね。流石はこんな時間にこんな所で一人俺に襲いかかってくるだけはあるってところはあ……ってところかな？」

そう、現実には全くの逆である。

襲われたのは ウエア・ウルフ 狼男。襲ったのは シスター 修道女の少女。この光景は、襲われた ウエア・ウルフ 狼男 が返り討ちにした、そういう場面である。少女に睨みつけられながらも、ウエア・ウルフ 狼男 は軽口を叩き少女を挑発し、彼女の口元を悔しそうにつり上げさせている。

確かに襲われたのが ウエア・ウルフ 狼男 の方だとしても、少女が危機的状況にあることに変わりはない。

「さてと、お嬢さん。ここで会ったのも何かの縁だ。ちょいと話を聞きたいんだが、いいかな？」

一般的な狼男といえば、満月の夜に遠吠えと共に現れ、人々を長い爪で切り刻んでいく残忍で野蛮なイメージがあるだろう。しかしどうもこの男、そのような一般的なイメージとはかけ離れている。そもそも、タートルネックのセーターやジーンズを着ている時点で一般的イメージとはずいぶん違う。さらにトレンチコート……先ほどの戦闘のためか、いくつかが槍で開けられたと思われる「穴」が点在しているコートまで羽織っていては、あまりにも一般イメージと違いすぎる。同じなのは、今が満月の夜だということくらいか。

その型破りな ウエア・ウルフ 狼男 は、野性的ではなく理性的にかつ冷静な口調……まあ、どちらかといえば小馬鹿にしている雰囲気ではあるが……少女に問いかけた。その落ち着いた態度が、もしかしたら少女にとつて余裕からくる見下した態度と受け止められたのか、少女は槍を持つ手にさらなる力を入れ、睨み続けた瞳にもさらなる力を入れ口を開く。どうにもこの ウエア・ウルフ 狼男、意識の有無はさておき人を怒らせるのに長けている様子。

「……殺したらどうだ」

感情を乗せない言葉は、彼女の態度同様、とても硬い。言葉の意味だけを取り上げれば諦めの言葉と受け止められるが、しかし彼女の態度からして、言葉は諦めより気の強さを表していると印象づける。

少女の態度に、ウエア・ウルフ 狼男 はつい長い口の端をつり上げて少女を更に挑発してしまう。いや、少女はそう受け取っただろうが、少なくとも男にはその意図はなかった。ただ関心と呆気、二つの感情が同時に沸き立った結果の表情でしかなかった。

「殺して欲しいのか？」

答えが判っていないながら、あえて尋ねる ウエア・ウルフ 狼男。そして答えは予想通り、無言という形で返された。つり上げていた口元は緩み、その口からは大きな溜息。銃口を下に向けていた左手は後頭部へと運ばれ、そこを掻き始めた。

状況は変わっていない。しかし男の心情は関心と呆気から困惑へと移り始めていた。いや、元々彼は少女と出会った時から困惑していた。移り始めたと言うよりは戻り始めたと言すべきかもしれない。

「いくつか聞きたいんだが……」

最初の問いかけに話を戻しながら、男は少女が素直に答えてくれるのかどうか、自ら発した言葉を心中で疑問に感じている。感じていると言うよりは、答えないだろうという確

信に近いが。

利発な顔立ちから受ける印象は冷静^{クール}。しかし睨む瞳がその印象を打ち消している。加えて劣勢にいながら崩さない彼女の強気な姿勢は、反抗の意をまざまざと示しながら心の内に熱い物を滾^{たぎ}らせている事を男に伝えていた。表情は薄いが「怒り」の感情だけは瞳と霧^{オーラ}囲^イ気で強く大きく伝えている……といったところか。

考えてみれば、彼女の行動は最初から冷静ではなかったな。まず何から尋ねようと考えていた男は、それを思い出し最初の質問を決めた。

「何故俺を襲った？」

襲われた側としては、当然その理由を知りたくなるものだ。男の質問は当然の疑問から生じたものと言って良いだろう。

第三者がどう思おうと、^{ウエア・ウルフ}狼男^{ウエア・ウルフ}が被害者で修道女^{シスター}が加害者。正義がどちらにあるかは、その立場だけでも立証できるはずなのだが……イメー^{ヒーロー}ジ^レがそれを邪魔している。

しかし賢明な者はもうお判りだろう。本当の主人公^{ヒーロー}が誰なのかを。現実は大衆向けの脚本通りではないのということ。

「見たところ……どこかの教団に所属している修道女^{シスター}か。それも武闘派の」

ごく一般的な者が、趣味で修道女^{シスター}の格好はしないだろう。いや、^{コスプレイヤー}する者もいるが、槍^{ウエア・ウルフ}を持って^{ウエア・ウルフ}狼男^{ウエア・ウルフ}に斬り掛かる者が単なる趣味人^{コスプレイヤー}とはとても思えない。

口を閉ざしたままの少女に代わり、男は口を動かし続ける。

「その印は……グノーシス十字か。なるほど、異端教団^{カルト}の戦士……差詰め聖騎士^{パラディン}ってどこか？ ま、騎士様^{カルト}って感じには見えないがね」

円の中に十の字。黒い尼僧服の胸元に白く刺繍されたこの印こそ、彼女がグノーシス主義に属する異端教団^{カルト}の一員である証^{ウエア・ウルフ}。狼男^{ウエア・ウルフ}は続けて彼なりの憶測を次々と口にしていく。

「世界の創造は善性の至高神^{ハイオン}ではなく、悪しき創造主^{デミウルゴス}によって行われた……ってのがグノーシス主義の教えだったか？ 正統派のキリスト連中から異端扱いされながらも、色んなグノーシス主義の教団が産まれては消え産まれては消え……を繰り返しているって話だったな。お嬢さんが所属しているのもそんな教団なんだろう？」

^{ウエア・ウルフ}狼男^{ウエア・ウルフ}の問いかけに、少女はただ睨むだけで一切口を開こうとはしなかった。その様子に大きく溜息をつきながら、それでも男は自分なりの予測を披露し続けた。

「で、なんだ。おおかたキミんとこの教団は、テンプル騎士団^{ナイト}みたいな武装集団まで結成して、血なまぐさい救済活動をしている……と」

少女はまだ口を閉ざしたまま。だが僅か、ほんの僅か、睨む瞳の上に位置する眉が、ピクリと動く。

核心を突いている。少女の動揺を見逃さなかった男は、たたみ掛けるように憶測を口にし続けたかったが……しかしついて出た言葉は疑問という質問だった。

「しかし解^けせないな……確かあんたらは、異端とはいえ知識^{グノーシス}を追求する一派で、武装集団を組織するような宗派じゃなかったはずだが……」

沈黙。少女は肯定も否定もせず、一切の反応を示さなかった。しかしグノーシス十字の刺繍が入った尼僧服を着て、そして槍^{ウエア・ウルフ}を持って^{ウエア・ウルフ}自分^{ウエア・ウルフ}に襲いかかってきたのは間違いない。となれば、新たに産まれた異端教団^{カルト}は、グノーシス主義を取り入れながら、武闘派の

考えも取り入れた一派なのか？　　^{ウエア・ウルフ}狼男　は何も答えない少女の言葉を待たず、あれこれと推理を脳内に巡らせていく。

確かなのは、この少女はその新たなグノーシス一派の信者であり、^{ウエア・ウルフ}自分を確信持つて狙い撃ちに来たこと。それだけは確かだ。

その根拠。それはタイムミングの良さにある。

彼は一つの噂を流し始めていた。それは「満月の夜に、オフィス街の裏道で^{ウエア・ウルフ}狼男を見た」という、都市伝説にもならないような与太話。むろん与太は^臆満月の夜に、オフィス街の裏道で」という前半部分で、後半の^{ウエア・ウルフ}狼男は実在するわけだが。

この噂話を自身で流し始めてから最初に訪れた満月の夜。それが今日。つまり彼は、自らを狩りに来るような者達……^{ハンター}狩人を待ち伏せていた訳だ。ただ彼も、その^{ハンター}狩人がこのような少女だとは思ひもなかったわけだが。

彼の方が襲われたのは事実。しかしそう仕向けたのは彼自身。餌に食らいついた少女は返り討ちに合い、逆に狩られようとしていた。

「全く、迷惑な話だぜ……」

何度目の溜息だろうか。男は大きく息を吐き出し、沈黙を守る少女へ、今度は諭すような言葉を続けた。

「あんたらが信じる悪しき創造主^{デミウルグス}ってのがいるかいなかったのは、まあこの際置いておこう。で、結局さ、俺が何をしたらって言うんだい？」

刀を下ろし、^{ウエア・ウルフ}狼男はずいっと身を乗り出し少女の顔に自分の顔を近づける。どのような教えに基づいて^{ウエア・ウルフ}自分を狙ったのかは定かでない。しかし九分九厘、このような考えがあつてのことだろうと^{ウエア・ウルフ}狼男は推測は出来る。そしてそれを口にした。

「まさか、俺が^{ウエア・ウルフ}狼男だっただけで罪なのかい？　悪なのかい？　まったく、俺様みたいな善人つかまえて酷いよなあ」

本人の主張はともかく、極一般の人々から見れば、彼が^{ウエア・ウルフ}狼男だというだけで恐ろしい存在であることに代わりはないだろう。そもそも善人な^{ウエア・ウルフ}狼男など、人々の話で聞いたことなど無い。

しかし一方的に^{ウエア・ウルフ}狼男である彼を悪とする根拠も、実は無い。彼が主張するように、少なくとも少女は男が何らかの悪行をはたらいた場面を見たわけではないのだから。あくまで彼女は、噂を聞きつけこの場へとやって来たに過ぎず、^{ウエア・ウルフ}狼男を発見したために襲いかかっただけ。もし噂が事実だったことと、その^{ウエア・ウルフ}狼男が刀や拳銃を所持していることが証拠だと言うなら、槍を持った^{カルト}異端教団の^{ハンター}狩人である彼女はどのようなだろうか？

「……お前達は、^{かたき}敵だ」

ようやく開く、重かった少女の唇。そこから放たれた言葉は、唇よりも重かった。

少女は一度まぶたを伏せ、これまでの中で一番鋭い眼光を深々と突き刺してやるとばかりに再びまぶたを見開いた。

まぶたに一度隠れていた瞳は、開かれた時全てが敵意という色に染まっていた。

「パパやママを殺したのはお前達だ！　許さない、私は絶対にお前達を許さない！」

これまでの沈黙が嘘だったかのように、少女は叫んだ。腹の、心の底から叫ぶ声に、顔を近づけていた^{ウエア・ウルフ}狼男は驚き身を起こした。そして絶叫の続きを黙って聞き続ける。

「なにが善人か、人殺し！ 今まで散々人を殺めてきた癖に、この悪魔め！」
最初こそ、少女の気迫に押されていた狼男であつたが、興奮していく少女に対し、彼は逆に落ち着き、そして冷淡になつていった。

「……もう一度言うぞ」

先ほどよりもトーンの下がった声。半ばふざけた態度でいた男が、少女に負けぬ眼光で睨み付けながら言い放つた。興奮していた彼女にも、彼の様子が一変したのを感じ取り、また口を閉ざしてしまう。

「俺が人を殺した現場を見たことでもあるのか？ 何かハッキリとした確信があつて言っているのか？」

少なくとも、少女の中には一つの確信があつた。

相手は狼男だ。理由はそれだけで充分だつた。

それこそ、アニメやゲーム等に登場する怪物達は全て敵である、という「暗黙の了解」こそが絶対的な理由。他に説明などいらぬ。

そう思われているであろう事を、狼男である当の本人は自覚している。だからこそ腹立たしかった。

「俺達が全員善人だとは言わない。しかしだ、ならば人間はどうだ？」

また口元が上がる。それは先ほどまでつり上げていた感情とは違う物の表れ。

「善人ばかりの種族なのか？ 違うよな。悪い奴らだつてゴロゴロいる。それこそ種族の絶対数から考えて、お前達人間の方こそ「悪人」の人数は桁違いに多いだろ。君の言う「人殺し」は、一体全世界で何人いるんだい？」

日本という一国だけを見ても、毎年、毎月、毎週、殺人事件のニュースは報道されている。それだけを見て「人間は全て人殺しだ」というのはあまりにも乱暴な物言いだ。むろんそれを狼男に当てはめるのもしかり。

しかし人間と狼男とでは根本的に違う。そのように少女は、人間は考えてしまう。

その考えこそが根本的な誤りである……と主張したところで、人間である少女に、ましてや異端教団の修道女に聞き入れて貰えるかは甚だ疑問だ。

「君の両親が狼男に殺されたというのが事実だとしても、それは俺なのか？ 辛いことを訊くが……君は両親が殺されるところを見たのか？」

両親の話を切り替えられてか、少女の瞳に宿る憎悪は強まる。特に最後の言葉へ瞳は強い反応を示したが、狼男はそれを無視して話を続ける。

「……君の両親が人外に殺されたというのが事実なら、同情もする。だが、無関係な狼男や他の人間外の種族を殺めていくのは筋違いだろ？」

理論立てればその通りだ。しかしそれを今この場で素直に受け入れられるか？ 答えは否。そんなこと、訊いた男にも解っている。

「……お前達は、敵だ」

少女が今出せる結論は、結局これしかない。彼女自身にも、これが狼男からの質問に対する答えになっていないのは重々承知しているが、今言えることはこれだけであつた。

まだ一般の者なら、狼男の説得に納得できる者も……少数だろうがいるかもしれない。しかし彼女は異端教団の修道女。歪んだ教義の元で「救済活動」を行っている彼女が、そう簡単に信じている教義を捨てられるとは思えない。

「……ま、しゃあないな」

手にした刀を背負った鞆に戻し、癖になりつつある溜息をつく。

ここで何を言っても聞き入れられないだろう。それも初対面で、しかも敵だと襲いかかった狼男の言葉を。男は残念な結果を納得し、少女に話しかける。

「君が俺を敵だと付け狙うなら、また会えるだろう。それまで生きておけ……本当に敵が討ちたいならな」

少女に背を向け、狼男は言葉を続けた。

「君もすぐにここを離れた方が良い。真っ赤なペイントが付いたボロボロの尼僧服を着ているその姿、人に見られるとかなり恥ずかしいぞ？」

ふざけた態度を取り戻した狼男は、また口元をつり上げ牙を見せる。少女は付けられたペイントよりも顔を赤くしながら、強さを取り戻した眼差しを去りゆく狼男の背に向けていた。

完全に遊ばれた。殺されることを望んではないが、殺されるよりも屈辱的だと少女は辛酸を嘗める思いでいた。

そもそも始めから、あの狼男はこちらを嘗めていた。その証明は、この付けられた真っ赤なペイント。実弾ではなくペイント弾を用いて戦っていたのは、狼男にとつてこちらが本気になるだけの相手ではないと見下されている事を示している。思い返せば、刀もこちらの槍を受けるばかりで、攻撃はあまりしてこなかった。してきたとしても、僅かに服を裂くだけで踏み込んだ一太刀など無かった。こちらが相手に与えたのは、トレンチコートを傷物にしたという資産的ダメージのみ。

何のつもりだ？ 少女は戸惑っていた。

怪物は凶暴で、特に満月の夜に現れる。狼男はとても危険だと聞かされていた。にも関わらず、あの狼男は弄びはしても凶暴とはほど遠い。終いには殺さずに去っていくとは………どういう事だ？ 彼の残した「説教」の言葉も合いまり、少女の戸惑いは深まる一方。

「……戻ろう」

考えて答えが出るとは思えない。少女は今出来ること………帰還するために一歩二歩と足を動かし場を去ろうとする。

敗北の屈辱と沸き起こった戸惑いを、満月に照らされ路地に映し出された影と共に引きずりながら。

「思わぬ収穫だったな、それは。まあ……良かったのか悪かったのか、俺にはよく解らんが」

ソファに深々と座りながら、一人の男……良く言えば恰幅の良い、悪く言えば太ったその男は、昨晚 狼男 が遭遇した少女についての報告を聞き、その感想を述べた。

「むろん、良かったに決まっている。こうも早く餌に食いつく者がいるとは思わなかったからな」

馬の頭部を象った黒い駒を手にし、 狼男 がチェス盤を睨み付けながら話す。

「ただ……餌に食らいついたのがやっかいな獲物だったってのは、まあ……悩ましいところではあるな」

手にした駒を人差し指と中指で挟みながら、 狼男 は盤上にあつた白いポーンの駒を同じ手の中指と薬指で挟み持ち上げ、ナイトの駒と置き換える。

「相手が少女つてもやっかいだが、完全な思い違いをしているらしかつたからなあ。説得するには骨が折れそうだ」

白いポーンを盤面の横に立て、 狼男 は背もたれに寄りかかりソファへ深く身を沈める。そして軽く、しかし長い息を吐き出し、言葉を続けた。

「ついでに、所属しているのがグノーシス主義の教団だぞ？ それもなんだか知らないけど武闘派っぽい。キリスト系ってだけでやっかいなのに、更にややこしいことになるのは目に見えているし……あー、面倒くせえなあ」

両腕を背もたれの上に広げながら、 狼男 は愚痴をこぼした。チェス盤とそれに乗せているテーブルを挟み彼の正面に座っていた男は、その愚痴を一通り聞いたところで身を乗り出し、チェス盤を見つめながら唇を動かし始めた。

「その女の子が抱いてしまっている……まあ、ごく一般的な人ならすべからく抱いているであろう、「魔物イコール邪悪な存在」という誤った固定概念を打ち崩し、無益に魔物を狩る人間を説得するか退治する。それがお前の仕事だろ？ 愚痴ったところで仕事の中心は変わらないぞ」

顎に手を当てながら、太った男はチェス盤を睨みつつ視界から外れている 狼男 に説教を始めた。

「それに武闘派の連中は確かにやっかいだが、グノーシス主義なだけまだマシじゃないのか？ 「外なる神」だの「旧支配者」だのと言いつくされるよりはさ」

顔は盤面に向けたまま、視線だけを 狼男 に向ける肥えた男。口元は僅かに悪戯っぽくつり上がっていた。

「名前を聞くだけで発狂しそうになる神々をあがめる狂信者、か。いや、俺に言わせればそっちの方が気は楽だ」

もたれたまま、 狼男 はまだ次の一手に悩んでいる男に切り返す。

「狂信者ならもれなく「狩るべき対象」だからな。何も考えずに教団ごと潰せばいい。だが今回は、説得すべき人間が彼女以外にもいるのか、そして狩るべき人間は誰なのか……その選別をしなきゃならないのが面倒だね」

首を曲げ頭を背もたれに乗せながら、 狼男 は天上に向けられた長い口から溜息を吐き出す。

「世の中、そうシンプルならいいんだろがね。しかしそれだと、 狼男 である君は少

女に「悪」として倒される立場でないといけない」

くく、と含み笑いを付けながら皮肉を込める男は、しかしまだ盤面を見つめていた。

「人間と魔物の共存。それを目指している俺達は、常に面倒な立場にいるんだよ」

口元は未だにつり上げながら、しかし顔を上げ眼差しは真っ直ぐに 狼男 へ向け、肥えた男は真面目な口調で語り続ける。

「その困難な目的の為に、不当な魔物狩りを食い止め、狩人に返り討ちを喰らわすか、場合によっては魔物狩りを止めるように説得する。それが君の、「カウンター・ハンター」としての仕事だろ、ケン」

名指しされた 狼男 はもたれていた身を起こし、広げていた腕を自分の股に置いた。

そして尖った口を首ごと少し前に突き出して言う。

「そんなこと、「妖精学者」たる天道寺先生に言われるまでもないですよ」

今度は 狼男 が口元をつり上げた。対して先生と呼ばれた男は眉を寄せ露骨に嫌な顔をする。

「先生は止めるって言うてるだろ。俺はあくまで「学者」なの」

言葉通りに受け止めれば、確かに「先生」と「学者」では意味も立場も違う。だがしかし、 狼男 は意地悪そうに牙を覗かせたまま言葉を続けていく。

「何をおっしゃる。常に妖精や妖怪、さらには魔物や悪魔までも幅広く研究を続け、人と人外との仲を取り持とうと努力していらっしゃるあなたのような方を、先生とお慕いして何がいけないのでしょうか？ いやはや、私はあなたのような方に仕事の助力をして頂ける名誉に、常日頃感謝していますよ」

まるで三文芝居しか出来ぬ役者のように、 狼男 は身振り手振りを付けながら熱弁を振るった。言葉に似合わず口元は歪んだまま。そのあからさまに感情のこもらない演説に、先生と呼ばれた学者は眉間の皺を更に深くしていく。

「……あまりうちの学者先生を虐めないで下さいます？ 一度へそを曲げると、その後処理をする私が大変になりますから」

ティーポットとティーカップを乗せたトレーを手にした女性が、気付くと二人の側に立っていた。

「一応私は家憑き妖精という立場上、館主の機嫌を損ねるような発言を見逃せませんの。不本意でも」

最後の言葉に引つ掛かる物を感じながらも、二人の男は真っ白なメイド服に身を包んだ家憑き妖精からティーカップを受け取った。

「へそを曲げられると自分がからかう余地が無くなって面白くない、の間違いじゃないのか？ アイリン」

狼男 の言葉に微笑みながら、彼女は答える。

「ケン、いけませんわ……判りきったことを仰っては」

「お前らなあ……」

学者は顎に当てていた手で顔を覆っていた。

「まあ……これでも感謝しているのは本当だぜ？」

含み笑いを漏らしながら言われてもいまいち説得力に欠けるが、しかし 狼男 の言葉は本心であった。

ハンターが獲物を狩るために情報を収集するように、そのハンターを狙うカウンターハンターである彼もまた、情報収集は不可欠である。その情報は自らも当然集めているが、テレビドラマの探偵が情報屋から情報を買い取るように、彼は妖精学者である肥えた男、^{ウエア・ウルフ}狼男が「天道寺」と呼んだ男から情報を提供して貰っている。また天道寺にしても、人と人外の共存という理想のためにはカウンターハンターの協力が不可欠だった。

例えば今回、^{ウエア・ウルフ}狼男が異端教団の少女と出会うきっかけとなった流言。それをばらまいたのは他ならぬ天道寺の手によるものだ。そしてあぶり出された獲物の直接的な対処は、天道寺ではなくカウンターハンターの狼男に委ねられている。

「感謝してるから……」「次」に進むために、また色々頼むよ」

調子の良い言葉に、学者は心中で溜息をつく。

「……で、その「次」とやらの為に、何をして欲しいんだ？」

ティーカップに一口手を付けてから、学者は本題を切り出した。切り出されたハンターは紅茶を一口、大きな口で一気に飲み干してから身を僅かに乗り出して話し始める。

「彼女を逃がした後、ペイント弾に染みこませた「匂い」を頼りに跡を付けていったんだが……辿り着いたのは、聖パトリック女学園の女学生寮だった」

学園の名前に、学者の眉がピクリと反応を示した。

「確かカトリック系で中高一貫の女子校だったか……ああ、確か君に噂を流してくれと頼まれた地域にあるんじゃないかったか？」

「その通り」^{ウエア・ウルフ}狼男は頷き、話を続ける。「俺が目をつけていたのはその学院では無く、同じ地区にあるモデルガンショップだったんだが……いやまさか、女子校から釣れるとはね」

後頭部を掻きながら、今度は^{ウエア・ウルフ}狼男が人間よりも広い眉間に皺を寄せた。彼にしてみたら、時折「動物虐待」の温床になってしまふモデルガンショップに噂を流せば、動物では飽き足らなくなった人間による「動物虐待」を始めようとする、あるいはもう始めているような狩人でも釣れるのではないかと想定していた。故にまさか少女が、しかもカトリック系の女子校寮に逃げ込むような少女が釣れるとは露程にも思っただけじゃなかった。

「ふむ……カトリック系の女子校に、異端教団の少女か。すると、学園自体が裏でグノーシス主義の布教をしていると？」

^{ウエア・ウルフ}学者の推測に、^{ウエア・ウルフ}狼男は首を横に振って答えた。

「そこまではなんと……ただ異端教団の少女が逃げ込んだ場所、という意外に何も判らない。だから、出来れば潜入して情報を得たいんだ。少なくとも中に潜れば、少女の言う「魔物に殺された」という両親のことも調べられるだろう。説得するならば、そこから調べる必要があるだろうしな」

面倒と言っていた割りに、カウンターハンターは自分の仕事を全うしようと考慮していた様子。それに学者は気をよくしたのか、軽く微笑んだ。

「……いいだろう。ちょっと難しそうだが、手配してみる」

手配するとはいえ、彼も万能ではない。それでも彼はあらゆる「人脈」をたどり、見た目だけなら縁遠そうな女子校への潜入を可能にしなければならぬ。もはや学者という領分を逸脱しているが、それでもどうにか手配してしまうからこそ、カウンターハンターから信頼されているのだと言える。

「で、潜入するのに使う名前は、本名の「大上賢」でいいのか？」

普通潜入捜査には偽名を使う物だ。しかし潜入者は手配者の提案に頷いた。

「相手は教育機関だからな。へ々に偽名を使うとばれた時にやっかいそうだし。それに自分で言うのも何だが……本名が偽名っぽいからな」

「狼男の名字が大上とは、確かに出来すぎるくらいだ。だからこそむしろ、変な疑いは「まさかそんな判りやすい名前にするわけが無い」といなされることも多い。ならば無理に偽名を用いる必要はないと、彼は考えていた。

「ああ、それと「協力者」を何人が頼む。出来れば俺と違う立場で一緒に潜入してくれる味方がいると助かるんだが……」

了解したと、学者は頷いて依頼を引き受けた。そして学者は手配できそうな協力者の名前をハンターに提示する。挙げられた名前に、時には頷き、時には眉をひそめ、狼男は協力者の候補を絞りながら、再度彼らの協力依頼を頼むと学者に頼み込んだ。

「話に一段落付いたところで、宜しいかしら？」

紅茶のお代わりをティーカップに注ぎながら、白いメイド服を着た妖精が二人の会話に割って入る。

「ケン、アルケニーさんが呼んでたわよ。あなたが頼んでいたトレンチコートの修復が終わったみたい」

妖精学者の館を訪れた際に狼男が預けたトレンチコート。少女とのやりとりで細かい切り傷が付いてしまったコートの修復を頼んでいたのを思い出し、ケンは頷きながら答える。

「オーケー……ああ、その前に、この勝負をつけてからな」

学者の番で止まったままのチェス。ハンターらしい鋭い目つきで、ケンは学者を睨んだ。

この勝負、久しぶりに勝てそうなのだ。みすみす逃すことはない、狼男はニヤリとほくそ笑む。対して、久しぶりに勝ちを譲るのかと渋い顔をする学者は、また顎に手を当て考え込んでしまった。

「早くしないと、またアルケニーさんにどやされますよ？」

言いながら、アイリンはトレーを右脇に挟み、左手で白いビショップの駒をつまんだ。

「……これどう？」

白の学者と黒のハンター。どちらのプレイヤーも考えつかなかった一手が、アツサリと盤面に打たれた。

「次で王手、更に後三手で終局かしら？」

メイドが動かしたビショップで取り除かれたのはルーク。攻めることばかりに気をとられていたハンターは、手薄になっていた守りに気付かず、また守りばかりを考えていた学者も攻めの一手は思いつかないでいた。唯一客観的に見ていた彼女だけが、最善の一手に気付いていたようだ。次に黒のハンターがどのように駒を動かそうと、その次で王手がかけられれば守りに入るしか無く、彼女の宣言通りなら最短で三手後には負ける。これは実質的な終局とも言えた。

「……そうだな、待たせると悪い。勝負はまたにしよう、鷹丸」

学者を名前で呼びながら、一方的に流局を宣言する。つまり、この勝負はなかったことにしようというわけだ。この申し出に、苦笑いで学者は頷いた。彼にしても、人の手が加

わった勝負で勝ちたいとは思わなかったらしい。

指で頬を掻きながら ウエアー・ウルフ 狼男 はソファァーから立ち上がり、応接室を出て行く。向かう先は当然、ゲームを中断してまでも会いに行かなければならない女性の部屋である。

部屋の中は服であふれていた。まるでダンスの中にも入り込んだのかと錯覚してしまふような室内。ケンには数多の洋服をジャングルの中で茂みをかき分けていくかのように端へ寄せながら中央まで進んでいく。

「いつも思うが、こうして服をかき分けた先には一面の銀世界が待っているんじゃないかってヒヤヒヤするね」

残念ながら ウエアー・ウルフ 狼男 が空想するような古典童話の世界は、そこには無い。先に待っていた光景は、少しだけ開けた場所とそこに響くミシンの機械音。そして一人の女性だけである。

「私が傘と荷物を持って現れたら、少しはそれらしくなるとでも？」

ケンの ジョーク 声 に女性はミシンを止め、あきれ顔で振り返った。彼女は確かに半人半獣ではなかったが、「半分は人」という点だけは合致している。

腰から上は美しいギリシャの女性。しかし下半身は六本の脚を持った蜘蛛の身体。半分は人だが半分は虫。彼女もまた、ウエアー・ウルフ 狼男 と同じく魔物の女性であった。

「いや、あんたの場合は魔女のほ……んん、とここでアルケニー、俺のコートが直ったって聞いて来たんだが？」

じとりと細くなる目に恐れを成し、ケンは言いかけた言葉を無理矢理抑え本題を切り出した。未だ目を細めたままの機織り娘は、側に立てかけていたトレンチコートを手に取り依頼人へ突き出した。

「前から言ってるけど、どうしてこんな動きづらい格好で戦うのよ。そもそも、その身体でこんな防寒着はいらないでしょ？」

暖かく柔らかい冬毛に包まれている男は、差し出された自分のコートを片手で受け取りながら、残った片手の人差し指を立て、軽く左右に揺らす。

「だから言ってるだろ？ ハードボイルドって言ったらトレンチコート。これは譲れないね」

アルケニーの細めた目はそのままだが、その意味合いは変わっている。短く漏れた笑い声が苦みのある物だったから。

そこまでハードボイルドを気取るなら、もう少しクールになったら？ と煽る言葉が喉にまで出かかったところで、蜘蛛女はそれを飲み込んだ。それを言い出すと、何度目かになる彼の身勝手な「ハードボイルド論」を聞かされることになるから。以前彼女は、そこまでトレンチコートにこだわるなら同じくらい重要な小道具であろうタバコは何故吸えないのか、と問いただして後悔したことがある。流石に同じ轍を二度も踏みたくはないものだ。まあ、実際には何度か踏んでしまっただけだ。

「それにこのコートは耐水耐火、そして耐魔に優れた蜘蛛マークのブランド物。俺のお気に入りだからさ」

それは遠回しな褒め言葉。蜘蛛のマークが入った「レディウェブ」は、彼女の銘柄だから

ら。褒められて悪い気はしないアルケニーは多少顔を綻ほころばせるが、しかしすぐにまた口元を歪ませる。

「それは別にトレンチコートでなくても、私の銘柄ブランドなら全部そうなの」

レディウエブは極一部の者達のみで流通している銘柄ブランド。蜘蛛のマークは、彼女がデザインし自ら吐き出す「蜘蛛女の糸アルケニー」で織り込まれた一点物の証。彼女の糸には魔力が宿っており、ハードボイルド気取りが言う、あらゆる厄災からある程度身を守る効果がある。

「それに、切り傷に関しては普通の服と同じ。お気に入りっていうなら、何度も何度もボロボロにしては修繕しに持ってこないでよね」

糸に魔力はあるが、その魔力は刃物には無意味。むしろそうでないと、糸を使って服を作ることが出来ない。コートは表から見て目立たないが、裏返せば至る所に修理した後が見て取れる。その数は、もしこのコートが高価な一流ブランド物だったとしたら買い換えの方が修繕費よりも安くなるだろうと思える程に多かった。

「修理する手間もそうだけど、糸だって無限に採れるわけじゃないんだからね。もうちょっと、私の苦労とか色々気遣うことがあるんじゃないの？」そしてふと何かを思いついた彼女は、ニヤリと口元を歪ませ言葉を続けた。「そうね、たまには目に見える形で、アンタの誠意を見せてくれないかしら？」

基本的に、仕立屋アルケニーはコートの修理に金銭は要求しない。妖精学者フェアリドクターの館に居候している彼女は、館の主を手助けする事が義務の一つと捉えており、カウンターハンターの請求は彼の仕事を手助けしている妖精学者からの要請でもあるとして受け入れている。そもそも彼女にとって糸を紡ぐところから服の制作に至るまでの作業自体が趣味のような物で、特に苦勞を感じるところはない。しかしだからといって、さも当然のように何度も修理を要求されるのは気持ちの良いことではないし、自分が手がけた愛すべき洋服達子供を無下に扱われるのは我慢ならない。ならばたまには、形ある感謝を要求しても問題はないだろう。

「もちろん、何時だって感謝してるさ。ああそうさ、もちろん何時だってね。だからほら、ええと……うん、その、なんだ……」

感謝はしている。その言葉に嘘はないのだが、それをどう伝えれば良いのか。

時と場の雰囲気によって様々だが、ケンアルケニーは仕立屋に感謝の意は常に示しているつもりだ。それはむしろ彼女にも伝わっているのだが、形で示せと言われると、何を差し出せば良いのか悩む。とりあえず言葉は先走ったものの、そこからが続かない。その、あの、といった小声ばかりが大きな口から漏れるだけ。

「ハードボイルドを気取る割りには、女性の扱いがなってないわねえ、相変わらず。もうちょっと、大人の女性に気の利いた言葉やプレゼントは出来ないの？」

痛いところをつかれた。その、あの、どこるかぐうの音も出ない。彼女が指摘している通り、彼の理想は現実の言動と一致していない。だからこそトレンチコートといったような形から入ろうとしている訳なのだが。

「まあいいわ、始めから期待してなかったから。そうね……次に来る時くらいは、甘い言葉と甘いケーキくらい用意して来なさい」

むしろからかうことで多少気は晴れた。アルケニーは頭と耳と肩と尻尾を力無く落としているケンへ苦笑混じりに声を掛ける。そもそも彼はコートを無下に扱っているわけでも修理を当然と思っているわけでもない。彼は単純に、気恥ずかしさから軽い言葉と態度以

外で感謝を示すことが出来ないだけ。だがそれでは、彼女の言う通りハードボイルドを気取るには少しお粗末だろう。

うなだれたまま部屋を出て行くハードボイルド気取りは、甘いケーキの準備はまだしも、さて甘い言葉をどうチョイスすべきかに悩んでいた。そして思考は何時しか、洋画と国産ドラマのどちらを見直そうか。それとも小説の方が言葉を選びやすいか？ といった、おそらく誤った方向へ流れ、選択を真剣に検討し始めていた。

蔽おしそかな雰囲気。十字架をかけた神聖なる礼拝堂には、そんな雰囲気が似合う。しかしここが蔽か……つまり威儀威蔽いぎいげんがあり近寄りがたいといった雰囲気を醸かもし出しているのは、なにもここが礼拝堂だからという理由だけではない。

「我々は正しい知識グノーシスを得る事によって救われます」

十数人の信者を前に、そして二匹の蛇で形成された十字架……円の中に十の字が書かれた蛇のグノーシス十字を背に、一人の男が教えを説く「説教」を行っている。

ゆつたりとした司祭服を身に纏まとい、半球型の帽子を被ったこの男。状況から、この礼拝堂に集う者達の中では最高位の人物のようだ。そして彼らが異端教団カルトだということを考慮すると、最高位とはつまり「教祖」ということになるだろう。なるほど、確かに男からは教祖らしい威蔽が漂っている。場の「蔽かな雰囲気」は彼から発せられているようだ。

「この宇宙コスモスを作った創造主は、無知で愚かなデミウルゴス。故に作られた宇宙コスモスは無知であり、それは秩序も法則も無いことを意味します。言い換えるならば、宇宙コスモスは邪悪に満ちているということになるでしょう」

旧約聖書を紐解けば、宇宙世界は唯一神ヤハウエによって創世された物と書かれている。グノーシスという一派が、何故キリスト教の異端とされるか。それは教祖の語るこの一文だけでありありと見えてくる。

「その宇宙コスモスの中で生きる我々人間もまた、宇宙コスモスの一部。創造主デミウルゴスによって作られた、無知で邪悪な存在なのです」

つまり、人間は神の子であるとする性善説が従来のキリスト教の教えならば、人間は邪神の子であるとする性悪説を唱えているのがこの異端教団の教え。異端どころか、邪教として弾圧されるのも頷ける。

「しかし我々人間には永遠にして神聖なる「フネウマ霊」が与えられています。いえ、我々人間の神髄こそフネウマ霊そのものだと言えるでしょう」仰々しく教祖は両手を広げ、信者達に向けて声高に教えを唱え続けている。「フネウマ霊は物理的な「サルクス肉体」と精神的な「フシユケイ魂」という、創造主デミウルゴスによって創られた牢獄に捕らわれています。我々のフネウマ霊が救われる方法は、真の神を理解するための知識グノーシスを得ること。さすれば、フネウマ霊は肉体とサルクス魂から解放され、救済されるでしょう」

ここまででは、これまで数多く産まれては潰された一般的な……異端教団カルトに一般という言葉葉を当てはめるのもおかしい話だが……グノーシス主義の主な教え。ここまでなら、考え方の違いから異端扱いされるまでは理解できるが、知識グノーシスを追い求める事に全てを捧げているはずの彼ら信者が手に手に槍や剣などの武器を携えていることが理解できない。そして先日、ウエア・ウルフ狼男を襲った少女がその中にいることも。

そう、彼らはグノーシス主義という異端教団カルトの中でも、更に異端的な宗派なのだ。

「しかし、単純に知識グノーシスだけを追い求めれば救済が成されるという状況では無くなりつつあります。何故ならば、ここ日本では今ゆゆしき事態に陥っているからです」

武闘集団を結成する理由。それが教祖の口より語られる。信者にしてみれば何度も耳にしている内容であろうが、しかし復唱されることでその使命を何度も胸に刻むのだろう。皆真剣な面持ちで教祖の言葉に耳を傾けている。

「日本には古来より、土着の「妖怪」という悪しき者どもが住み着いておりました。それだけでも嘆かわしいことですが、近年妖怪達だけでなく、洋の東西を問わず様々な地域が

ら魔物や悪魔が日本に集まり始めています」

例えば、**狼男** ウエフ・ウルフ は、「元来日本にはいなかった外来種。主にヨーロッパを住処とした魔物だった。そんな **狼男** ウエフ・ウルフ が日本にいるのは、単なる観光と言うにはあまりに不自然だろう。

「このような事態になった原因は諸説ありますが、主な原因は、ここ日本が「宗教の混沌地帯」であるからだと思われれます」

日本は文化的に、仏教が根強く広まっている。しかし日本国民の多くは文化として根付いた仏教をそれなりに知ってはいても信仰はあまりしていない。さらにはクリスマスなどのキリスト文化を取り入れるなど、様々な宗教文化だけを取り入れて今に至っている。文化はあっても特定の神を信仰するような習慣は日本人にあまりない。

そもそも日本は仏教以前に、八百万の神々 やおみひつ を信仰する習慣があった。様々な物に神を見出し、崇める習慣が。そんな日本人は、来る者……いや、来る神を拒むことなく受け入れる姿勢が先祖代々より受け継がれているとも言えた。このような日本の姿勢を、何時からか誰からか、「宗教の混沌地帯」と呼ぶようになっていた。異端教団 カルト の教祖はこの現象のことを指して言っている。

「そもそも、真の神を理解しようともせず異教の神々を招き入れる姿勢も嘆かわしいことですが、この混沌状況が、世界各国から魔物や悪魔まで招き入れる結果になっています。しかも今の日本人は墮落の一途をたどっている。彼らにとっても付け入る隙が大きい日本人は格好的となってしまうています。ああ、なんと恐ろしいことでしょうか……」

どのような神をも受け入れる日本は、魔物や悪魔達にとっても住み心地の良い国となっている。加えて、経済大国のぬるま湯につかりきった日本人は様々な誘惑に屈しやすい人種になっている。このような美味しい餌 日本 を逃す手はないと考えるのは道理だろう。

しかし、狙っているのは悪魔ばかりではない。

「この状況を打破し、日本を、日本人を救うためには、真の神が存在することを広く知らしめ、皆が知識 グノーシス を求める我らの同志になることへ目覚めて貰わなければなりません」

つまりこの異端教団 カルト は、宗派が混沌した日本で自分達の教団を広める布教活動を行おうとしている。付け入る隙の大きい日本人を格好的にしているのは、彼らだって代わりはないのだ。

「その為にもまずは判りやすい形で、彼ら日本国民に我々の正当性を示さなければなりません」口調を強め、先導者は拳を握りながら演説を続ける。「悪しき創造主 デミウルグス より創られし、邪悪な魔物達。霊 フネウマ を持たぬ、悪しき肉体 サルクス と魂 フシユケイ のみで創られた魔物達。奴らをこの日本から追放し、知識 グノーシス を求めるに適した国へと日本を変えていかなければなりません。その為、あなた達の力が必要なのです！」

力説は頂点へと駆け上がり、握られた拳は高々とかがげられている。鼓舞する教祖に煽られたか、これまで静かに説教を聞いていた信者達が、手にした武器を高々と掲げながら一斉に雄叫びを上げる。知識 グノーシス を我らに。いつしか、信者達は唱和を始めていた。

もし、もしここに信者ではない第三者がいたならば、この光景は異様……狂気の光景には見えないだろう。荒ぶる彼らの姿は、まるで血に飢えた狂戦士 バーサーカー ではないか。とてもではないが、「知識 グノーシス」を追い求めている知性的な信仰団体には見受けられない。

程なくして、教祖が大きく広げた手で信者達に静まるよう身振りて伝える。静寂が戻ったところで、教祖はまた演説を再開した。

「ここで皆に報告があります。昨夜、我らが同胞であるシスター月原が^{ウエア・ウルフ}狼男と接触いたしました」

どよめき。信者から様々な声が囁かれている。ついに来たか。獲物が現れたか。次こそは私が。悪しき魔物に鉄槌を。

口々に漏らす彼らの言葉は、僧侶の言葉と聞こえなくもないが、やはりどこか血なまぐさい。

教祖は僧侶達の中から、ただ一人沈黙を守り続けていた一人の少女を手招いた。その少女こそ、教祖の言う^{ウエア・ウルフ}狼男と接触した彼らの同胞。

少女は教祖の横に並ぶと、深々と信者達に向け頭を垂れた。

「シスター月原は七年前、彼女が九つの時に両親を魔物に殺されてしまいました。その場に偶然居合わせた私はどうか彼女の救出には間に合いましたが、残念ながら彼女の敵を討つことは出来ませんでした」

その事が今でも悔やまれる。そう伝えたいのか、教祖は顔を右手で覆いながら軽く左右に振って見せた。

「しかしながら、シスター月原は自身で敵が討ちたいと我らの同胞になることを望み、長い長い修行の年月を経て、ようやく先日戦士として認められたばかりです。そんな彼女が^{ウエア・ウルフ}狼男を発見できたのは偶然でしょうか？ いや、これこそ^{アイオーン}神のお導きに他ならない！」

語尾を強め、少女と^{ウエア・ウルフ}狼男の接触が運命なのだとは彼は印象づけようとしている。

「奇しくも、あのとき私が取り逃がした彼女の敵も^{ウエア・ウルフ}狼男でした。まだ解りませんが、同じ土地に現れた^{ウエア・ウルフ}狼男が七年前の事件と無関係とは思えません！」

自らの言葉で気が高まったか、教祖は教壇を叩き、七年前の怒りと^{ウエア・ウルフ}狼男発見の興奮を隠そうとはしなかった。

「さあ我らが同士よ。シスター月原の敵を討ち、より一歩^{グアイシス}知識へと近づくためにも、悪しき魔物を、^{ウエア・ウルフ}狼男を、我らの手で葬り去るうではありませんか！」

再び場は熱狂という狂気に包まれていく。武器を掲げ、声高に^{アイオーン}神への感謝と^{ウエア・ウルフ}狼男打倒を叫んでいた。

ただ一人、少女だけが口を閉ざし、じっと同士同胞の狂乱を見つめていた。感情のこもらない、しかしその奥では何か炎が揺らめいているかに見える、その瞳で。

得てして、男というものは「女子校」という響きに弱い。女の花園に幻想を抱いてしまいがちだ。だが現実の女子校は男の幻想をももの見事に粉碎してくれる。そういう物だと、おおがみケン大上賢は自分に何度も言い聞かせていた。

「非常に特殊なケースですが、本日より本校へ二週間、リサーチ研修のため来校される信徒のお二人を紹介します」

貫禄のある、しかし柔和な笑顔が印象的な男性が舞台上でマイクを通し朝礼の挨拶を行っている。彼こそ、ここ聖パトリック女学園の学園長であり、全校生徒がそろったここ体育館で生徒達へ「特殊ケース」の説明を始めているところだ。

「これまでも、「実習生」として本校に來られた先生方はいましたが、今回来校されるお二人は実習生ではありません。有栖学園あしすより、教会の運営などの研修を行うためにいらつしやいました」

日本屈指のマンモス校、有栖学園あしす。幼稚園から大学までの一貫教育を実践している学園であり、教科も農業や商業からIT産業まで幅広い。加えて留学生や在日外国人の受け入れ体制も万全と、まさに日本における教育の集大成と言っても過言ではない、そんな学園だ。

その有栖学園が、より国際性を重視する意味も含め敷地内に教会を建てることとなった。その為、教会を学園という場の中でのいかにして運営、活用していくのが望ましいのか。その研修のために、ミッションスクールである聖パトリック女学園へ有栖学園あしすより二人が派遣される事となった。

これが学園長より生徒に伝えられた、表向きの理由。

当然ながら、派遣された信徒……の肩書きを偽っている大上には本来の目的が別にある。

そもそも大上は カトリック教徒 神父 ても プロテスタント教徒 牧師 でもない。

学園寮に入っていた、異端教団カルトの若き女戦士。彼女の身辺調査、および異端教団と学園の繋がりを洗いざらい調べ上げる。それが妖精学者フェアリードクターの手引きによって潜入に成功した大上の目的である。

しかし学園長が生徒に語った内容の全てが偽りというわけではない。その証となる一人の、修道女シスターに身を包んだ女性が、学園長に招かれ舞台上の教壇へと歩み寄った。

「初めまして、聖パトリック女学園の皆さん。有栖学園あしすより参りました、四方雅子よもまさこと申します。あちらの学園では「チャコ」と呼ばれていますので、こちらでもそう呼んでもらえると嬉しいです。二週間と短い間ですが、よろしくお願いします」

有栖学園あしすが教会を建てることも、その為の研修に來ているのも、嘘ではない。ただそれは、今挨拶をした修道女シスターのみに当てはまること。もう一人の、信徒と人間ヒトの皮をかぶった神父には該当しない。その男が深々と頭を下げた修道女シスターと教壇の前を入れ替わり、軽く頭を下げた後にマイクに向かい挨拶を述べる。

「聖パトリック女学園の皆さん、初めまして。本日より二週間、皆さんと共にここ聖パトリック女学園で過ごすことになりました、大上賢です。よろしく」

これまで静寂を保っていた女生徒達から、僅かながらざわめきが起こる。目の前に狼男である大上が現れたためか？ いや、そうではない。

大上は今、人の姿をしていた。身体を覆っているはずの体毛もなく、愛用のトレンチコートも羽織ってはいない。代わりに黒い神父の服を身につけ、ずいぶん小さくなり牙も

見あたらない口を軽く開き笑顔を振りまいている。そしてその笑顔こそが、ざわめきの要因になっている。

格好良くない？ 超イケてるんだけど。あちこちで囁かれる声も、集まればざわめきになる。

そう。大上が変身した人の姿は、女性から見て非常に素敵な男性に見えている。背は高く、体格も引き締まっており、そのくせ凛々しい顔立ちには俳優やホストを思わせる。一言で簡単に言い表すなら、「美形スポーツマン」といった容姿。もしここが厳格なカトリック系の女子校ではなく、ごく一般的な学校であったなら、騒ぎはもっと大きくなっていただろうか。

だが、騙されるな。ざわめきという歓声の中で、大上は心の中でまた自分に言い聞かせる。

女子校は男が考えるような楽園ではない。気を抜けば、どこで足をすくわれるか解らない。勘違いするな、ここはカトリック系の女子校という、マリア様が見ているような環境下にある学園なんだ。あこがれの先輩と親密になることは望んでも、部外の神父に興味なんかあるものか。本当はあると思うけど、あると思ってはいけない。仮に、仮に興味があったとしても、こちらが手を出せばそれだけで問題になるんだ。そうでなくとも今の俺は神父ということになっているんだぞ。だからこそハードボイルド、ハードボイルドに決めなければ……大上は何度も何度も、まるで呪文かのごとく心に念じていた。その言い聞かせが幸を引き寄せるのか不幸を招くのか。人にはそれなりにポリシーという物があるのだから、そのポリシーが、時として思わぬ結果を生じることになるのを、この時の彼はまだ知らないでいた。

まあその前に……本来心配しなければならぬのは女生徒との禁断の恋ではなく、正体がバレること無く任務を終えられるかどうかの方だと思うのだが……今大上の脳内では、完全にその事は抜け落ちているようだ。それだけたくさん女生徒を前に舞い上がっているのだから……全くそれを表に出さないのは、彼が常日頃自稱しているハードボイルドを貫いているおかげと言えるのだろうか？

「んん、静粛に」咳払いに注意の一言を添えてから、再び学園長がマイクの前に立ち話し始める。「今説明があった通り、お二人は教会の視察と研修が目的で来られています。つまり、普段のあなた方も視察の対象となるわけです。聖パトリック女学園の名に恥じぬよう、適切な対応を心がけてください」

ざわめきも止み、朝礼は滞りなく進行していく。壇上では学園全体の注意事項や近づきつつある期末考査、それに伴う部活動の休止時期などが話されている。それらの事と直接の関係を持たない大上は、一人まだ心の中で呪文を唱え続けていた。

「さすが大人気でしたね、大上神父」

何重にも心にかけてた防御呪文が、たった一言でアッサリと崩壊する。

大人気？ やはりそうなのだろうか？ 勘違いではないんだな？ 大上の心が、だらしなく緩んでいくのを本人も自覚していた。

「いやあ、この学園に男がいることが珍しいだけでしょう」

言いながら後頭部を軽く搔く。笑ってごまかすことで、気のゆるみを悟られぬようにしたかった大上。だがその仕草と僅かに高揚した頬を見れば、彼がまんざらでもない様子なのは声をかけた四方よもにもすぐに判る。

「でもだからって、生徒に手を出しちゃ駄目ですよ？」

自分で言い聞かせるよりも強力な防御呪文……いや、もしかしたら攻撃呪文か。彼女の一言は緩んだ大上の心を一気にまた引き締めた。むろん半ば冗談で言った一言であるのは双方共に判ってはいるが、それでも男というのは、女性からの一語一句に過敏な反応を示すものなのだ。

「判つてますよ。今回は有栖学園あしすの名前と立場を使わせてもらってますからね。チャコさ……シスター四方にもこれ以上迷惑はかけられませんから」

まだ言い慣れない独特な名称を言い直し、大上は真面目に答えた。冗談であっても本当に気を引き締めて取りかからなければならぬ事だから。

二人は今、教会の中にある職員室にいた。この学園ではクラス担任などが使用している職員室の他に、教科ごとに小さな職員室がいくつも存在している。二人がいるのはそんな小さな職員室の一つ。他の先生は全て授業などのために出払っており、室内は二人きりだ。このような状況なら、四方を普段言い慣れている「チャコさん」と呼んでもかまわないのだろうが、仮初めでも二週間神父という立場を演じるのだ。下手なところでボ口を出さないようにするために、今のうちに慣れるべきだろう。

「いえいえ、私などがお役に立てるのなら。でもさすがに、初めて理事長から大上神父のことを伺ったときには驚きましたけどね」

有栖学園あしすが教会を敷地内に建てる事。そしてその教会に四方が籍を置くことは決まっていた。しかし聖パトリック女学園の視察や研修までは予定になかった。そんな折、大上の助力者である妖精学者フェアリドクターの天道寺が聖パトリック女学園への潜入について有栖学園あしすの理事長に相談を持ちかけたところ、理事長から教会の建設を口実にし研修という名目で潜入させるのはどうだろうかと提案されたらしい。

「ホント助かりました。にしても……よくもまあ、こんな強引な方法が通りましたね」

助けてもらってなんですが、と大上は付け足し、ここまであまりにも上手く事が運んだ経緯に疑問を感じ、それを口にした。

「理事長は手腕家てんわんかですからね」軽く苦笑しながら、四方はそれでも、と言葉を続ける。「こちらの女学園は、私が在籍している女子修道院とも繋がりがあるんですよ。その事も、今回の強引な研修が通用した要因となるでしょうね」

四方の話では、女学園の名前にも使われている「聖パトリック」という聖人と、彼女が在籍している女子修道院とは浅からぬ関係があるらしい。その繋がりが元々修道院から学園へ時折修道女シスターが派遣されイベント事などを手伝ったりもしているらしい。故に今回の件も唐突ではあったが気軽に頼める間柄なのとか。偶然が重なっているとはいえ、それなりに筋は通っていた。

そうだとしても、このような強攻策を押し進められる有栖学園あしすの理事長という人物はどれほどの人物なのか。大上はカウンターハンターという仕事をする上で天道寺を通して何度も理事長の恩恵を受けていたが、その度に理事長のことが気になっていた。天道寺は「強大なスポンサー」なのだだけ語り、多くを語ろうとしない。恩恵は受けても一度も面会

がない大上は理事長という人物がどのような人なのか気にはなるのだが、ハードボイルドの主人公に謎めいた財団のバックアップというのもお似合いだろう。むしろ「機能満載な上にしゃべる車」などが贈られたって不思議じゃないのがハードボイルドさと、大上はどこかハードボイルドを間違って認識した上で結局深くは考えないことにしている。

「それでも準備に三週間も掛かっちゃいましたけどね」

「いや、充分早いですよ。普通ならもつと掛かるでしょうし」

そう、大上が異端教団カルトの少女と出会ってから三週間という時間ときが流れていた。

大上は天道寺へ潜入について打診した後も、独自に学園とその周辺を調査していた。結果としてたいした情報は得られなかったが、天道寺を通して一人のスパイを雇うことに成功している。そのスパイは既に学園の潜入を果たしており、この後直接会う手はずになっていた。

「理事長から伺いましたが……大上さんも大変なお仕事の様子ですね。あまりご助力できませんけど、がんばってくださいね」

さすがは修道女シスター。その笑顔と励ましで、大上は引き締めた心に安らぎを感じていた。

「それにしても……神学科ですか。ずいぶん本格的なミッションスクールなんですね、ここ」

大上は室内に小さく貼り付けられたプレートを見ながらつぶやくように話題を変えた。

二人がいるのは学園内に建てられた教会の中にある神学科の職員室。ここは教師と言うよりは四方と同じ修道女シスターと呼ぶに相応しい先生達が使用している。そして神学科とは文字通り、宗教の教義や信仰について研究する学問のことで、ここでは当然キリスト教の事を学ぶ授業を指す。

「いえ、そうでもないみたいですけどね……」

四方が言うには、そもそも神学科の授業は各クラス週に一度程度しか行われておらず、試験などもないらしい。ミッションスクールという形を守るために行われているような物で、生徒もほとんどが無信仰の者達ばかりなのだとか。

生徒の親たちがここに娘を入学させる目的は、女子寮が充実していることと、躰などの教育がしっかりしている事が理由としてあげられるらしい。また俗に言う「お嬢様学校」よりは敷居が低いため、IT企業などで財をなしたような、「プチセレブ」達がこぞって通わせたがっているとも、四方は付け足した。

しかしそこまで宗教色が薄いのなら、あの少女がここの生徒である必然性も薄れるのではないか？ 大上は思考し始めた……が、四方の話に耳を傾けている大上は一旦その疑問を頭の片隅に追いやった。

「教会も、礼拝に使うのはクリスマスなどの催し物の時か学園外の方に向けた日曜礼拝くらいのです。ですからこちらの修道女先生方も教会で神の教えを広めるより、懺悔室で生徒さん達の悩みを聞いたりする役回りの方が多いようです」

だからこそむしろ、有栖学園としては聖パトリック女学園が良いモデルになるのだと、四方は言う。教会を建てるとはいえ本格的な布教活動をするわけではない有栖学園としては、むしろカウンセリングを行える施設を兼用できることに注目しているとのこと。それも今回の潜入口実に一役買っているわけだが、有栖学園としても「良い機会」であったのに間違いはないらしい。

「なるほどね……じゃあシスター四方もカウンセラーを？」

自分の研修はむしろそちらがメインなのだ、彼女は苦笑いを浮かべながら頷いた。彼女は既にカウンセラーの資格試験には合格しており、その際に講習はもちろん他所で研修も経験してきたとのこと。彼女が聖パトリック女学園へ研修に訪れたのは、最終的な詰め^{詰め}の為といったところらしい。

「大上神父は経営面での視察という名目でしたっけ？」

「表向きはね。本当は帳簿なんか見ただけで眼を回しそうだけど」

さすがにカウンセラーのまねごとよりは事務職の方がごまかしやすいだろう。気を配って手配した^{フェアリードクター}妖精学者達に大上は感謝していた。なにより経営面の視察という名目は、立場をごまかしやすいという利点以外にも一つ利点がある。それは……。

「大上神父。そろそろよろしいですか？」

唐突に職員室の扉が開き、大柄な男が顔を覗かせ声をかけてきた。大上は四方との座談を中断し、現れた男に向け口を開く。

「ああ学園長、わざわざすみません。こちらはいつでもかまいませんが」

そう言いながら大上は席を立ち、学園長の待つ出入り口へ徒歩を進ませた。

「ではシスター四方、行つて参ります」

「はい、がんばってくださいね」

聖女の笑顔に見送られ、大上の「調査」が始まった。

「創立からは約三十年になりますか……」

大上は学園長と共に学園内を巡回していた。彼は一度研修の日程が決まったときに挨拶に訪れたのみで、学園内をよく知らない。そこで学園長自ら、大上を案内する役を買って出ている。この役目は本来、イベントや日曜礼拝などで既に何度も学園に訪れている^{よも}四方が担うべきなのだが、学園をより良く知ってもらう為にとの配慮で現状に至っている。

「あそこに見える大樹は、学園創立時に植樹したものです……あそこまで立派に成長しました。今では生徒達に「伝説の樹」などと呼ばれております……」

学園の歴史を語りながら、学園長は若い神父……の姿をした侵入者に、各教室や設備を案内して回る。大上は歴史に頷き説明に耳を傾けメモを取りながら、学園長の後について行く。自分で調べるよりも的確な情報を得られるのだから、侵入者としてこれほど楽でありがたい申し出はない。しかし反面、騙しているようで……いや、実際に騙しているわけだが……申し訳ない思いも中心にこびりついている。

「学園長は創立当時から今の役職に？」

申し訳ない気持ちをごまかすためなのか、大上は説明の合間を縫うように、軽い座談を挟む。質問自体に深い意味は特に無いが、何気なく出た言葉がこの質問。

「いえ、私が学園長に就任したのは……もう七年は過ぎましたか。私の友人だった前任者が突然の事故により天へと召されましてね。私は当時学園の部外者でしたが、彼の遺言により学園へ招かれ学園長を務めさせてもらっております」

柔和な笑顔が印象的な、年は五十半ばと見受けられる学園長。彼が着ている司祭服がゆつたりとした物であることもあり、ふくよかな印象も同時に大上は受けていた。そのトー

タルイメージが大上に、学園長は学園創立時から重鎮だろうかという勝手なイメージを抱かせてしまったが、よく考えればそれ相応の歳だと勝手に思いこみ少し失礼な質問をしてしまったと後悔し始めていた。といって下手に謝ったり無理に話題を変えては更に失礼かと、大上はそのまま会話を続けることにした。

「七年ですか……色々ご苦労も多かったのでしょうかね」

「当たり前障りのない返答だが……しかしもう少し言葉を選べなかったのかと、大上はまた口にしてから後悔を始めた。

潜入調査自体は良い滑り出した。しかしあまり役職的な立場になることの少ない大上にとつて、今も、これから、苦労は続くだろう。なぜなら彼は、尊敬語や謙遜語などを含めた形式的挨拶や会話が苦手。今まさに大上は、この「目上の人との会話」に苦労していない。真つ最中。自称ハードボイルドはそもそも型破りな者なのだから、形式的になる必要はない。そう、これはハードボイルドが故に無口だから苦手としているんだと自分に言い訳をすることを大上は忘れない。ハードボイルドだからとかと言うよりは、自分を正当化するために。後悔を前向きに捉えるために。

「何をして「苦労」と捉えるのか。それは人それぞれであり、定義的な物差しがあるわけではありませんか、大上神父」

大上が心中で汗を流しているのを見越しているか定かではないが、学園長は諭すように、若い神父に宗教的説教を始めた。

「例えばそうですね……この生徒達について言えば……」

足を止め、学園長は廊下から窓越しに校庭へと視線を移す。大上もそれにならない視線を外へ向けた。目に映るのは、ジャージ姿で体育の授業に汗を流す女生徒達。今日の授業内容は高飛びのようで、設置されたポールを背面から飛び越え校庭に敷かれたマットへと着陸する様子が小さいながらもよく見えた。

「神の教えを広める身としては、本来ならもつと神学に力を入れ神の御心に触れられる機会を増やすべきだと、よく兄弟達からは指摘されます。しかし我が学園へ入学する生徒や入学させる親御さんは、そんなことは少しも望んでいないのが現状です。この板挟みを、苦労と言えば苦労だと人からは映るでしょう」

視線を女生徒達に向けたまま、しかし言葉は大上に向け説教は続く。

「ですがね、大上神父。本来神の教えとは強制して行う物ではありません。むしろこの学園は他の環境よりも神の御心に触れられる機会が多いのですから、自ら進んで神の道を歩もうとする生徒も現れるでしょう。少しでも多くの生徒が「真実の教え」に気づいてくれるのなら、こんな幸福なことはありません。故に苦労などと考えもしないのですよ」

視線を大上に移し、微笑む学園長。なるほど、貫禄はなにも見た目の印象だけではないようだ。大上は感心しながら、そうですねと相づちを打った。

「苦労といえば……私よりも大上神父、あなたの方が大変なのでは？」再び視線を女生徒達に向けながら、学園長は僅かに笑いながら続ける。「女生徒達に囲まれる生活は、男であるあなたには色々と苦労が絶えないと思いますよ？」

全くその通り。いやむしろ、そう言われると余計意識してしまい、自制するのが大変になってくる。先ほどまで何気なく見ていたジャージの女生徒達ですら、その一言で刺激的な光景に見えてしまうくらいなのだから。まだ今が冬で良かった。薄手の体操着なら彼の

妄想はもつとヒートアップしていたかもしれない。

「あつ、いや、これもまあ……神の与えられた試練なのでしょう」

僅かに頬を赤くしながら、大上は神の教えハドボイルド精神を何度も心につぶやき始める。

「では、その試練を乗り越えるためにも次へ参りましょうか」

柔らかな笑みを携えたまま、学園長は若い……あらゆる意味で若い神父を先導していく。

「では大上神父、私はこれで」

学園内を軽く一回りしてきた二人は足を止め、学園長は軽い会釈と共に大上へ声をかける。

「わざわざありがとうございます。ではまた昼食時に」

そして大上は彼よりも深く頭を下げ、しばし遠ざかっていく学園長をそのまま廊下で見送る。そして顔を上げた大上は軽く息を吐き出し、すぐ脇にあったドアノブに手をかけた。

そのドアには資料室と書かれたプレートが貼られている。

ガチャリと音を立て開かれるドア。中は少々かび臭く埃っぽく、良くも悪くも資料室らしい雰囲気。大上はキョロキョロと辺りを見回し、室内にあると聞いている物を探し始めた。

大上が聞いたのは聖パトリック女学園の歴史と経理資料のある場所。たしかに大上はそれを調べるために資料室の使用許可をもらってはいるし、その資料も必要な物だ。しかし今大上が探しているのはそのような紙の束ではない。

「お、あつた」

大上が目をとめる先にある物。それは一台のパソコンだった。

雰囲氣的に古めかしい室内にあつて、そのパソコンは少々場違いではないかと思わせるほど、綺麗な最新式のパソコン。側にはスキャナとプリンターの業務用複合機も設置されている。パソコンに繋がっている配線は一つにまとめられ、床の中へきちんと収納されていた。

大上はパソコンの電源を入れ、立ち上がるのを待った。真っ黒な画面にぼんやりと白い文字が浮かび上がり、消え、そして今度は奇妙な旗のマークが映し出される。

「さすがお嬢様学校。ちゃんと最新式のOSにもう対応させているのか」

画面を見つめながら大上が感心をつぶやいたその時、突然画面が不自然にゆがみ始めていく。ディスプレイの調子が悪いのか？ しかしそれを見ている大上は全く慌てる様子がない。

じつと大上が見つめる先で、画面は更に奇妙な物を映し出し始めた。髪の毛？ どうやら人の頭らしき物が映っている。顔すら全て覆い隠している髪が、どんどんアップになっていく。まるで画面の中から外へと飛び出しそう……いや、もう飛び出している。画面がまるで水面のように波打ち、だらりと長い髪がキーボードの上へとたれ落ちる。画面の縁を内側から指でつかみ、今すぐにでもずりりと頭が、身体が、出てきそうな勢い。そして謎の何者かが、つぶやく……。

「ちよつ……出られない」

大上は後頭部を掻きながら、溜息をついた。

「アホか……なにやってんだよ」

罵倒されながらも、間抜けなその何者かはうなりながら、それでも何とか画面から出ようとしている。長い髪が揺れ、キーボードの上に積もっていた埃を綺麗に払っていく。

「いやほら、昔あつたじゃない。こんなホラー映画(^_^)」

どうにか画面から出ている頭だけを精一杯あげて、ホラー少女は笑っている。

「ていうかね、ちっちゃいのよ。15インチの画面じゃさあ。もっと大きな画面用意してくれないとお(---#)」

「誰がパソコンのディスプレイから人が出てくる事を想定するんだよ」

理不尽な文句と、まるで語尾に顔文字でも付けているのではないかと思えるようなオーバリアクションに大上があきれながら答える。

「だいたいさ、お前見たこと無いだろ。そのホラー映画」

ずいぶん古い映画だ。話に聞いたことがあったとしても、実際に見ていたかどうかは彼女の歳を考えると非常に怪しい。ちょうど学園の生徒達と同じ中高生くらいに見えるその少女の、実際の歳を知っている大上なら尚更そう思える。

「いいから普通にでてこいよ」

このままでは埒があかないことを少女も察してか、大上の要望通り普通に……彼女にとって普段通りの方法で画面から外へ出ようとしている。

画面の大きさに合わせ、瞬時に身が細くなる少女。そこからゆるりとウナギのように画面から勢いよく飛び出し、そして瞬く間に宙に浮いたままポンと元の、人間大の大きさへと戻った。

「いやね、動画がアップされててそれ見たのよ最近。だからせっかくだし、ケンちゃんの前でやってみようかなあって(^^)」

飛び出した少女は制服、質素ながら高級感溢れるここ聖パトリック女学園の制服を着ていた。彼女は机の端に腰を下ろし長い髪を半分ほど手で右側に束ね、赤い飾りの付いたゴムの髪留めでくくりながら先ほどまでの奇行について言い訳を始めている。

「わざわざ髪ほどこいて待ってたのにさあ……」

右側をまとめ終え、今度は左側の髪をまとめ始めている。その様子を、大上は腕を組みながら眺めていた。

「なんだ、とうとう悪霊にでもなったのかと思っただがな」

「あ、そーいうこと言うかなあ」

皮肉混じりに非難の言葉を投げかけられ、少女は頬をふくらませ抗議する。

「私は幽霊みたいなものっていうか、電脳霊だけださ、れっきとした文車妖妃(ひんぐろまよつひ)って妖怪なの。ま、私は手紙からじゃなくてメールから生まれてるけどね(^^)」

第三者、それも普通の人間から見ても、悪霊と妖怪にどれほどの違いがあるのか判らないうが、少なくとも彼ら人外存在にとって、これは大きな違いである。妖怪は、例えば人間に善も悪も混在するのと同じように、彼らの中でも混在している。しかし悪霊は悪の霊、つまり悪人と指さされるのと同じように侮辱的な言葉になる。

「女子高生の無駄なメールから生まれた一歳児か……」

「あー、無駄とか言うなあ」

他愛もないメール交換は、確かに外から見て無駄なやりとりにも見て取れる。しかし当

人達にしてみれば大切な交流であり、すぐに消去されるとしてもそこにはちゃんと意味があった。だからこそ彼女が生まれたのだと、そういえば妖精学者フェアリドクターも言っていたなあ……などと、大上はぼんやり思い出していた。

「だいたいさあ、人をわざわざこんなところにまで送りつけといて、そーいうこと言うかなあ(--#)」

「よく言うな。「スパイってちょっとかっこいいよねえ」とか「パト女の制服着られるの楽しい」ってノリノリだったの誰だよ」

生まれてからまだ一年と数ヶ月しか経過していないが、既に容姿同様の、中高生並みの知性を持つている彼女は、今回の潜入調査にはうってつけの人材だった。先ほど登場したように、彼女はパソコン……ネットの中を住処としており、通信が繋がっていればそこを出入り口はどこへでも潜入できる。そしてネットから生まれた彼女は当然のようにネットを巧みに使いこなし情報を収集するのに長けている。

ただ難点は、彼女の誕生が女子高生のメールからということもあって、彼女もまた今時の女子高生そのままに、多少軽い性格だということだろうか。

「それより、ちゃんと調べといてくれ……」

「それよりってなによあ。もうちょっとさあ、この角川藤美ふじみ様に感謝の気持ちとか、そーいうのはないわけ？」

ムスツとした表情を大上に向け、いらだちを隠さずに態度で示す。大上は眉間にしわを寄せ、また後頭部を手で搔いている。

「あー悪かった。角川藤美様のおかげで大変助かっております。感謝してますから、頼んだりストを見せてくださいお願いします」

「なによそれえ、その投げやりな態度はあ」

棒読みな謝罪に満足するはずもないが、そもそも大げさな態度ほど腹を立ててもいなかった角川は、大上に頼まれていたリストを見せるために自分が出てきたパソコンへと近づいた。

「ていうかさあ、ハードボイルド気取るんなら、もうちょっとさ、それらしい態度って無いの？ 仮にも女の子相手にする態度じゃないよねー」

それは全くその通り。思わぬ反撃に、大上は寄せていたしわを更に深くしてしまう。角川はその様子を見られたのが嬉しかったのか、口元を緩ませ満足げだ。

角川はパソコンの前面にあるUSB差し込み口に指を当てる。すると画面上にあるマウスカーソルが動き出した。彼女は直接自分の指を接続コード代わりにし、入力端末を使わず自分の考え通りにパソコンを動かしていた。

「聖パトリック女学園セントパトリックって校内のネット環境が充実してるのよ。ちゃんとサーバも用意してあって、学園内の端末ならどこからでもデータが閲覧できるようになってるし。もちろんそれなりのセキュリティも万全だけど……ま、私には関係ないわね」

今は外から操作しているが、その気になれば中に潜り込み隅から隅まで閲覧することも可能。そんな彼女に、パソコン上のセキュリティなど確かに意味をなさないだろう。

「これね、生徒名簿。ちゃんと顔写真もあるから、在学生をみんなチェックできるよ」
大上がまず真つ先に確認したかったこと。それはあの夜に刃を交えた少女の確認。ハッキリと脳内に刻みつけた顔の記憶とディスプレイに映し出されている一人一人の顔写真と

を比較しながら、大上はグノーシスの修道女を探し始めた。

この作業は時間が掛かる。なにせ一人一人確認していく必要があるから。だからこそ、大上はそう滅多に人の来ない資料室という場所と、やはり滅多に人の来ない午前の授業中という時間を選んでいった。角川と密会するという意味においても、この場所と時間はとても重要だった。

「潜入調査するならさあ、私も転校生とかで潜入したかったなあ。そしたら、もっとメル友増やせたのになあ。」

大上が調べている間暇な角川は、近くの机に腰掛け足をぶらぶらさせながら軽い不満を漏らし始めた。

「面倒なんだよ、手続きが。それに俺やチャコさんの研修組と同時期に転校してきたら怪しまれるだろ？　どこの誰が敵なのか判らないんだから、少しでもリスクは小さくしたいんだよ」

角川は聖パトリック女学園の制服を着ているが、在学生ではない。人目を避けながらの調査が可能な彼女を進入させるのに、無理をして転校手続きをする必要はなかった。それ以前に、そもそも大上を研修員として潜入させること自体かなり無理をしている。突然研修を申し出ている上に女子校に男を入れてくれと頼んでいるのだから。四方や彼女の所属する教会の口添えがなければ難しいことだっただろう。そのような状況で、更に転校生など潜入させるにはあまりにリスクが大きくなる。必要ないなら無理をすることもないのは道理だ。

「でもさー、つまらないんだもん、ん、ん」

マウスをカチカチと鳴らしている大上の横で、まだ角川は不満をたれていた。大上達の苦労は、角川当人にとってみればどうでも良いことなのだろう。

「私まだパト女のメル友って20人しかいないんだもん。せつかくだしもっと増やしたかったのになあ。」

メールから生まれた妖怪は、当然メールすることに自身の意義を見いだしている。メル友を増やしメールをやりとりすることが生き甲斐なのだ。そして今も当然のように、大上に話しかけながら携帯片手に画面も見ずメールを打っていた。

「うまくいけば21人目が出来る……っと、その21人目見つけたぞ」

ディスプレイには一人の女生徒名簿が映し出されている。大上の声に反応し、角川はのぞき込むように大上の横へ顔を並べディスプレイを凝視した。

「この娘かあ……なんか「戦う女の子」って感じじゃないね。綺麗な顔して、なんていうのかな、ぶつちやけありえないって感じ？」

なにがどうありえない感じなのか、いまいち大上には言葉で伝わってはいないが、彼女の言いたいことはニュアンスで感じ取った。

正直に言えば、大上も少々自分を疑っていた。最初うつかり見逃してファイルを一度めくり直してしまっただほど、以前出会ったときの彼女と写真の彼女では印象が違いすぎる。

特に、あの時終始激怒の感情を込め大上を睨みつけた瞳と、ほぼ感情の見られない写真の瞳では伝わる雰囲気の違いすぎる。もっとも、実物と写真とで印象が違うのは当然といえは当然なのだが。

しかしじっくり見れば、なるほど確かに彼女に間違いないと、大上は納得し始めた。利

発そうな顔と、そこから感じる冷静な印象。あの時のような熱い瞳で睨みつけてこない分、冷静な印象はより増しているが、あの時の彼女に間違いないだろう。この写真で更に確認できたのは、被り物ウェア・ウルフをしていて判らなかつた彼女の髪。その長く美しい髪はバストアップの写真では収まりきっていない。また日本人には珍しいくらい薄い色も特徴的で、黒髪のとやとは違う輝きを放っていた。ここが規律の厳しい聖パトリック女学園お嬢様学校という事を考えると、どうやら染めているわけではない。総合的に見て、なるほど角川の言う「ぶつちやけありえない」という美しさを兼ね備えていると言えた。

「月原恵美……エミりんか。おけ、ちよつとメル友みんなに聞いてみるね。」

早速とばかりに、角川はディスプレイに表示されているプロフィールを見ながらメールを打ち始めた。ネットとメル友という彼女の幅広い交友関係ネットワークは彼女の強みであり、また今回潜入調査に協力してもらっている理由の一つにも挙げられている。名簿からでは判らない月原恵美の性格や周囲の人々などを割り出すには、大上よりも遙かに彼女の方が適任だ。

そもそも今回の潜入調査をするきっかけとなつた少女との出会い。月原という修道女シスターが食いついた狼男ウェア・ウルフ、出現情報は、妖精学者の天道寺を通して角川の手によつてされた流石だ。彼女がメル友に「噂」という形で流した情報を、おそらく月原はこの学園で耳にしたのだろう。そして半信半疑のまま確かめに出向き、見事狼男ウェア・ウルフを発見したところだろうが、大上達にしてみれば、角川のおかげで見事に月原という修道女シスターが釣れたという結果。このような成果をきちんと上げているだけに、角川の交友関係ネットワークは侮れない。

「頼むよ。俺は……そうだな、ちゃんと研修らしいことをしておくか」

表向きの名目は研修生なのだ。本来の目的ではないが、偽装するためにもやるべき事はやっておかなければ。大上は月原のプロフィールを数枚プリントアウトし終えたところで席を立ち、学園の歴史や経理関係のファイルを探し始めた。

「ああ、あれだ……もしお前が転校生として来てたら、今頃みっちりレベルの高い授業を受けてなきゃならなかつたんだぞ？」

振り返り角川を見つめながら、にやりと意地悪く微笑む大上。対して角川は携帯から顔を上げてそれは嫌だとオーバーなほど苦い顔を見せていた。

しばらく調査を角川に任せた大上は、資料のとりまとめや学園長らとの昼食、午後は四方と園内の視察に回るなど、表向きの仕事をこなしていた。潜入するための口実に使った視察という役回りに、グノーシスの修道女シスターを探し根元となる異端教団の本拠地を探し出すという本来の目的に費やす時間を奪われている。少女の身辺調査を始めたばかりの現状で大上に出来る事は角川の報告を待つだけなのだが、大上は焦りを感じていた。

そもそも、潜入するまでに三週間という時間を費やしている。それを乗り越えやつと潜入できただけでも良しとすべきなのだが、それでも大上は焦っていた。

異端教団カルトの目的が判らない。大上の焦りはここに集約されている。

大上が少女と出会つたのは偶然だ。撒き餌を準備しばらまいたのは確かに大上と彼の仲間達だが、その撒き餌にどんな相手大物が集まるかまで予測は出来ていない。もしかしたら月原よりも先に、ただ好奇心で群がった人々に姿をさらすことになつたかもしれない。そうなればそれで、より噂が広まるので大物を釣り上げる率が上がるだけではあつたが……な

んにしても、目標となる相手を特定しないやり方だっただけに、釣れた魚に釣った本人が戸惑っているのは事実。

大上は学園在籍の先生シスターと話があるという四方と別れ、一人で職員室のある教会へと戻ろうとしていた。そんな帰路の中で、大上は焦る気持ちを落ち着かせる意味も含め自分なりにあれこれと脳内の整理を始めた。

あの少女がグノーシス主義の異端教団カルトに所属する修道女シスターであることは、彼女の着ていた黒い尼僧服の胸元に白く刺繍されたグノーシス十字が証拠となっている。しかし異端扱いされているとはいえ、グノーシス主義は武装集団ではない。にもかかわらず槍を構え突然襲ってきたのは解げせない。狼男ウエア・ウルフを邪悪な存在と勝手に決めつける事自体は、グノーシス主義であることの直接的な意味はないだろう。その点はおそらくプロテスタントでもカトリックでも同じだから、その点は……自分が狼男ウエア・ウルフなだけに切ない事実だが……考慮に入れる必要はなさそうだ。問題点は「武闘派の異端教団カルトがこのあたりに存在しており、この学園と何らかの繋がりがあると思われる」という点だ。

もう一つの問題は、武闘派修道女シスター月原恵美。彼女はカウンター・ハンターとして倒すべき相手なのか救うべき相手なのか、その問題。

彼女は大上のことを両親の敵かたきだと叫んでいた。むろん大上に心当たりは全くないが、彼女にしてみれば狼男ウエア・ウルフなら全てが敵かたきなのだろう。大上は彼女と出会ってからこれまでの間に、狼男ウエア・ウルフによる殺人事件について調べていた。大上にとって残念なことに、一般的な人間がイメージするままの、邪悪な狼男ウエア・ウルフも少なからず存在している。当然そんな連中が引き起こした殺人事件もいくつもあり、それらの表に出ない事件を三週間の間調べ続けたが……少女が関わっていそうな事件は見あたらなかった。

少女の証言通り、実際に彼女の両親が狼男ウエア・ウルフによつて殺害されたのならば、今回の件とは別にその狼男ウエア・ウルフを探しだし処置くわいをしなければならぬだろう。不当な狩りを続ける狩人ハンターがいるなら、その標的が人間であれ魔物であれ、事の解決に乗り出し悪しき狩人ハンターを罰するのがカウンターハンターなのだから。

もし少女の証言が偽りなら……なぜそのような事を少女があの時口にしたのかを解決しなければならぬ。あの時の雰囲気から、彼女が嘘をついているとは思えないが……だとしたら、なぜそのような事を思いこんでいるのかが問題だ。両親が死んだ事実を心が否定するあまりに幻影を見たのか、それとも誰かに嘘を吹き込まれているのか……どのような理由があるにせよ、それが彼女を異端教団カルトの狩人ハンターにした原因となっているなら、彼女のためにも原因を取り除く必要がある。

いずれにしても、月原という少女に接触する必要がある。大上の思考がそこへ行き着いた時、彼はまた大いに悩んだ。

さて、どう接触すれば良いのだろうか？

ハードボイルドを気取る男は、彼の理想とは正反対に、女性の扱いに不慣れである。仮に慣れていたとしても、女生徒に異性の研修員が声をかけること自体色々問題があるだろう。今日の昼食という懇談の席でも、学園長や他の先生達から女子校における異性の立場をあれこれと聞かされていたところだ。その点からも不用意に近づくべきではないのだが、しかし全てを角川に任せるわけにはいかないだろう。どうにか人間の姿姿で接触は図りたいが、さてどうするべきか……。

「……あれ？」

悩むハードボイルド気取りが教会の扉を開けると、そこには正面の大きな十字架に祈りを捧げている一人の生徒がいた。そのこと自体はここが学園の教会であることを考えれば不思議でもなんでもないが、思考の海を漂っていた大上には少女の目撃が不意打ちに近く、思わず妙な声を上げてしまった。

大上の声と扉が開く音に生徒が気づき、少女は立ち上がり振り向いた。そしてまた大上は声を上げそうになったが、さすがに今度はその声をすんでの所で飲み込むことが出来た。

月原恵美だ。祈りを捧げていた女生徒は、先ほどまで大上がどう接触すべきかと悩んでいたその当人。振り向きざまになびいた髪が夕日を受け金色に輝き、清楚な顔立ちを更に引き立てるこの一瞬、大上には月原が聖母にさえ見え彼の鼓動を一気に逸らせた。その幻は教会という雰囲気だからこそ見えたのか、それとも彼女の美しさからか……などと考える余裕は、当然大上にあるわけがない。

「あつ……ああ、すまない。邪魔をしたようだね」

動揺していることを悟られないように、出来る限り落ち着いた雰囲気を出そうと大上は勤めた。それがかえって普段より芝居がかった調子になってしまったが、初対面……少なくとも人間の姿では初対面である月原に、大上の様子がおかしいことなど判るわけもない。

「いえ……」

たった一言、しかし一言だからこそ、凜とした鈴の音を思わせる声。当然のように大上は更に動揺した。

さて、どうするべきか。図らずも接触してしまった月原タイゲットに、この後どう切り出し動くべきなんだ？ 大上は焦った。月原はこれといって大上に興味があるわけでもないのか、会釈をすませこの場を立ち去ろうとしている。このまま今日のところは見送るべきなのか？ 確かにその方が無難ではあるが、しかし動揺している大上は相手に変な印象を与えてしまっていないかと変に焦り、どうにかその印象を取り返せないかと考え始めてしまっている。下手に動けばかえって怪しまれ、今後に支障を来す可能性もあるが、そこまで大上の思考は回っていない。月原は少し屈み、足下に置いてあった物を手にとって退場しようとしている。焦る大上。どうする？ どうする？

「……バケツ？」

思わず大上はまた妙なことを口走った。しかし突拍子もない言葉というわけでもない。月原が手にした物……汚れた水の入った銀色の清掃用バケツが大上の目に止まり、何故彼女がそんな物を持ってきていたのか疑問に感じた。それが瞬時に言葉へ出てしまったに過ぎない。

「雑巾がけをしておりましたので……」

見れば確かに、彼女はバケツと共に雑巾も手にしている。どうやら彼女は教会の清掃を一人で行った後に祈りを捧げていたところだった様子。

「ああ、そうですか……ご苦労様です。お一人で清掃を？」

思わず口にした言葉だったが、それが大上を救った。一言をきっかけに会話が成り立ち、大上の心を落ち着かせていった。更に最初の接触ファーストコンタクトで下手な印象を与えずにすませることも出来、会話をすることでむしろ好印象を与える機会チャンスにも恵まれたのだ。教会でのことだけに、神へ感謝したいところだ。ウエアウルフ 狼男を受け入れてくれるのなら。

「はい……勝手にやらせていただいていることなので、お気になさらずに」

ミッシヨン系の学園とはいえ、信心深い生徒は皆無だと聞いていた。そんな中自ら教会の清掃をするとは……彼女の信仰心は確かな物のようだ。それがグノーシス主義へ傾いた物だとしても。

「そうですか、しかし大変素晴らしい心がけですね……ああ、私は大上賢。本日より研修のために学園へお邪魔させてもらっています。よろしく」

「朝礼で伺っております」

軽く会釈をして自己紹介をすませる大上に対し、月原は簡素に言葉を返した。どうやら月原は大上が思っている以上に、良くも悪くも彼に対し関心がないようだ。これは最悪のケースを逃れられたと捉えるべきか、それとも厳しい状況からのスタートとなったと捉えるべきか、その判断は難しい。

「普段からこのような事を？」

どちらにせよ、大上は出来る限り彼女のことを色々と探り出そうと会話を続けた。当人にとっては迷惑かもしれないが、大上にとってチャンス逃す手はないのも道理。

「はい……」

しかし大上の思惑を外れ、会話が弾まない。どうやらあの時の、槍を手にしたときの彼女と違い積極的に絡んではくれないようだ。おそらく印象同様に本来の性格も冷静クールなのだろうと大上は推測した。

そうと判ったところで、さてどう攻めるか……大上は悩み、そして次の言葉を口にする。

「そうですか。ええっと……」

口にしたのは良いが、早速言葉に詰まる大上。彼女をどう呼べばいいのかに悩んだために。

大上は既に彼女の名前を知っている。しかし知っているのは月原にとって不自然なことだ。故に彼女の名前を口には出来ないが……だからといって「あなた」では印象が悪くなりそうだし、「お嬢さん」では気取りすぎている。こんな場合、どう呼べば不自然でなくなるのか……ハードボイルド的に考えても答えが出てこない。

「……月原。月原恵美と申します」

大上が困っているのを察したのだろう。彼女自ら名乗り出てくれた。

「ああ、申し訳ない月原さん……月原さんはこの教会に毎日清掃のために通っているのですか？」

救いの手が差し伸べられ会話を続けられた大上は、一つの思惑くもの元で会話を進めようと試みた。

「清掃と……懺悔ざんげの為に」

懺悔？ 礼拝ではなく？ 多少引つかかる言葉だったが、今そこを突き詰めると妙なことになるだろう。大上はそう判断し、今の疑問は頭から振り払い自分の計画を進める方に専念した。

「そうですか。それでは……大変不躰ぶしつけなお願いですが、月原さん。私に教会のことを色々教えてくださいませんか？」

大上の妙な申し出に、月原は表情を変えないまま。冷静クールな性格がそうさせるのか、それともあまりに突拍子もない申し出に戸惑っているのか大上には判断が出来ない。しかしそれでも彼は話を進めてみる。

「朝礼でお聞きになったと思いますが、私は研修の為にこちらへお邪魔しています。しかしこんな格好をしていても、実は経理の方が専門で教会などのことには疎いんです」大上は自分の着ている神父服を軽くつまみながら、話を続けた。「よろしければ、信仰に熱心な月原さんから、こちらの教会に関して色々とお話聞きたいだけだと助かるのですが……特に私の場合、生徒側からの見解というものが非常に重要なので……」

おかしな申し出だ。客観的に見て大上の申し出はおかしなところが多すぎる。確かに経理専門で信仰に興味のない関係者というのがいてもおかしくはないが、それを生徒の前で口にして良い物とは思えない。しかも生徒に個人的な助言を願うなど、立場を考えればあってはならない。異性なのだから尚更だ。

「あの……」月原が戸惑うのは無理もない。そんな状況だが、しかし月原の口からは意外な言葉が紡ぎ出される。「明日でよろしいですか？ 今日のもう遅いので……」

「ええもちろん。お伺いしたいことも多いので、明日の放課後にでも神学科の職員室にお越しく下さい」

思惑通りに事が運び、大上は満面の笑みを月原に向けた。

大上はこの時判つてはいなかった。本来なら断られて当然の申し出、惨敗率の高い賭に勝ったという幸運を。

「では失礼します」

再び軽く頭を下げた月原は、バケツを手に教会を出ていった。それを見送った大上は深く息を吐き出しこの場を乗り切った喜びに、静かに打ち震えていた。

そして冷静になったところで……いかに自分が愚かなことを口走っていたか、その事に気づき、大量の冷や汗を流し静かに打ち震えていた。

「えーっと……月原恵美、普通科一年一組。成績優秀スポーツ万能、おまけに美人で髪の色が薄いから学園の中で知らない人はいないって位の有名人ね^(^ ^)」

放課後……既に日も沈みメイドの作った夕食をすませた頃。大上は妖精学者^{フェアリードクター}の屋敷にて、学園でプリントアウトした月原のプロフィールを見ながら角川が情報網^{メル英}を駆使してかき集めた報告に耳を傾けていた。彼同様プリントを手に屋敷の主とメイドも同席している。「でもその割に、友達は少ないみたい。少ないってどうか……いないって感じ？ 普段から一人ではつかいいるみたいで、特別親しい人っていうのに、誰も心当たりがないってさ^(^ ^)」信じられる？ バサツとプリントの音を立て角川が両手を広げオーバーに語るが、それに誰一人としてリアクションを起こすことはない。角川もそれを特に気にとめず、話を続けた。

「かといってイジメ^{ハナ}られてるとか、そーいう訳でもないみたい。人付き合いに積極的じゃないけど、行事^{イベント}とかの実行委員とかには積極的に参加したり、奉仕活動とかも熱心なんだって。だから同級生や先生には頼られてるみたい^(^o^)」
奉仕活動か……大上は彼女と図らずも接触してしまった教会での出来事を思い出していた。彼女は雑巾がけを一人で行っていたと言っていたが、それも彼女が行う奉仕活動の一つなのだろう。

「やっかいだな。大上は彼女の善行に眉を……狼の姿に戻り毛深くなった眉をひそめた。おそらく彼女の慈善ぶりは信仰の深さから来ていると思われる。信仰が深ければ深いほど、信じた物が誤りであるとはなかなか認めないものだ。『魔物の全てが悪なのではない』という真実に耳を傾けてくれるのかどうか、彼女の慈善ぶりを考えると難しいことなのは明白だ。手を差し伸べてもその手を槍で斬りつけられてはたまらない。」

今にして思うと……大上は顎に手を当て、今日月原と取り付けた約束のことを思い出した。不躰^{ぶしつけ}で怪しげな大上の願いを聞き入れたのは、彼女にとって奉仕活動の一つと捉えたではないだろうか。困っている人を見捨てられない優しさ、彼女の性格からではなく信仰心による物だとすれば……行き着いた考えに、大上は思わず溜息をつく。

「あとね……見た目通りクールなキャラしてるけど、それが嫌みじゃないんだって。むしろ素直なところが好感持たれてるみたいで……んー、素直クールって感じ？」
「なんだそれ？」

聞き慣れない単語に反応し、大上が聞き返した。

「そのまま、素直だけどクールな子。ツンデレの逆？ 萌えよ、萌え^(*)」
「いまいち要領を得ない角川の説明は理解は出来なかったが、今それを聞き返すときではない。大上は彼女の説明を流し、報告を続けるように促した。

「まあ、とにかく好かれる要素はてんこ盛りだけど、かえってそれが近づきがたい雰囲気にもなってるみたいね。本人が交流に積極的じゃないしクラブ活動もしてないから、誰も親しい人がいないって感じかな^(-_-)」

再度友達がいなかったことを強調する角川。どうやら彼女にとって交友がないということ自体が信じられない様子だ。

「気になるんだが……」角川の報告が一段落したところで、館の主である天道寺^{てんとじ}が手にしたプロフィールを見つめながら問いかける。「両親が殺されたらしいから、ここに両親の名前が無いのは判るが……保護者の名前も無いのはどういう事だ？」

学園が管理している生徒名簿である以上、最低限保護者の名前と連絡先は記載されていて当たり前のはずだ。しかし月原の名簿にはそれが見あたらない。未成年である以上、孤児だとしても、いや孤児だからこそ、彼女を引き取った保護者がいなければおかしい。「えーっ、そんなのわかんないよお。」

あくまで月原と同じ学園に通う生徒達からの情報を集めただけの角川に、深い事情まで調べるのは不可能。そもそも親しい人がいないという月原の事を詳しく知る人物がどれだけいるのかも疑問だ。

「その名簿は間違いなく学園のデータベースにあった奴だよ。だから元のデータから書かれていなかったって事しか判らないよお。」

有能なスパイではあるが、角川にも限界がある。データにない物まで調べる事は、彼女には無理な話なのだ。

「他の生徒の名簿には、ちゃんと記載があったのを俺も確認してる。何故彼女だけ記載がないのか……どうもこのあたりがキーになりそうだな」

そもそも彼女が言う「両親を殺された」という事件自体が謎のまま。保護者不明まで発覚しては、ますますミステリアスな様相を呈してきた。大上は顎に当てたままだった手に僅かな力を込め悩み始めた。

「あー、そうそう。彼女の住まいだけど、ケンちゃんが尾行した通り、学園の女子寮で間違いないみたい。ただ気になるのは……あそこって、二人で一部屋のルームシェア制度を導入してるんだけど、彼女は一人で一つの部屋を独占してるんだって。あつ、先に言うけど理由なんか知らないからね。」

何故？ という疑問が沸くのを見越して、角川は先に予防線を張った。新たに吹き出した謎に対し、大上はうなりながら後頭部を手でかき始めた。

「これは……もはや学園と彼女に深い関わりがあると見るべきではなくて？」

これまで沈黙していたメイドが核心部分に触れてきた。そして彼女の言葉に、大上が言葉繋ぐ。

「それはつまり……学園と異端教団に深い繋がりがあって事で当たりってことか……」
必要項目が未記入のままでもかり通っている名簿。学園寮での特別待遇。どう考えても、角川が一人ではどうにか出来る範囲を逸脱している。学園の誰かが、あるいは学園全体が、彼女の学園での生活を支えているのは間違いないだろう。そしてそのようなサポートをしている理由は、彼女が異端教団の修道女であるから、という他に思い当たる物がない。

当初から学園が異端教団に関わりがあることを懸念していたとはいえ、生で学園の様子を見てきた大上にとってあまり信じたくはない事だ。しかしもはや、学園が大きく関わっていることは間違いないさそうだ。

「聖パトリック女学園か……パトリックの名前を持つ学園が、中で蛇を飼うとは皮肉な話だな」

「ん？ なにそれ鷹丸ちゃん。」

天道寺が苦笑混じりにつぶやいた言葉に、角川が反応を示す。

「ああ、聖パトリックってのはアイルランドの聖人だな。「アイルランド中から全ての蛇を追い出した聖人」って呼ばれているんだ。蛇ってのはキリスト連中が使う隠語で、異教徒のことだ」

キリスト教では、人類の祖であるアダムとイブをそのかし禁断の実を食べさせた蛇は邪悪な象徴とされている。異教徒もまた人々をそのかし神への道を邪魔する存在とされているため、蛇と異教徒を同一視している。

しかしこれとは反対に、キリスト教の異端派であるグノーシスでは、人類に英知を与えてくれた蛇を神聖な生き物としている。天道寺が言うように、蛇を追い出した聖パトリックの名を持つ学園内に、蛇を好み蛇そのものであるグノーシス一派が紛れ込んでいるのは確かに皮肉な話でしかない。

「実際には追い出したっていうよりは取り込んだって言った方が正しいんだがね」

天道寺は自分の説明に補足を入れた。彼が言うように、実際にパトリックが行ったのは異教となる土着の信仰を追い出すのではなく、上手くキリスト教の教えに取り入れて人々に広めた事が功を奏したとも言われている。元々キリストの祭りではなかったハロウィン等がキリストの祭りとして広まったのもこのような取り込みの結果である。

「そう考えると、グノーシスを取り込んだって見方も出来るな」

口元をつり上げ、大上も苦笑を漏らした。

「いずれにしても……洗いざらい学園のことを調べ上げた方が良さそうだ」

穏和な学園長や他の先生達を疑うのは気が引けるが、信仰という正義を信じるあまりの過ちだつてあり得る。それならば過ちを正すことがカウンターハンターの勤めだろう。

「藤美、明日からは学園長や他の先生達のことを調べてくれないか？」

「ほいほい。まっかせて。」

大上は角川に明日の指示を伝えながら、しかしそれとは別のことに思いを馳せていた。

その、ほんの僅かな沈黙を見逃さない者が二人ほど……。

「……あの顔は、女の事を考えてるな」

「そのようですね。いかにして見目麗しい女生徒を口説き落とすか……そんなことを妄想している、といった感じの顔ですね。まあなんと破廉恥なことでしょうか」

「ばっ、ちよっ、違うつて！　つか、もうちよっと言い方があるだろ！」

館の住人二人からかわれ、身を乗り出して抗議する大上。確かに、女……明日約束を取り付けた月原恵美のことを考えていたのは事実だし、どう接するべきかと悩んでいたのも事実。しかしあまりな言いように、抗議の声を上げざるを得なかった。なんとというか、ハードボイルド的に許される表現ではないだろう、ハードボイルド的に。

もつとも怪しいのは学園長だろう。

翌日、大上は学園内で表向きの仕事をごなしながら昨日一日で得た情報の整理と推理を脳内で展開させていた。

異端教団カルトの修道女シスターである月原と聖パトリック女学園の繋がりは深い。これは疑いようなない事実だ。そこで重要なのが、具体的に学園の誰が異端教団カルトに関与しているのか、だ。

月原の在学生名簿に手を加えられる人物となるとごく限られており、寮の特別待遇まで手配できる身分となれば更にその範囲は狭まる。その他月原のことに限らず、学園内で何らかの異端教団カルトに関わる活動を行おうとするなら……いくつも考えられる問題点の全てを処理できる人物となると、もう一人に限られてくる。

学園内でのトップ、学園長を置いて他に考えられない。大上の推測は何度繰り返してもそこに行き着いた。もう一人のトップとなるはずの理事長は、学園の内部に関してあまり口出ししないようにしているそうだ。これは設立当初からその方針は変わっておらず、理事長は学園と外部との接点を取り持つ程度しか動いてないらしい。大上が有栖学園あしすという外部の学園から潜入できたのも、互いの理事長同士付き合があつたことにあり、それだけこの理事長は外交に力を入れていると言えた。なにより理事長を容疑者から外すもつとも大きな理由は、彼はアイルランド人であり日本国内に在住していないことだろう。故に理事長と異端教団カルトとの関わりは無いだろうと大上は推測している。

こうなれば、もう学園長を最重要容疑者として今後の調査を行うべきなのだが……大上はそう決断するまでこの推測を何度も繰り返し返していた。どうにも、あの濃厚そうな学園長が武闘派グノーシス主義の一派に関わっているとは信じ難いとの思いがあつたからだが、結局は学園長を疑う方向で心を決めた。

信心過ぎて極楽を通り越す、という言葉がある。信心も懲りすぎれば本来向かうべき極楽や天国も目に入らなくなり、通り過ぎて邪道に陥おちいり害を及ぼす、という意味。学園長がこのような経緯で異端教団カルトを率いているならば、濃厚ながらも一方で武闘派的思想にたどり着いてしまった可能性は充分にあり得る……複雑な心境ながら、大上は自分をこう納得させていた。そして本当に学園長が異端教団カルトの一員なら、彼も救い出す必要があるかもしれない、とも。

カウンターハンターである大上が仕事の対象とする者達は、自分たちの利益のために魔物を刈る者が、自分達の正義に基づいて魔物を刈る者のどちらか。今回は間違いなく後者のケースで、仕事としては一番やっかいなパターンだ。信心深い故に悪を許さないという気持ちだが、武闘派という流れになつたのなら……説得は難しいだろう。月原という一人の少女だけならまだしも、学園長も含め教団まるまる説得するのはそう容易いことではない。だがそれでも、やるべきならやるしかない。大上は学園長に狙いを定めた時点で、ここまで腹をくくつた。

ならば……次に自分は何をすべきか。今後の行動に関して大上はまた悩み始める。学園長や他の先生に関する調査は昨日角川に頼んである。今日の夜にまた彼女の報告を聞くことになるだろう。それまでの間、自分がすべきことは何か？

「シスターよも四方は学園のことに詳しくあつたですね？」

角川情報網のメル友とは別口情報網に情報を集める。重なる話も多いだろうが、それだけ信憑性が増すというもの。大上は表向き有栖学園あしすから一緒に来たことになっている同僚と二人きりに

なるのを見計らい声をかけた。

「ええ。何度も訪れてますから多少は……それが何か？」

四方と学園との繋がりについては、昨日も聞いている。彼女が本来籍を置いている女子修道院と学園に元々接点があり、彼女は学園の行事イベントなどで度々この学園へ訪れていた、という話を。

「その……学園長はどんな方です？」

迷ったが、大上はストリートに尋ねた。四方は大上が「ある組織を追って潜入しに来た」というおおざっぱな目的は知っているが、どんな組織で、誰を追ってきたのかは聞かされていない。そんな四方に学園長の事を尋ねるのは、多少なりとも学園長と面識のある四方にとって気分の良い話ではないだろう。しかし四方に気分を害した様子は見られない。

四方は大上が ウエーブ、ウルブ 狼男 であることや彼の仕事……カウンターハンターについて理解が深く、信頼している。そもそも大上が学園に侵入するという時点で、学園や学園長に彼が疑いの目を向けることなど予測できたことだ。その時点で、自分が関わっている学園になにやら良からぬ事が起きるかもと不安にはなっていたが、とうに四方は覚悟してきたつもりだ。

だからこそむしろ、四方にしてみれば大上に全てを話してもらい、全面的に協力してあげられればと思っている。しかし大上は逆に、極力迷惑をかけるべきではないと必要以上のことを話しながらなかった。それは大上のハードボイルド……いや、そのような信念とはまた別の、彼なりの気遣いや優しさといったものの表れなのだろうが、優柔不断気味だとも言える。

「私がこの学園へ足を運ぶようになって四年ほどしか経っておりませんから、あまり詳しくは知りませんが……」

大上の性格を良く知っている四方は、だからこそあまり協力を押しつけるようなことは避け、尋ねられたことだけを、しかし出来る限り詳しく答えるようにしよう決めていた。

人の心を慈しみ労る修道女シスターでありカウンセラーである彼女だからこそその、大人の対応なのだろう。言い方を変えると、少々大上のハードボイルドが子供じみているということにもなりそうだが、そこは棚の上にも置いてあげるのが、また大人の対応というものか。

「特にこれといった大きなトラブルなどは無かったと思います……というよりも、静かな方ですね。保守派というか、自分から大きく行動されることはないようです。静かに学園や生徒の行く末を見守るタイプ、といった感じでしょうか」

保守派か……大上は心中で嘲笑した。もし学園長が異端教団カルトに関わっているとすれば、武闘派とはあまりにかけ離れている。だがかえって、武闘派やテロリストほど普段は目立たないように大人しくしているもので、そのように疑うと、ますます学園長が怪しく思えてくる。大上はそう感じ始めた自分に嘲笑していた。先ほどまではむしろ認めない方向で心が動いていたというのに、この変わり様は何だ、と。思いこむ方向が変わると一つ一つのこと違って見えるものだが、大上はここまで疑えるようになっていて自分が少し信じられないでいた。

「このような物言いは非常に失礼なのですが……」四方は眉間へ僅かにしわを寄せ、言葉を続ける。「良くも悪くも、目立たない方ですね。しかしその割には、なんといいましようか……存在感はある方だな。これは私の印象でしかありませんけど」

四方の言葉に大上も頷いた。大上は昨日一緒に学園内を回ったことや昼食時の懇談時の様子などを思い起こして、確かに存在感のある人だったと改めて認識する。

「普通に考えれば、徳の高い方なんだと言っべきなんだろうけど……」

大上は独り言のようにつぶやいた。もし彼を疑っていなければ、「徳の高い人」ですませただろう。しかし疑って見てしまうと……その存在感がより怪しく、そして不気味に見える。

「それと……あ、いや……」

大上は次の質問に移ろうとして、躊躇った。

月原のことを聞くべきかどうか。この質問に対して戸惑い、そして結局言葉にしなかった。

彼女は学園長以上に重要な容疑者だ。容疑者というより、彼女が異端教団カルトに関わっているのはもう明白な事実。しかし、だからこそ、四方に尋ねるのを躊躇ってしまう。聞けばより四方を事件に巻き込むことになり、それを大上が嫌ったのだ。

四方は協力を惜しむような女性ではなく、むしろ積極的になつてくれるだろう。そんな彼女の性格を知っているからこそ大上に躊躇ためらいが生まれる。ただの調査なら良いが、状況によつては戦闘もあり得る戦闘派が相手だ。出来る限り巻き込まない方が賢明だろう。角川のような妖怪なら戦闘になつてもそこから逃れる術がある為まだ良いが、四方はごく普通の人間だ。魔物や妖怪には理解があるが普通の人間なのだ。おいそれと巻き込める相手ではない。

自分のことを優柔不断な男だくらいに思っているかもしれない。それでも深く追求されないだけ助かっており、またそうしてこない彼女に感謝している。黙して語らず、それでも伝わる間柄というのはハードボイルドとしてあこがれるところだが、現実は厳しい。いや、どう思われていようと結果が同じならそれで良い。

「……教頭はじめ、他の先生方の様子はどうですかね……」

大上は当たり障りのない、しかし重要な事柄に話題を変え、四方の話をついていった。

そもそも、月原のことは直接本人に尋ねればいいのだから。四方に尋ねられなかったことをほんの僅か悔やみながらも、大上は自分に言い聞かせていた。言い聞かせながら、放課後を迎えていた。

「失礼します……」

資料整理という表向きの仕事を片付けながら月原を待っていた大上にとって、彼女の訪問は待ちわびていたもの。とはいえ、それを悟られてはならない。本人にも周囲にも。

「ああ月原さん、お待ちしましたよ。さて……ここではなんですから、礼拝堂の方でお話を伺つてもよろしいですか？」

自然に、ごく自然に。自分に言い聞かせるとむしろ難しくなりそうではあったが、大上はどうか好青年ウツクヤウジを演じ続けることに成功……していると自己評価していた。そしてその自己評価と実際の効果にあまり差分はない。それはただ、月原や職員室に残っている先生達が大上を良く知らないからこそ、という事ではあるが。もしここに四方がいれば……彼女なら大上の態度にぎこちなさがあることを感じただろう。

「はい……」

大上の提案を素直に受け入れ、月原は大上と並び礼拝堂へと向かった。職員室を離れた二人には知るよしもないことだが……二人が遠ざかったのを確認すると、職員室に残っていた先生達は僅かに声のトーンを落として語り合った。二人にどんな関係が？と。それはそうだろう。学園内で知らぬ者がない優等生と、昨日赴任してきたばかりの美形研修員が二人きりで……となれば、それは噂的にならない方がおかしい。あからさまにスキヤンダルを楽しむわけではないにしても、気になるのは当然だろう。気にならないのは、当人のみである。

その当人達は礼拝堂にたどり着き、最前列の長椅子に各々腰おのをかけた。さて……ここからが問題だ。大上はどう話を切り出すか迷った。そもそも変身後の姿見た目とは裏腹に女性の扱いになれていない大上。にも関わらずハードボイルドを気取るために最初の一言に変なこだわりを持ってしまう。人の印象は一言、最初の一言で決まる。ここをしくじるわけにはいかない……自分で自分を追い込みながら、大上は脳内にある貧困な語録を賢明に検索していた。

「まず、何かからお話ししましょうか」

出鼻をくじかれた。月原の方から話しかけてきた。既に今日の用件が互いに判っていただけに先方から声をかけてくることも予見できたが、しかし無口な女性だと思っていただけに、大上は不意打ちに一瞬たじろぎ……などと先制攻撃につらたえている場合ではない。大上はすぐさま気を取り直し、また好青年を演じ始めた。

「そうですね……まずは月原さんから見た印象でかまいませんので、学園のことを伺いましょうか」

経理上に必要な話……という名目はあるが、実際には本業であるカウンターハンターとしての情報集め。それをターゲット本人から聞き出そうというのだから大胆な行いだ。しかし当の本人ターゲットはそれに気づくはずもなく、大上の言葉通り研修員の役に立てるよう懸命に話してくれる。その懸命さ、熱心さは大上の良心への呵責かしゃくにもなっていた。彼女のあまりに無垢な献身に触れ、大上は自分が悪いことをしているなと思いつつも、これも最終的には彼女の為なのだと思いついて自分なりに言いかせもしていた。

「ご存じかと思いますが……聖パトリック女学園は三十年前にアイルランドの聖人である聖パトリックの……」

淡々とした説明が月原の口から伝えられていく。非常に事務的な話し方だが、しかし要点を押さえた解説は耳に入りやすく判りやすい。またどこかこなれた感じもするが、おそらく優等生の月原は、この手の解説を何度か経験済みなのだろう。大上は月原の話、まずはじっと聞き入っていた。

話を聞いているうちに、大上は月原の性格や思考を少しずつ理解していった。角川からの情報通り彼女は何事にも熱心に取り込むようで、一言で言えば「世話を焼くタイプ」だと改めて認識した。

「それと、こちらをご覧ください。こちらは学園の主な行事イベントとその際に募った募金の総額をまとめた資料です」

何より驚くべきは、彼女はわざわざ大上のために紙資料を準備していたこと。昨日大上から声をかけられた段階で、彼女はどうやら大上のために必要と思われる資料を一日でま

とめていた様子。その行動力はもちろん、初対面の相手にここまで熱心に世話を焼ける彼女に、大上は面食らっていた。むろんそれを表情に出さぬように努めながら。そして準備した資料も的確で、経理面で必要だろうと思われる項目は全て準備されていた。大上にとっては確かに的確な資料だが、本来尋ねたい事とは全く方向の違う資料だけに、大上の良心は更なる呵責かしやくに悩まされる。

そしてもう一つ確認できたこと。それは彼女のクールな一面。行動そのものは熱心だが、話をしていく彼女自身は淡々としており、表情一つ変えはしない。的確すぎて冷静すぎて、確かにこれではうかつに近づけない雰囲気になってしまふのもうなずけた。なんというか、まさに高嶺たかねの花という存在を醸かもし出している。

もつたいないな。大上の率直な感想はここに行き着いた。何事にも熱心で気が利き、準備にも抜かりが無く、おまけに容姿端麗と来れば老若男女からもてないわけがない。にもかかわらず一切変わらぬ表情とクールな印象が、人を彼女から遠ざけてしまっている。これをもつたいた言わずになんと言えば良いか。大上は心中で歯ぎしりをしていた。

「……以上です。何か他にお聞きになりたいことはございますか？」

月原は来客大上に定例的な言葉で一通りの説明を締めた。尋ねられた大上は、しばし沈黙するより他にすることがない。彼女の的確な解説はまさに非の打ち所が無く、研修員としてはこれ以上はないという素晴らしい解説に、他の質問などありはしなかった。ただそれは経理面の、研修員としての話。

「いや、素晴らしいお話をありがとうございます。ここまで熱心に語っていただけるとは思いもありませんでしたから、もう感服するしかありませんよ。ただ……」

ただ？ 自分の説明に何か不備があったらどうか。大上の一言に月原は……むろん表情には出さないが……僅か、ほんの僅か動揺する。

「月原さんの率直な感想もお伺いしたいんです。経理担当とはいえ、額面の数字だけを見ていてはきちんとした経営は出来ませんからね。月原さんは、この学園での生活は楽しんでますか？」

大上としては月原の個人的な話をもっと引き出したかった。むろんあわよくば異端教団カルトに繋がるような話も。その為にも、強引だが質問としては軽めの言葉を振ってみた。

「えっ……ええ。それなりに……」

ん？ なんだこの反応は。僅かにトーンの下がった曖昧な返答に、大上が疑問を感じるのは当然だろう。強引に話題を切り替えた事への戸惑いともとれるが、どうも様子がおかしい。表情こそ変化はないが、若干伏せ目がちになり、視線を僅かにそらせているのは、質問の内容自体に戸惑っているからとしか思えない。

思いも寄らぬ反応、これを逃す術はない……それは判っているが、続ける言葉が大上の中で見つからない。どんな言葉でも、この話題を続けることは彼女を追い込み傷つけることになるのは明白。目的のためとはいえ、それを判つていながら続けることが俺に許されるのか？ 大上は心中で葛藤を続けている。

「……月原さんは昨日この清掃をされましたが……」

結局、大上は話題を変えることを選んだ。ハードボイルドならもつとスマートに、的確な情報入手を心がけるべきだったかもしれない。しかしハードボイルドとして、女性を無下に傷つけて良いわけがない。いずれにしても中途半端だな。そんな自分を悔いながらも、

間違っではないかと大上は自分に言い聞かせた。

「ずいぶん信仰に熱心なのですね」

大上としては、話題を信仰や教会へもっていき、そこから異端教団に繋がりそうな話を探り出そうと試みるつもりだった。言葉としては「月原さんのような熱心な信者は生徒さんにどれほどいらっしやるんですか？」と続けるつもりでいたのだが、それを口にするとはなかった。

「いえ、私は信心深いわけではありませんから……」

当然大上は戸惑った。よもやこのような返答があるとは全く予想もしなかった。しかし驚いているのは大上だけではない。言葉を発した月原本人も自分の言葉に戸惑っている。

礼拝堂に掲げられた十字架の前で、強くハッキリとした否定。反射的に何故こんな事を……月原は自分が自分で思っている以上に、研修員の質問で動揺していたことを今更ながら悟った。そして言葉は発すれば取り返しが付かないことも瞬時に理解し、尚更動揺は強く大きくなっていくのを感じている。幸いなことに、月原は自分でも無表情なことを自覚しており、高鳴る心臓の鼓動が聞き取られない限り、激しく動揺していることまでは悟られないだろうと、願った。

さて大上はといえば……戸惑いながらも月原が動揺していることを悟っていた。表情はやはり変わってはいないものの、口調の強さから彼女が動揺しているのだろうと見抜いていた。しかしそれだけで、肝心なことが判らない。

何故ここまで動揺しているのか。そして何故ここまで強く否定するのか。

月原には親しい友人などがいないと、角川は報告していた。その事から、学園生活を楽しめていないという可能性は考えられる。だからこそ、先の質問に彼女が戸惑ったのは何となく判るが……信仰を否定するのはどういう事か？

彼女が異端教団カルトの信者であるが故に表向きのキリスト信仰を否定したのか？ それは考えられるが、どうもそれだけではないような……大上が僅かに考え込んでしまったことで、重くなった場に沈黙が続いてしまった。

「あの、では私はこれで……」

思い空気と沈黙に耐えられなくなったのだろう。月原はすっと立ち上がり、大上に軽く頭を下げ礼拝堂を後にしようとして大上に背を向けた。

「あつ、月原さん……」

慌てた大上が月原の背に声をかける。月原は背を向けたまま大上の言葉を待った。

「……私は研修員で……実はその、私も信仰とか、そちらにはまったく疎いもので……」
何を言い出しているのだろう。大上は自分の言葉を自分で理解できていない。そもそも信仰や教会に疎いことは昨日話しているし、それを名目に今日会っているのではないか。理性が冷静に自分を見つめる中で、大上は月原へ語り続けた。

「良かったら、今度はあなたのことを話してもらえますか？ 私は二週間の後にはここから去りますし、その、お友達や先生や修道女シスターさん達に話せないこととかあれば俺が、いや私が、聞いてあげられることも……」

なんと無様な。冷静な自分が、焦りながら口を動かし続けている自分を罵っている。このままではせっかく出来た彼女との接点がとぎれてしまう。その一点にしがみつくようにどうにか言葉を紡ぎ出しているにすぎないこの醜態は、ハードボイルドとはあまりにも

縁遠い。

それでも大上はしがみつきたかった。彼女との縁えんじに。何故これだけ必死なのか……自分でよく判らない。仕事に対する執着だけとは、どうも考えにくい。

彼女の何かがそうさせる。その何かとは……大上本人にもよく判ってはいない。ただ、ほっとけなかった。理屈ではなく直感で、彼女が何らかの不安を抱えているのが判る。それは彼女の言った「信心深いわけではない」という言葉が今でも妙に引っかかっているからなのか……やはり大上には自分の行動を冷静に分析など出来はしなかった。

月原がこの時の大上をどう見ていたのか……月原は軽く顔だけ振り返り一礼して、その場を駆けるように去っていった。今の大上に判るのはそれだけであった。

焦っている大上に、月原の頬が僅か、本当に僅か赤みが差していたことなど見えているわけもないのだから。

「なんか落ち込んでるね。どしたの？」

うなだれ何度も溜息をついている大上の様子を見て声をかけた角川だが、返事がない。ただの屍しかばねかとすら思えてしまう落ち込み具合に、さすがの角川もこれ以上は話しかけれなかった。しかし二度目となる報告の為に天道寺の屋敷へ集合したというのに、肝心な雇い主本主がこれでは、報告を始めて良いのか戸惑ってしまう。どうしたものかと角川は視線を天道寺に向けると、天道寺は苦笑しつつその視線に答える。

「ほっとけ。まあこっちの声は聞こえてるだろうから、そのまま報告してくれ、藤美。おいケン、お前の仕事なんだからしつかりしろよ？」

「ん……」

天道寺に声をかけられようやく顔を上げた大上であったが、落ち込み具合は変わらず。たれていた狼の耳を僅かに立てる気力はあるようだが。

しょうがないなど、今度は天道寺が溜息をつく。しかし聞く姿勢になったようである。たか、天道寺は角川に再度報告するよう促し、角川もようやく口を開くことが出来た。

「じゃあいい？ えつとね……学園長んだけど、評判は良いね。学園の中でも外でも。評判が良いって言うか……特に何も無いって感じ？ つかさ、みんな学園長なんかに興味ないしねー」

視点の違いはあれど、角川の調査は四方の証言と合致していた。目立つところが無い分、濃厚そうな印象がそのまま高評価に繋がっているところだろう。また角川の情報源が彼女のメル友、つまり生徒達である以上、彼女が言うように普通学園長に興味など無いだろう。

「他の先生とかも、ケンちゃんが気にするような話しはなかったなあ。あーでも、ケンちゃん格好いいって評判だったよ」

ここで少しくらい大上に何らかの反応があれば面白かったのだが、リアクションはゼロ。それだけ今大上が落ち込んでいるということではあるが、角川にとってみればこんなつまらないことはない。

「……でね、これだけじゃつままないから、もうちょっと学園長とかのこと調べたらさ、面白いものが見つかったよ」

今度は反応あり。大上が興味ありげに角川の方へ顔を向けた事で、彼女はニヤリと楽しみに口元を緩ませた。

「七年前に学園長……えつと、名前は「木宮大介」だつて。で、この人が学園長になる前まで、一切パト女じょと関わりがなかったつてのは聞いてたっけ？ でね、パト女じょに来る前までは宗教学の教授をやつてたみたい。で、なんか教員免許も持ってたみたいで、それで学園長になつたんだつてさ。」

学園長の職に就く前に何をしていたかは、確かに気になる点ではあった。しかしこの程度では「面白いもの」と言うには少々物足りない。出し惜しみしている角川は、周囲の様子にニヤニヤしながら言葉を続ける。

「この教授やつてるときの事をネット辿つて大学のサーバで調べただけ……研究テーマが「異教・異文化との融合」だつて。ほら、昨日鷹丸ちゃんタカマルが蛇をどーたらとか言つてたじゃない。あれつばくない？」

この情報には、うなだれていた大上も思わず身体を起こし反応してみせる。むろん天道寺も小さいながら声を上げ驚いている。彼らの反応に、角川はとても満足げだ。

「なるほど……おそらくその研究を通じて聖パトリックがらみで学園との接点があつたんだらうな」

腕を組み自分の推測を口にする天道寺。大上はその推測に首を縦に振り同意した。

「そういえば、学園長は前任の学園長と親しかつたらしいんだが……その研究で知り合つたのかもしれないな。藤美、前任の学園長については調べてあるか？」

大上の質問に、満面の笑みを浮かべていた角川の顔に曇りが刺す。

「それがさ……無いのよ、データが。とりあえずサーバにはね。紙資料で残つてるかもしれないけど、そつちは私の専門外だわ。」

学園長が替わつたのが七年前。当時まだデジタルデータに切り替わつていなかったとしても不思議ではないが……月原の生徒名簿の件もある。もし故意にデータを残していないとすれば、そこになんらかしらの秘密があるのではと誰もが疑うところだろう。どこかに何らかのデータが残つていれば良いが、もしそのデータが本当にないとしても、無い物を無いと確認すること自体が大切だ。それは骨の折れる確認作業だが、大切な調査。

「学園長は前任の事故死によつて、本人の遺言に従い学園長に赴任したと言つていたんだが……そのあたりも疑う必要がありそうだな」

温厚そうな学園長。その外見に隠された腹の底が、ますます黒く見えてくる。調査としては二日目でここまで調べが進むのは順調といえるのだが……しかし決定的なものは何一つ判っていない。異端教団カルトの存在も規模も、そして目的も一切が謎のまま。現状では学園長の怪しさばかりが浮き彫りになり、ただただ薄ら寒さを感じるばかりである。

「引き続き、学園長とその周辺の調査を頼むよ。特に前任の学園長についてな」

「えー、紙資料は面倒なんだけどなあ。」

渋る角川に、何のために制服まで用意してるんだよと促す大上。

「それと天道寺先生、学園長が前任の学園長から受けた遺言つての、本当の話かどうか確認できないかな？」

「だから先生は止めるつて……遺言も含め、一度有栖学園の理事長を通して学園の理事長や彼が在籍していた大学の関係者を紹介してもらつつもりだ。お前は学園外の調査が出来

ない状況だからな、そっちは任せておけ」

協力者達に感謝しつつ、大上はまた明日以降の調査について自分はどうするべきかを悩み始めた。

「ところで……」そんな折、これまで口を閉ざしていたメイドアイリンがその口を開いた。「月原さんの方は、進展ありましたか？」

がつくりとまたうなだれる大上。お前なあど苦笑しながらメイドを見る天道寺。笑い出す角川。発言者は一人、また口を閉ざし素知らぬ顔を決め込んでいる。

「おはようございます、大上神父。どうですか？ 少しは慣れましたでしょうか」

学園に潜入してから三日目。確かにそれなりに慣れ始めている。だがしかし、逆に戸惑い始めることもある。

「おはようございます。ええ、おかげさまで」

笑顔で返答するも、自分の顔が引きつってやしないかと内心心配している大上。なにせ相手は学園長。今一番警戒している張本人なのだから。

朝の登校。幾人もの女子学生が挨拶の声をかけてくれる中で不意に駆けられる男性の声に、大上は一瞬息を詰ませたが、どうにか平然と怪しまれないように挨拶を返すことが出来た。

「そうですか、それは良かった。色々判らないこと、困ったことがあればいつでも声をかけてください」

笑顔で会釈すると、学園長はそのまま校舎へと向かった。校舎と教会は校門からは別の方角になるため、このまま学園長と並んで歩く必要は無かった。それは今の大上にとつて都合の良い状況。大きく息を吐き出し胸をなで下ろしたい心境だが、むろんそれを大勢の生徒が見ている前でやれるわけではない。

それにしても……大上は校舎に向かう生徒達の波から外れながら考え込む。やはり学園長は何度会つても温厚な印象が崩れることは無い。もちろんそれでも学園長を怪しんでいるのに変わりはないが、もしかしてこちらの勘違いか？ と認識を改めたくなってしまうのも否めない。ターゲットとなる人物や団体が悪であるとは限らないのがカウンターハンターの仕事。それだけに、学園長が本当に善人である可能性は充分にあり得るのだが……それはそれでより面倒な事態になるのは目に見えているだけ、尚更悩ましい。

「おはようございます……」

不意に、後ろから挨拶の声。もう生徒達からは離れているはずなのに……振り返った大上は、また一瞬息を詰ませしてしまう。

「おはようございます、月原さん……」

目の前には見目麗しい女生徒が一人、深々と頭を下げていた。

どうして？ 昨日の今日で、あんな別れ方をして、まさか月原の方から声をかけてくるなんて。大上は戸惑いながらも挨拶を返したが、学園長の時ほど誤魔化し切れはしなかった。

「あの、大上神父……昨日は、すみませんでした……」

顔を上げ、月原が謝罪の言葉を口にする。どうやら月原も昨日の一件を気にしていたようだ。月原にしてみても、大上の言葉に動揺し逃げるように帰ってしまったのだから、気にして当然といえば当然だろう。大上が月原が動揺していたことよりも変に必死なアピールをしてしまった事を後悔していたように、月原は大上のアピールにおかしな点を感じるより、相手の言葉もろくに聞かないで逃げ帰ったことを後悔していた。

まずは謝罪しなければ。その思いを抱えたまま登校したところに大上の後ろ姿を発見した月原。思わず駆け寄り声をかけ、そして謝罪は出来たものの、ここから先の言葉が全く思い浮かばない。どうしよう。月原はまた一人で動揺し始めている自分に気づき、余計に言葉を詰ませた。表面上こそ変わらない月原だが、心中ではあたふたするばかり。

「いえ、こちらこそ……」

言葉に詰まっている間、大上の方から語り始めてくれた。これは月原にとって、僅かにホツと出来る間ではあるが……逆に今度は大上が悩む番。さてこの場をどの言葉で繋げばいいのか……。

「あの……」

二人の声が重なった。

なんだこのラブコメな展開は。よくあるシチュエーションに、思わず大上は吹き出してしまった。月原は笑いはしないもののふっと肩の力が抜けていた。

「失礼……どうぞ、月原さん」

場が和やかになった事に感謝しつつ、大上は月原に言葉を譲る。譲られた月原は意を決して、ようやく浮かんだ言葉を口に始めた。

「昨日の続き……また今日の放課後で、よろしいでしょうか？」

「えっ、ええもちろん。こちらからお願いとすることでしたから」

切れかかった縁えだじが繋がった瞬間だった。歓喜の声を上げたい衝動を抑えつつ、大上は丁寧に言葉を返す。

「はい。では……」

月原は軽く頭を下げ、登校する生徒達の中へと戻っていった。僅かの間それを見送った大上はくるりと方向を変え、教会へと歩き出す。

背を向けた二人は互いが見えていないから気づかないだろう。二人共が妙に足取り軽い事を。

「……なんか、不気味なくらい機嫌良いね。どしたの？」

昨日の落ち込み具合を知っているだけに、角川は終始にやけながら資料を探している大上の変わりようを見て、思わず背筋が僅かに寒くなった。

「ん？ 別になんでもないけど……」

絶対にそんなことはない。それだけは角川にも判る。午前中に紙資料を調べる約束をしていた角川は、資料室で大上和落ち合ったわけだが……彼が資料室に入ってきた時の上機嫌っぷりは、引いてしまうよりむしろ気でも違えたかと心配したくらいだ。

まあ、とりあえず角川にも、どうしたのと尋ねてはいるが大上に何があったかは推測できる。間違いなく月原とのことで進展があったのだろう。それは判るが……なんだろう、この気味悪いほどの上機嫌っぷりは。

「……惚れたね？」

「ばっ、そんなんじゃねえって……」

判りやすい男だ。角川もさすがに苦笑せざるを得なかった。

「いや、なんつーの？ ハードボイルドには美女が似合っつていうか、ほら、そーいうことだよ」

なにがそういうことなのか、全く説明になってないが……大上は言葉にならない自分の感情をどうにか無理矢理言葉で釈明した。

正直、自分でもよく判らない。何故ここまで心が熱くなるのか……。

「そもそもさ、俺の好みは、こう……シュツと口先の尖とがった、毛並みの美しい女性なわけ

で……」

「毛並みって……」

「ようするに、^{ウエア・ウルフ}同族が好みだと言うことなのだが、妖怪でも人間よりの角川にしてみれば、^{ウエア・ウルフ}狼男が持つ美の基準は理解しがたい。」

「いいから、黙って探してくれよ……あまり長い時間いられないんだからな」

実際には時間に余裕などいくらでもあるが、これ以上この会話を続けさせない為にも強引に作業に没頭させたかった。

命じた手前、自分も資料を手に取り調べていくが……意識の半分は月原のことに向けられていた。本当にどうして、こんなにも彼女のことが気になるのだろうか。大上は自己解析を試みている。

確かに彼女は美人だ。異性として非常に魅力的なのは間違いないが、表面的な魅力にはかり目を奪われているとは思えない。とすれば、他に何が？ 女性に惹かれる理由として、例えば笑顔が素敵だとか草草が可愛らしいとか色々あるだろうが、怒りの形相と、それは対照的な無表情な彼女しかしらない自分が、そのような理由で惹かれていたとは思えない。とすれば、いったい彼女の何が自分をこんなに熱くさせるのだろうか……。

パラパラとページをめくっては資料を本棚に戻し、また新たな資料を手にとってはページをめくる。こんな状況では探しているものを見逃してしまいそうだが、その危惧すら今の大上には思いつきもしない。

「ん？」

しかし大上はそんな状況で手を止めた。探しているものが見つかったのだ。

「あつた？^(^o^)」

小さな声であつたが、静かな資料室で大上の声は良く届いた。角川は大上に近づき彼が手にしている資料をのぞき込む。

「どういう事だこれは……」

大上達が探していたのは、前学園長の資料。どこか上の空だった大上が、それでも目当ての項目を発見できたのは、もしかしたら上の空……意識半分で彼女のことを考えていたからなのかもしれない。

「なにになに……って、え？ マジで！^(o)」

月原裕也。前学園長の名前として、確かにその資料にはこう記されていた。

例えば佐藤とか田中とか鈴木とか、日本人の姓としてポピュラーなものならば、ただ同姓だけでなく何の繋がりもない別人である可能性は大きい。しかし月原という姓は珍しいと言うほど珍しくはないものの、よく見かけると言うほど多い姓でもない。

月原恵美と月原裕也。何の繋がりもないと思う方が不自然だろう。

「お待たせしました……」

放課後、朝約束したとおり月原は教会の礼拝堂に姿を現した。大上は職員室で彼女を待っていて良かったが、頻繁に月原が訪れるのを他の先生達に見られるのはまずい……というより恥ずかしいと思ひ、礼拝堂の長椅子に腰掛けて待っていた。

むろんそれだけではなく、午前中に見つけた前学園長の名前についてゆっくり考える場

が欲しかったというのもある。あれから角川と資料を探したが、月原裕也という名前以外に、彼に関するデータは一切見つけれなかった。学園に関する資料を基本としている以上、一個人のデータが詳しく記されている必要はないのは確かだが、それにしても何か引っかかるものを二人は感じていた。まるで意図して削除したのではないかという、そういった作弄的なものを……。

「あの、大上神父？」

「ああ、すみません。少し寝てしまったようですね」

当然嘘だ。ただ腕を組み目を閉じて考え込んでいただけで、寝てなどいられる心境ではなかった。

「すみません……本当にお待ちせしてしまっただようで……」

「いやいや、そんな待つてませんよ。まだ三日目で緊張が続いていたようで、少し疲れていたようです。月原さんが気に病むようなことではありませんよ」

それでも今度は大丈夫ですかと氣遣ってくれる月原に、大上の心は痛んだ。

そして悩んだ。さて、本人に直接尋ねるべきかどうか。

「今日は……何を話すればよろしいでしょうか？」

月原が尋ねる。そして大上は口を開いた。

「そうですね……では、生徒さん達の事を少し伺いたいのですが……」

やはり躊躇ちゅうちよしてしまっ。そもそも月原から見ても、大上が突然前学園長のことを尋ねてくる事はあまりにも不自然で、もし血縁関係ならば警戒して当然。そうでなくとも、月原の両親は……彼女の話によれば……殺されているのだから尚更。

殺されている？ 大上は月原の話聞きながら妙な繋がりに思い当たり困惑し始めた。

前学園長は事故で七年前に亡くなっている。もし月原の両親が殺されたのが七年前だったら？ 死因が事故ではなかったら？ もし、これらが繋がったとしたら……それは何を意味しているのか？

「生徒さん達はあまり教会に訪れることはない伺ったのですが、実際にそうなのでしょうか？」

今はよそう。大上は自分の推測を頭から全て追い出し、月原との会話に集中するように努めた。

「はい。我が校は俗に言うミッションスクールですが、布教は押しつけるものではないという方針のようです。その為、生徒から率先して教会に訪れるのは、懺悔室……というよりは相談窓口に近い役割ですが、そこで色々と神学科の先生達に話を聞いてもらう時ぐらいでしょうか」

月原の話は既に四方から伺っている話と合致している。だからだろうか、話を聞きながら不意にまた疑問が脳内に沸き、それをまた追い払う。大上はそれを何度も繰り返し返していた。

そんな大上の心中など知るよしもなく、月原は熱心に学園事情を大上に語っている。だからこそ尚更に、大上の良心は先日同様しくしくと痛み出していった。

しかしそれとはまた別に、大上は痛む心が温かく包まれる何かを感じてもいた。

もしかして本当に、惚れてしまったのか？ 数刻前角川に指摘された通りに、俺は惚れてしまったのだろうか？

これが俗に言う一目惚れというものだろうか。 ウエブ・ウルフ 狼男 の自分が、よもや人間の女性に惚れるとは……いやいや、そんなはずはない。大上は心中で頭かぶりを振り一瞬沸いた考えを否定する。仮に惚れたとしたら、彼女のどこに惚れたというのか。大上は先ほどまで頭から追い出したかった二人の月原に関する疑問はとうに忘れ、代わりに沸いてしまった自分への疑問と戦っている。

月原は確かに美人だが、その容姿に自分が惚れたとは考えにくい。角川にも話した通り、自分の好みとはかけ離れているから。また性格にいたってもある程度把握し始めているが、まだ出会って三日目で彼女を知った気でいられるほど愚かではないつもりだ。考えれば考えるほど、彼女に惚れている証拠など何もない。にも関わらず、この暖かな感情は何故湧き上がるのか？

あれだ。ハードボイルドは惚れっぽいんだよ。毎回毎回美女が現れてはラブロマンスを繰り広げる。それがハードボイルドってもんだろ。それか？ ああ、それだ。大上が心の中で出した結論を、もし第三者が垣間見られたとしたらなんと言っただろうか？ おそらく多くの第三者はこういっただろう。愚か者アホ、と。

そもそも……今はこうして話をしているが、月原は大上を敵かたきとして狙っているという非常にアンバランスな関係にある。そこへ大上はさらなる不安定材料を加わえようとしているが、今後二人の関係がどう展開していくのか。それを本人自身が推測するにはあまりにも難しい問題だ。

「……なので、日曜になると多くの方が礼拝に訪れています」

話は日曜礼拝のことに触れていた。月原の話はやはり四方の話と合致しており、多くの教徒が学園内の教会に訪れているらしい。日曜礼拝に関しては研修員として重要な話で、大上は研修員という偽装の為にもと、念入りに話を聞いていた。

「礼拝は学園長……木宮神父の話などを中心に行っています。その後は有志の方々によるボランティア活動……主に教会内と周辺地域の清掃を行っています」

日曜礼拝自体は特に変わったところは見受けられない、ごく普通の、どこの教会でも見られる活動内容のようだ。ただ一点気になることがあるとすれば……学園長が中心になっている点か。彼がグノーシス主義の中核的人物だと大上は疑っているが、もしその通りだとすると、この礼拝という機会にグノーシス主義へ取り込もうと画策かくさくしているのではないだろうか？ あるいは礼拝に訪れている人々の半数以上が既にグノーシス主義の異端教団カルト信者である可能性もあり得る。これは一度、その日曜礼拝に潜入する必要があるだろう。大上は小さいながらも得られた手がかりに満足していた。

「月原さんも、日曜礼拝には参加されているのですか？」

大上の質問に、月原は僅かに目を伏せながら、はいと一言だけ答えた。

どうも様子がおかしい。先ほどまで滑らかに動いていた唇をとたんに固く閉ざしてしまった月原に、大上が疑問を感じるのには当然のことだろう。そもそもこれまでの様子から、月原はいつも「信仰」の話になると口を閉ざしがちになる。彼女は間違いなくグノーシス主義の信者であり、信仰に対して口を閉ざすような事はないと思えるのだが。いやむしろ、彼女がグノーシス主義だからこそ正当派な信仰に対して後ろめたさを感じているのだろうか？ それもおかしな話だろう。後ろめたさを感じるようなら、自ら槍を手にし立ち回る武闘派の異端教団カルトに身を置くとはとても思えない。

「月原さん。昨日もお話ししましたが……」

伏せ目がちになつた月原に代わり、大上が口を開く。

彼は賭に出た。この後に続く質問を彼女がどう捉えるかによつて、また昨日のように逃げられてしまう可能性は充分にありえる。逃げるだけでなく、もしかしたら拒絶されることも。拒絶か……その言葉に、大上は言いようのない不安をかき立てられた。しかしもしこの賭に勝てば、月原との距離を一気に縮められるだろう。それは大上にとって、様々な意味で喜ばしいこととなる。

さあ、彼女は どう出る？

「私は正式な神父ではありません。有栖学園ありすでの教会運営に携わるのに都合が良いので、神父の格好をしているに過ぎません。ですから、あなたが先生や本物の神父に証せない悩みがあるなら、私に話してみませんか？ もちろん他言はしませんし、いずれ私はこの学園を去る身ですから、悩みを吐き出すには月原さんにとって都合良いと思いますよ？」

ガツチガチに硬い笑顔をどうにか作り、大上は月原に打診を試みた。

しばしの沈黙。それはそれは、大上にとつてとても長い沈黙。さて、月原にとつてはどれほど長い、そしてどれほど意味のある沈黙なのだろうか。

その答えは、やがて月原の口からもたらされる。

「……明日もまた、尋ねてもよろしいでしょうか？」

賭に勝つたかどうかは定かではない。しかし負けてはいない。そんな微妙な判定だ。しかし最悪の結果は逃れ、何より明日へ繋がったことをここは喜ぶべきだろう。

「ええ、もちろん。明日もここでお待ちしますよ」

満面の笑みで、心からの笑みで、大上は返答する。月原は席を立ち、大上に一礼すると駆けるように礼拝堂を出て行った。その様子を最期まで見届けた大上は、見届けた後で握り拳を作りながら、ヨシッ！ と歡喜の声を上げた。

何の飾り気もない、殺風景な部屋。月原はそんな自室に戻り、制服のままベッドの上へと倒れ込んだ。

何故だろう……月原は教会を出てここへ戻るまでの間、ずっと考えていた。

何故、こんなにも胸が高鳴るのか。月原は自身の動悸どうきがここまで激しくなることが信じられないでいた。

格好良い人だと思う。それは客観的に見た、大上への批評。自分がそんな大上に惹かれたとは少し考えづらい。自己評価だが、自分は面食いではないと思っており、もしそうなら好きなアイドルの一人や二人いてもおかしくないが、幸か不幸か、ごく普通の女子高生が騒ぐような人達にはまったく興味はない。そもそも自分の興味は……などと思いつける最中さなか、月原は自己嫌悪に陥った。

普通の女子高生が興味を示すものに興味がない。興味を持つとうとしない。それは性格や好みだけの問題ではなく、自らに課した十字架のようなものだった。自分にはやるべき事があり、その為への労力は惜しまない。だから余計な誘惑に惑わされてはいけない。

敵討ち。両親の敵を討つことが、自分に課せられた宿命なのだ。月原はそう信じていた。信じたかった。信じなければ、この七年間自分を支えられなかった。ならば今することは

何か？ 月原は自問自答し始める。ようやく敵を見つけ出す糸口をつかんだのだ、不意に現れた異性に動揺している場合ではないだろう。そう自分に言い聞かせながら、月原はベツドから起き上がりまっすぐ先を見据えた。そこにはカレンダーと、黒い布に包まれた長い棒状の何かが。

「あと二日……」

カレンダーに視線を移し、月原はつぶやいた。カレンダーには、前日まで多くのバツ印が記されており、今日より二日後の日付には大きく丸印が記されている。

明後日は満月。 ウェア・ウルフ 狼男 が街に現れる日。

同級生達の噂になど興味の無かった月原が、不意に耳にした、興味のある話。それが都市伝説的な ウェア・ウルフ 狼男 の噂。誰かの作り話とも思える与太話だったが、月原はそれを聞き流すことなど出来ず、自ら噂を確かめに行ってみたところ……その真実を目の当たりにした。そしてようやく訪れた好機を神に感謝しつつ挑み掛かり、惨敗したあの日。あれからそろそろ四週間。また次の機会が訪れようとしている。

次は負けない。負けられない。決意を胸に、負けぬ為に今できることしよう。月原は壁に立てかけてあった棒状のもの……槍を手に、制服のまま部屋を出た。異端教団の集会場での訓練が、次の勝利へと繋がるはずだ。満月の夜へ向けて、そして……まだくすぶっている、大上への感情を押し殺すためにも。

人の噂は千里を駆ける、とはよく言ったもの。それが女子校ならば尚のこと。突然やってきた研修員と、校内で知らぬ者はないとまで言われる美少女。そんな二人が密会を重ねているらしい……との噂が、校内に広がっているようだ。噂故か、「密会」というのは多少語弊はあるが、しかし二人きりで会っているのは事実で、それを目撃している者も少なからずいる。ならばその事実には様々な尾ヒレが付いて広まったとしても、それ自体に疑問を感じることはない。

疑問は感じないが、噂が広まっている事実を知ったとき、大上の額には嫌な汗が流れ始めていた。

「それも大上神父の仕事なのでしょうが……一応、説明していただだけませんか？」

大上は四方と二人きりになった職員室で、突然問い詰められ焦っている。

まさか四方が噂を聞きつけ、彼女から問い詰められることになるとは、大上は全く予測していなかった。いや冷静に考えれば充分にあり得る話なのだが、当人である大上は、異性であるとはいえ数多くいる在学生の一人と普通に面会しているだけでここまで噂になるとは考えにも及ばないことだったから。自分が、そして月原が、どれだけ目立つ存在なのかということ、本人達が一番自覚していないのだ。

「や……その、やましいことはしてませんよ、ホントに……」

少女と二人きりで密会。それを問い詰められるということは、何を疑われているということなのか……半ば反射的に、大上は弁明をしてしまう。だがこのような言い訳は、むしろあらぬ疑いに拍車をかけてしまいがちだ。

「そんなことは判つてますから……」

大上にとつて救いなのは、四方が彼に對しいかがわしいことをするような男ではないと信頼されていることか。しかし四方があきれ顔で溜息をついているところを見ると、大上の慌てぶりはよほど「あらぬ疑い」を招きやすい、大げさで挙動不審な態度に見えるのだろう。

「月原さんと会っているのは何故ですか？ 彼女が大上神父の探っている事件と関係があるということですか？」

大上が聖パトリック女学園に潜入する手助けをしている四方は、彼の正体も本業も当然知っている。しかし彼女は大上が何を探っているのかまでは聞いていなかった。本人が話したがない以上詮索をするつもりはなかった四方だが、四日目を迎えた今になって四方は大上の仕事に口を挟んできた。

四方が突然口を出してきたことに大上は戸惑っていた。彼女がただ好奇心で聞きたがっている訳ではないのは重々承知しているだけに、何故四方が月原に対して敏感な反応を示したのかが気になっている。

「……そうですね。その顔だと、まず私の方から説明する必要がありそうですね」

驚きと戸惑いを隠さなかった大上を見て、四方は必要以上に大上が混乱しているのを察した。そして今自分が、大上に対し興奮気味になっていることにも気づいた。熱くなっている自分の熱を息と共に吐き出し冷静さを取り戻す四方。落ち着いたところで、四方は口を開く。

「月原さんは、私達の女子修道院……ブリージット女子修道院に関わりのある女性なんです」

大上は驚かすにはいられなかった。まさか、自分が探りを入れている女性が、身近な人と浅からぬ関係があるなどどうして思えるだろうか？ しかも相手はグノーシス主義の異端教団信者。大上にとって信頼できる彼女たちブリージット女子修道院に関わりがあるなどとはとても考えつけない。

「彼女の母親が、私達の修道院に在籍していた方なんです。ですからその娘である月原恵美さんの事を、私達はずっと見守っていたのです」

なるほど、母親からの繋がりか……心が落ち着いてきた大上は、顎に手を当てながら四方の話から様々な事柄を整理していた。そういえば、母親についてはまだ一切の情報がなかったな。ここは全てを明かして情報の提供を求めるか？ むろんそれが最善であると思われるが、大上はまた躊躇した。彼女を、四方を巻き込んで良いのか？

考え込んでいる大上を見て、四方は溜息をつく。優しいが、それ故に優柔不断になりがちな彼を、四方は出来る限り見守るようにしてきたが、今回ばかりは自分が所属する修道院のためにも背中を押す必要があるとそうだ。

「あなたの悪い癖ですよ、大上神父……いえ、ケンちゃん。いつも言ってるでしょう。頼れるときに頼るのが仲間ではなくて？」

彼女にちゃん付けて、学園で普段通りに呼ばれてまで説得されては、もはや大上に躊躇など許されるはずもない。

「チャコさんにそこまで言われると敵いませんね」

そもそも大上は年上の女性に弱い。加えて付き合いの長い四方が相手では尚更。大上は意を決して、全てを話し全面的に協力を仰ぐことを決めた。

事の起りから……いかにして大上が月原と出会ったか、その下りから話し始めた大上だが、予想通り四方は月原がグノーシス主義の異端教団に関わっている事実を知り驚愕した。しかし四方はその事を詳しく聞きたいのを我慢し、大上の話を黙って聞き続けた。

四方にとって学園長に疑いが向けられているのは薄々感じていたことではあったが、彼が異端教団絡みで疑われているという話やはりショックなこと。さすがの四方も、話を聞き終えてからしばらくは状況を頭の中で整理するのにはしの時間を要した。

「そうですか……あなたがなかなか私に話しながらなかった理由がわかりましたよ」

大上にとっては学園長のことだけが気がかりであったが、月原までが四方と繋がりがあろうとは。今まで黙っていたのはある意味で正解だったが、しかし状況を考えると早く四方の協力を得ていた方が良かっただろう。自分の優柔不断さが招いた失敗に、大上は心中で苦虫を何度もかみ砕いていた。

「それで……我々は前の学園長が月原裕也という人物だったことを突き止めましたが、彼は……」

「ええ。ご推察の通り、恵美さんのお父さんです」

やはり。そこは推測通りだったが……そうなると、月原裕也の死因について疑問が沸いてくる。そして現学園長である木宮大介との繋がりも。むろん学園に裕也のデータが残っていないことなど、いくらでも疑問は残っている。

「月原さん本人は、両親を狼男に殺されたと言っていたわけですが……チャコさんは裕也さんと彼の奥さんの死因をご存じですか？」

今度は四方が考え込む番となった。しかし結論はすぐに出る。情報の提供を一方的に促

して、自分ばかりが黙っているわけにはいかないし、なにより自分達の為にもここは協力を惜しむわけにはいかないのだから。

「事件としては、放火および強盗殺人ということになっています。死因は刃物による殺傷らしいのですが、家が全焼してしまつた際に夫妻も焼かれてしまつたようで……ハッキリとした証拠は何一つ残っていないかつたそうです」

四方の話によると、この事件はその大きさから新聞にも取り上げられているとのこと。

「この事件があつたとき、当時……九つかしら？ 恵美さんは現場近くで倒れているところを発見、保護されているわ。そして彼女は何一つ事件のことを覚えていないと証言しているのよ……」

「えっ？ ちょっと、ちょっと待ってください。何も覚えていない？」

明らかに矛盾している。大上が思わず話を止め疑問を口にしてしまうのは無理もない。

パパやママを殺したのはお前達だ！ 大上が初めて月原と会つたときに浴びせられた、呪いの言葉。耳にこびりついて今でもハッキリと覚えている。事件のことを全く覚えていない月原が、何故^{ウェア・ウルフ}狼男を見て敵^{かたき}だと断言したのだろうか？

「ええ……だから私も、ケンちゃんの話聞いて驚いたわ。さっきも言つたとおり、証拠は何も残っていないのに何故断言できるのかしら……」

不可解すぎる。しかし月原が嘘を言っているとはとても思えない。とすれば、何か彼女なりの確証があるのだろうか……。

「もう一つ良いですか？ 月原さんの保護者は、今誰になつているんです？」

生徒名簿にも記載されていなかった保護者。両親のいない彼女をいつたい誰が面倒見ているのだろうか？ これはいくつもある疑問の中でも特に気がかりだったこと。この答えはアツサリと四方から伝えられる。

「ブリージット女子修道院長である、シスター春川です。しかし養子縁組などは本人の希望もあつてしておりません」

なるほど、これは確かに修道院の一員として四方が月原を気にするのもうなずける。しかし納得しようとした大上に、四方は「ただ……」と言葉を繋いだ。

「実質上、今の保護者は学園長です。彼女が小学生の時までは修道院で預かっていましたが、本人が中学に上がる際、自分の父親が学園長を務めていたここ聖パトリック女学園への進学を希望したので、修道院から学園寮へと移りました。もちろんシスター春川も直接学園長にその旨を伝えてお願いしていますから……」

予測していたことだが、やはり月原と学園長に繋がりはあつた。これで学園長もグノーシス主義に属しているのは明白となつたわけだが……だからこそ、深まる謎が多々あるのも事実。

「シスター春川が月原さんを預かることになつたのは、遺言書か何かに従つてのことですか？」

ふと、学園長が遺言によつて今の役職に就いたという話を思い出し、大上は遺言書のことを尋ねた。次期学園長の事を気に掛け遺言を残しているなら、当然娘のことも何か残しているはずだと大上は睨んだ。

「遺言……ですか？ いえ、そのような話は聞いたことも……私が知らないだけかもしれません」

確かに四方が具体的な遺言の話まで知らなくても当然なのだが、大上は何か引つかかる物を感じた。

「そもそも、遺言書など残せる状況だったのか？」

事件を聞く限り、月原の両親は突然襲われ亡くなったと思われる。しかも家が全焼するような状況で遺書を書くなんて出来るはずもない。となれば、事前に用意していたことになるが……。

「月原さんのご両親は、何者かに狙われていたとか、そのような話はありませんか？」

「いえ、まったく……何も心当たりがない中で突然の事件でしたから、皆驚いておりません」

仮に四方達が知らなかっただけで本当は何者かに狙われていたとしても、遺言書を残すなら娘の事に対して一筆あるはずだろう。それが何もなく、学園長の話だけ遺言があるというの……あまりにも不自然すぎる。いったいこれは何を意味しているのか？

大上はひとまず遺言の話を脇に置き、月原の両親について詳しく尋ねた。四方の話によると、月原の母親……月原恵理はアイルランド人のハーフで、母親、つまり月原から見て祖母がアイルランドの女子修道院の出身で、そこから代々四方達の修道院と関わってきたとのこと。また月原の髪の色が薄いのは彼女がクォーターであるかららしいが、母親は綺麗な黒髪だったらしく、髪は隔世遺伝によるところが大きいか。

父親は大変立派な人だったらしい。四方自身は母親も含め何度か見かけたことがある程度らしいが、修道院でもその人柄が伝わるほどの人物だった様子。だからこそ、修道院としては娘である恵美をしっかりと見守りたかったが……よもやグノーシス主義の、それも武闘派の異端教団に深く関与しているとは。彼女の受けたショックが計り知れないものだろうことは、大上でなくとも安易に予測できる。

「チャコさん……月原さんのことは、もうしばらく待っていてもらえませんか？」

それを承知して大上で、大上は四方へ頭を下げる。

今の段階で、四方達の修道院が介入してくるのはまずい。修道院としてはなんとしてみても月原を異端教団の信仰から目覚めさせたいだろうが、修道院が直接月原に接触し始めれば学園長がそれを察し、何らかの妨害か、あるいは根本である異端教団が追求されるまゝに雲隠れしてしまいかねない。そうなるとは異端教団の断絶を目指すカウンターハンター大上としては問題だ。

「ええ、もちろん……修道院には報告しますが、私達の介入はしばらく控えます。先ほどの遺言の話などは私の方から尋ねてみますから」

四方だって大上の立場や彼が行おうとしていることは理解している。身内同然である月原のことは心配だが、焦りは禁物。ここは大上に一任するのが適切だろう。

「助かります……絶対に月原さんは救い出して見せますから」

異端教団を信仰する月原は大上が差し伸べる手を拒むだろうが、しかし彼女がいるべき場所は異端教団ではない。信仰は自由であってしかるべきだが、はたして月原は自ら進んでグノーシス主義を信奉しているのだろうか？

大上はふと、初めて月原と出会ったときのことを思い出した。あの時彼女は、教会の清掃と「懺悔」をしていると言っていた。彼女はキリストの十字架を前に、何を懺悔していたのだろうか？ 加えて、信心深くはないと自ら発言している事への真相も気がかり。学

園に来るまでは修道院に身を寄せていたという彼女に、いったいどんな心変わりがあったのだろうか？

四方からもたらされた解決への糸口は、大上をさらなる謎へと誘^{いざな}っていく。

大上が頭をひねっている頃。天道寺もこれから頭をひねろうとするところだった。

「はい、ありがとうございます……いえいえ、こちらこそ……はい、はい、ええ、是非とも。いずれ折を見て……そうですね。はい、では失礼します……」

社交辞令で話を結び、天道寺は受話器を置き……そして眉間にしわを寄せ、一言つぶやく。

「……どうということだ？」

電話越しに話をしていたのは、聖パトリック女学園の学園長、木宮大介と親交があったという大学教授。天道寺や大上の協力者にしてスポンサーでもある有栖^{ありす}学園の理事長を通じて接触することが出来た人物。

「成果はあったようですが……その様子だと、雲行きは怪しそうですね」

天道寺のすぐ側にいた家憑^{シキキ}き妖精のメイリンが、ソファーに向かう天道寺の後をついて行きながら尋ねる。メイリンの質問にはすぐ答えることなく、天道寺はソファーに腰掛け一息ついてから口を開いた。

「色々と判明したことがあって……おかげで色々な事が判らなくなってきたよ」

天道寺が腰掛けると同時にメイリンから差し出された紅茶を一口味わう。味わうとは言っても、今の天道寺に味を楽しむ心のゆとりはなかったが。

「まるで謎かけのようですね……良かったら聞かせてもらえますか？ 人に話すことで整理できることもありますでしょうし」

むろんメイリン自身が電話の内容に関心を持っていることもあるが、彼女が言うように一度脳内を整理するためにも、謎かけとなった会話内容を口にするのは有効な手だて。天道寺は再度ティーカップを口元へ運び、唇を湿らせ円滑に語れる準備を整える。

「藤美^{フミ}の調べで、あの学園長が元々宗教学の教授だったというのは覚えてるな？ そして研究テーマがキリスト教における異教や異文化の取り込みだったのも」

もちろん覚えてるのは承知しているが、頭の整理も兼ねているため天道寺はまず話の基礎部分を口にした。

「その研究過程において、グノーシス主義の研究ももちろんしていたようなんだが……同時にオカルト方面の研究もしていたようだ」

「オカルト……ですか？」

宗教学とオカルト。見方によっては密接しているようにも受け止められるが、宗教学の方から見たオカルトは眉唾物でしかないだろう。そんなオカルトも研究対象としていると聞けば、頭上に疑問符の一つも浮き出してしまうというものだ。

「ああ……まあ確かに、グノーシスもそうだが、テンブル騎士団とかその他様々な異端^{カルト}教団はオカルト系の映画や小説なんかにはよく出てくる題材だ。研究対象として価値があるとと言えるが……」

言葉を句切りまたティーカップの縁に口を付ける天道寺。そして続く言葉を紡ぎ始める。

「特に熱心だったのが、クトゥルフ神話の研究だったらしい」

怪奇幻想作家H・P・ラヴクラフトによって創造され、後に数多の作家が参加し形成されていった架空の神話体系……それがクトゥルフ神話。今や世界中に多くのファンを持ち、一つのジャンルとして確立しているほどの人気を保っている。学園長はこのオカルトの中でも特に有名なクトゥルフ神話に興味津々だった様子。

「そもそもこのクトゥルフってのは、色んな神話を参考に作られててな。グノーシスも参考になっている節があるんだ。グノーシスで言う創世の神にして邪神であるデミウルゴスに酷似している、外なる神の創師、魔王アザトースなんてのがいたりする」

腕を組みながら、天道寺の話は続いた。

「確かにグノーシスを研究するなら、クトゥルフは面白い研究対象かもしれないが……本来のテーマはあくまで宗教学、それもキリスト教における異教や異文化の取り込みなんだとすると、クトゥルフは脱線しすぎだろう。にも関わらずあまりに熱心だったのが気になったと、さっきの教授も言っていたよ」

目を閉じ口を閉じ、天道寺はうなづいた。先ほど聞いたばかりの話を整理しようと口に出してはみたものの、やはり整理しきれない。むしろ混乱するばかり。いったい木宮という男は、七年前まで何を目的に教授という職を勤め何を目的として研究をしていたのだろうか？

「グノーシスが真の目的ならば、クトゥルフへの脱線もあながち間違いではないのでは？」

メイドの助言に、館の主はうなりながら答え、口を片手で塞ぐようにして考え込んでしまふ。

「確かにそうだ……そうなんだがな」

グノーシス主義の異端教団カルトに属し活動しているくらいなのだから、元からグノーシスを研究対象とし、表向きを偽っていたとも考えられる。しかしそれだと引つかかる物があると天道寺は感じていた。

「グノーシス自体は異端扱いされていたとはいえ、至極全うな宗教だったんだよ。グノーシス自体幾つもの宗派が存在していたり、現在でも信仰されている宗派があったりもしている。真面目な研究対象として、グノーシスはとても興味深いテーマなはずだ。なにもこここそ隠れて研究する必要はないはずなんだよ……」

それともう一つ。そう言いながら天道寺は中指を立ててみせる。

「クトゥルフの他にも超能力とか、「人知を越えた力」といった類にも興味があったらいいんだ。あくまでクトゥルフの話は学園長が興味を示したオカルトという分野の中で特に目立っていたから、さっきの教授が覚えていたに過ぎないんだ。超能力の他にも催眠術とか……ああ、催眠術に関しては他の心理学あたりの教授に話を聞きに出向いたりもしていたらしい」

むしろクトゥルフよりも催眠術の方が現実的かもしれない。話を伺った教授は非現実的なクトゥルフ神話の方が印象に残っていたのだろうが、催眠術の方が活用できるだけ不気味な話だろう。自分で口にしなから、天道寺はそう思い直した。

まあその前に、世間一般から見たら非現実的でまさにオカルトな環境にいる天道寺達が他のオカルトに対して現実的かどうかなどを論じるのもおかしい話なのだが。

「いずれにせよ、どんな目的があったのかサッパリ判らない……催眠術や超能力つての

が武闘派というところに繋がるのか？ だとしても……なんだかなあ」

頭を掻きむしってはみるが、それで天道寺にひらめきが生まれるわけでもない。やはりただなるだけで終わってしまう。

「……もしかしたら」じつと話を聞いていたアイリンが口を開く。「私達はどこかで何か、大きな思い違いをしているのかもしれないね」

そうかもしれない。だとしたら、どこでどんな思い違いを？ 結局謎は謎のまま。天道寺もまた、大上と同じく混沌とした謎の中腹へと誘われられていた。

一番の問題は、情報のほとんどを関係者や関連書類など間接的なところから得た物ばかりだということにあるのかもしれない。聞き出せるなら、直接本人から聞きたいところだが……大上はその張本人との面会を前に、悩んでいた。

そもそも月原との面会は、学園のことを詳しく聞かせて欲しいという、研修員としての表向きな目的があつてのものだった。その目的は既にほぼ完了している。学園のことで月原から聞きたいことは、もうほとんど残っていない。

しかし月原本人のことについてはほとんど聞き出せていない。本来の目的はこちらなのだというのに。

故に大上は焦っていた。焦りながら、刻々と迫る面会でどのように話を繋ぎ引き延ばし、本来の目的を聞き出そうか……その段取りを、脳内で幾通りも計算シミュレーションしていく。

「……お待ちしました」
しかし大上が念入りに準備した段取りなど、彼女の一言を聞いたとたんに全て四散してしまった。これから始まる待ちわびながらも緊張するひととき。そして本人が自覚していない感情によつて、胸はドキドキと高鳴りはじめる。

「ああ、月原さん。お待ちしてましたよ」

所詮会話は生もの。むしろ流れの中でいかにして自分の方へ引き寄せるかが肝心なのだから、事前の準備などむしろ無用。

ハードボイルドに決めていれば流れは俺に傾く！

どこからその自信が沸くのか。心理学の権威でも解き明かせそうにない思考理念に基づき、大上は月原との会話を楽しんだ。

何度が彼女との会話を交えることで、大上は月原という少女の性格を幾分か理解し始めていた。彼女が基本的に無口なのは学園で出会ってから既に承知していたが、しかし思っていたより無口というわけではなかった。彼女は自分から話しかけることは皆無なのだが、しかし相手からの質問などには素直に答える。会話の内容も言葉数が少ないというわけでもなく、むしろ流暢じゅうたうだ。これを理解し、コツをつかめば、話はスムーズに進んでいく。

もう一つ。彼女はクールというよりは単に無表情であるということも把握し始めていた。会話の内容がどのような物でも、彼女は表情を変えない。大上が知る限りで彼女の顔に表情が宿ったのは……狼の姿で会った時を除けば、「信仰」の話になったときくらいだ。それだけ彼女の中で信仰の話は心を揺さぶる何かがあるという証拠にもなるが……その話に及ぶと彼女が逃げ出してしまふのは承知しているだけに、おいそれと追求は出来ない。

また無表情ではあるが、感情まで皆無だというわけではなさそうだ。例えば大上がジヨ

ークを飛ばせば、面白いですねとコメントし、苦勞話を切り出せば、大変ですねと勞ねぎらつてくれる。つまり彼女は、表情に表れない分を言葉で補うのだ。

だいが月原との会話になれてきた大上は、自然と、本人同士が意識しないほど自然と、お互いのことに踏み込んだ会話へと流れていた。

「じゃあ学園祭で飲食関係はNGなんだ」

「はい。衛生面の問題よりも、学園の校風のように……しかし生徒側は毎年どこかのクラスで許可を申請しているようです。昨年などは先輩方が「シスター喫茶」なるものをやりたいと発起されていたみたいですから」

「あはは、それはちよつと興味あるね。でも先生達が許すわけもないか」

「ええ。我が校はミッシヨンスクールですから、おいそれとそのような許可は降りないでしょう。ですが少しづつ緩和されてはいるようです」

自然な流れは、いつの間にか大上の口調を崩し始めていた。月原の方は口調こそあまり変わらないが、しかし話す量は以前に比べだいが増えている。

良い傾向だ。ふと気づいた大上は確かな感触を得ていた。

そして気づいてしまった時点で、大上はこの楽しいひとときに余計なことを思い出してしまう。

本来聞かなければならないこと。彼女が何者で、何故武闘派グノーシス主義の異端教団に参加しているのか。そしてその異端教団の目的。これを聞き出さなければならぬ。

どうやって？ 会話は自然と流れている。この流れに本来の目的をかぶせれば、流れは強引に変わり不自然になる。流れが完全に止まってしまふ恐れだつてある。どうやって気付かれないように流れを本流へと引き寄せるか……そんなことを頭の片隅で考え始めてしまった段階で、大上の話に滞とどまりが生じてしまうのも止むを得ないだろう。

「……あの、大上神父……」

その滞りが生み出してしまった、会話と会話の間。一瞬の沈黙。それは話が切り替わる、大上にとってチャンスにもピンチにもなり得た瞬間だつた。大上はその刹那で主導権を月原に奪われてしまった。自分から語ることの少ない、月原に。

「ん？」

戸惑いながらも、大上は月原の言葉を待った。そして先ほどよりも長い沈黙。ついに月原の唇はまた動き始めた。

「私……私の話を、聞いてもらつて良いですか？」

来た！ 大上は待ちわびた言葉に心中で小躍りする。よもや彼女の方から話を振つてくるとは思わなかったが、これは間違いなく、これまで大上が「悩みがあるなら打ち明けて欲しい」と言い続けたその成果が実つた瞬間だろうと、彼は確信した。

そしてそれは、まさにその通りとなる。

「ええもちろん。私で良ければ」

折角崩れた口調を、緊張のためか戻してしまう大上。むろんそんな小さな変化に二人とも気を詰めることはなかったが。

「……私は、信心深くありません。神様を、信じていません……」

月原にしてみれば、大上の前で見せてしまった不振な言動。その事への言い訳も含まれていた。むろん彼女にとってこれが、心の中にあるわだかまりで、誰かに聞いて欲しかつ

た話なのと言うまでもない。

「私は両親を……その、亡くしています」

さすがに殺された、とは言えない月原。前振りもない突然の告白に、普通ならば少しばかりは動揺する言葉だろう。しかし既に月原の両親のことを聞いている大上は驚きもせず、平然と聞き続けた。大上の態度に不信感を持つことなく、いやむしろ堂々としていることで安心感すら芽生えた月原は、言葉の続きを紡ぎ出す。

「もし神様がいるなら……何故両親は死ななければならなかったのでしょうか？ ある人は……これは神様が私に与えた試験なのだと、そう言いました」

そのある人とは学園長だろうか？ それとも四方達修道院の誰かだろうか？ ふと大上の中で思いついた疑問ではあったが、大上は黙って月原の話聞き続けた。

「でもそんな試験に、何の意味があるのでしょうか？ これが試験なのだとしたら、私のために両親は……死んでしまったというのですか？ それはあまりにも……酷すぎます」

辛い話に、それでも月原は表情を変えようとはなかった。だが、雰囲気というべきか、彼女から悲しみの感情が流れ出ていることを、大上は察していた。

「そんな私なのに、私は神様に……神様を信じる人達に助けられています。それが、辛いんです」

なるほど。大上は納得していた。おそらくそんな彼女の心情が懺悔ざんげの祈りや奉仕活動という、神への埋め合わせに繋がっているのだろう。しかしそれらの行為は周囲の人々には信心深い人と映るはず。そのギャップが、彼女に信仰という言葉への拒絶を生んでしまっているのではなからうか。そう大上は推測し……そしておそらくこの推測に間違いはなさそうだ。もしかしたら他にも何か要因があるかもしれないが、しかし今は、この大きな収穫に感謝し、同時に、なんと言葉を返せば良いのか……大上は悩んだ。

「人は一人では生きていけない……それは信仰や宗教といった枠を超越した、真実です」
まるで本物の神父にでもなったかのように、大上は自身の考えを本人が驚くほど流暢りゅうちやうに語り出した。

「困っている人がいるなら手を差し伸べる。それは神様の教えと関係なく、人が人として持ち得る優しさだと思います」

形などに差はあれど、優しさは神への信仰などなくても誰もが持ち得ているもの。現に今無信仰者の大上が月原に手を差し伸べているのがその証。

「困っている月原さんに差し伸べられた手は、皆人としての優しさで、それは信仰や宗教とは関係なく、甘えて良い物だと思えますよ」

むしろその優しさに宗教を絡めるのはいかなものか。神を信じない大上はそう思う。もしかしたら彼女は……差し伸べられた優しさに絡められた、異端教団カトリックへの誘惑に誘われてしまっているのかもしれない。そう結論づけるには性急だが、原因の一部にはあるかもしれない……そう大上は感じ取った。

「あなたもクラスメイトを手伝ったり、私に色々と学園のことを教えてくれたのは、神の教えに従ったことですか？ 違うでしょうか？ あなたの優しさがしてくれたものと、私は感じていますよ」

大上の話を黙って聞き続けている月原に、外見的变化は見られない。しかし彼女から発せられる雰囲気や和らいだ。確証的な物など何もないが、大上はそう感じ取っている。

「優しさを受け、それに恩義を感じることは正しいことだと思います。しかしそこに信仰や思想を織り交せるのは間違っています。もしそれを強要するならば……それは初めから、優しさなんかではありません」

下劣な悪巧みに他ならない。さすがにここまで言葉にしなかったが、自分の言葉に自分で納得し、勝手に憤りを感じる大上がそこにいた。

月原と彼女が関わってしまったグノーシス主義の教団はさておき……昨今日本で乱立する異端教団には、優しさに見せかけた卑劣な勧誘が多い。心の弱った人を見つけてはその弱みにつけ入り、信仰をすり込んでしまふ異端教団のなんと多いことか。そうして騙されていく弱った人々は金品などを搾り取られ更に弱っていく。自覚無しに。

月原も弱みに付け入れられた一人だろう。しかし彼女はこうして助けを求めている。彼女にその自覚があるかどうかはさておき。ならば助け出さなければ……大上は決意を新たにしていた。

「神様を信じる人達に助けられているとしても、それを信仰という形で返す必要はありません。人として、あなたが健やかに育ってくれることが、そのまま優しい人達への恩返しになりますよ。それを何よりも、その人達は望んでいるはずですよ」

少なくとも、四方達修道院の人々は。それは間違いない。彼女たちはそういう優しい人達だから。

「……そうですか……そう……ですか……」

つぶやきながら、月原は気持ちの整理を始めていた。

大上の言うことはもつともで、理解できる話だ。しかしだからといって、これまで抱えていたわだかまりがそう簡単に全て無くなるとはいかない。しかし戸惑いながらも気持ちが軽くなっているのも事実で、月原はそれを自覚していた。

そして彼女の中で、大上という男に対するある種の感情が大きくなることも、鼓動の高まりと共に自覚している。

それが信頼なのか尊敬なのか、それとも……もつと別の、特別な……何かなのか。そこまで自覚することは叶わなかったが。

「私、あまり人と話をするのが無いのですが……大上神父と話をしていると、とても楽しいです」

これが彼女の、率直な感想。文脈としては先ほどまでの会話から考えて少々妙なところはあるが……表情のない彼女の、精一杯の笑顔を代弁している言葉なのだと、少なくとも大上はそう感じていた。

そもそも月原は級友とも会話することも珍しく、座談や相談など皆無に等しい彼女にしてみれば、年の近い異性とこれだけ会話を弾ませ悩みを打ち明けること自体奇跡に近い。むしろ月原自身はそんなこと微塵も考えてはいないだろうし、大上もただただ自分が続けてきた努力が報われ始めている事へ対し胸をなで下ろすのに精一杯だろうが。

「そうですか。そういつていただけだと、私も嬉しいですよ」

月原に代わって、大上は満面の笑みを、心からの笑みを浮かべる。彼にしてみれば、カウターハンターとしても一人の男としても、今日の会話は有意義だったのだから。

「それで、あの……」

しかし直後に、彼女は少々戸惑った言葉を口にし始める。

「すみません。明日は……私用があつてこちらには来られないのですが……」

本来の目的……大上が学園の様子を月原から聞くという大義名分はとうに終えている。それでも月原は、たった数日の間で礼拝堂へ大上を訪ねに来ることが「習慣」になっていた。だからだろうか、月原は来なくても良い面会に来られないことを謝罪している。

「ええ、お構いなく。またお暇なときにでも来てください。お待ちしますよ」

大上の言葉を受け、月原は一礼した後に教会を出て行った。

月原を見送り一人になった大上は、今日の成果を噛みしめる……ことも無く、既に明日の事へと思いを馳せていた。

月原が明日来ないだろう事は予測済みだった。今日の正否にかかわらず、来ないだろうと確信していた。

明日二人は、教会で会うことはない。しかし別の場所、別の時刻、別の姿で会うことになるだろう。

満月が、二人を待っている……。

見慣れた風景。見慣れていた風景。

子供の頃よく見ていた、よく使っていた家具や調度品の数々。

パパと、ママと、大きな女神様の絵画。

その全てが、燃えていた。

真っ赤な炎が全てを包み、燃やしていく。

大柄の誰かが、パパとママを刺している。斬りつけている。

そしてどこから現れたのか……おおひみち狼男が近寄り、手を伸ばしてくる。

そして、目が覚める。

いつもの夢。それはいつもの夢だった。月原は額に手を当てながら、荒い息をゆつくりとゆつくりと整えていく。そして最後に大きく息を吐き出す。室内にはほんのりと甘い香りがする……リラックス出来るようにと時折焚くアロマテラピーお香の香りだ。そういえば、心を落ち着かせようとしてこのアロマテラピーお香を焚く日に限って、いつもの夢を見ているような気がする。なんとも皮肉なことだと月原は心中で苦笑するが、むろん表情は変わらない。

月原はベッドから足を下ろし、顔を上げまた大きく息を吐く。そしてあの夢についてぼんやりと考える。

何度も見てきた夢。鮮明なようで、肝心なところがぼやけている、象徴的な夢だ。

両親と暮らしていた家が燃え、両親が何者かに殺され、そして唐突に現れる狼男。全てのパーツは切り取られているかのように独立しており、同時に現れたとしても、なにか違和感を感じるような……たとえて言うなら、風景写真の上にイラスト集から切り取った人物画を載せて見るような、そんな違和感。パーツは動いているのに、全てが動画のように繋がって見えることはない。

この夢は、あの日……両親が殺された日に私が見た光景……の、はず。月原はそう説明を受けている。

月原自身は、事件当日のことは何も覚えていない。それはあまりにも衝撃的な出来事に、心がその記憶を封じてしまったのだろうと医者は説明していた……らしい。事件当時には心神的なケアという配慮からか直接聞かされたことはなかったが、後になって一種の記憶喪失だと知った。知らされた。

その封じられた記憶を夢としてみるようになったのは、中学に上がり、ここ聖パトリック女学園に通ってからだ。そして初めて、両親の敵討ちを心に誓った……月原は自分自身に言い聞かせるように、先ほど見た夢のことを説明し、落ち着きを取り戻そうとしていた。夢を見た後はいつでも、軽い興奮状態に陥ってしまう。月原は数え切れないほど経験した、この高揚しながらも気怠さけだるを感じる状況をどう落ち着かせるべきかを心得ていた。

今日は満月の日。狼男が街に現れる日。どうやら当日になって気分が高まっていたのだろう。だからこそアロマテラピーお香を焚き落ち着こうとしたのだが……どうやら逆効果だった様子。月原はいつもの夢を見た原因をそう片付けた。

七年。両親が殺されてから、七年という時が経過した。それから四年、両親の敵かたきを先ほどの夢で知ることが出来、敵を討つために槍の扱い方を学んだ。今まで実戦経験はなかったが、同胞との手合わせではそこそ成果を上げてしていると慢心していたが……初めての实戦で、初めての敗北を味わった。屈辱的なあの夜を忘れぬよう、今日までさらなる修練を積んできたつもりだ。

今夜こそは……月原はベッドから立ち上がり、汗だくになった寝間着に手をかけ始めていた。

研修開始から五日目ともなれば、大上も学園内になじんでいる頃。登校時や廊下ですれ違う時などに、生徒達とも気軽に挨拶や簡単な会話などをするようになっていた。ただ大上は、挨拶などをする生徒が複数だった場合、決まって大上から数歩離れるとクスクスと笑い出す生徒が多いのを気にしていた。これは……やはり月原との噂が広まっているためだろうか？ そうだとすると、あまり良い状況とは言えないだろう。先日も広まった噂を耳にした四方よちに聞いただされたばかり。これに関しては結果として良い方へと転んだが、別のどこかで悪い結果を既に生じているかもしれない。もっとハードボイルドに行くべきだったか……大上は少し誤った方向に反省をしていた。

もう一つ誤っていることがあるとすると……生徒達の笑い声は、なにも噂のことばかりではない。格好良い異性イケてると言葉を交わすだけでも、年頃の少女は気持ちが高揚してしまうもので、すぐ側に友達がいれば一緒になってはしゃいでしまうのは無理からぬ事だろう。そのような少女の気持ちに全く鈍感なようでは、ハードボイルドは務まらない。

「そういえば、大上神父。最近一人の生徒と親密に会っているとか……」
これがかししたら悪い結果なのか。大上はとうとう学園長の口から噂のことを聞いただされ、焦っている。

「ええ、高等部一年の月原さんと。偶然教会を清掃している彼女に会いましてね、学園の様子を少し伺いましたら、次の日にはファイルまで用意して熱心に話をしてくれまして。いや、おかげで助かっております」

冷静に、冷静に、ハードボイルドに。大上は自分にそう言い聞かせながら、事前に用意していた言ことばい訳をスラスラと語り出した。

いつか聞かれるだろう。相手が学園長か他の先生かは特定できなくとも、四方から追求があった時点で予見はしていた大上。故に彼は、その時のために説明という名の言ことばい訳を準備していた。彼の言葉に嘘はなく、実際月原は熱心に語ってくれていた。むろんそれだけで終わってはいないが、そこまで話す必要はないし、話せるわけもない。

「ああ、なるほど。そうですね……彼女は校内でも有名な生徒でしてね、何事にも熱心に取り組む良い生徒なんです」

上手く誤魔化ごまかせた。少なくとも大上はそう確信した。表面上の説明だけだが、大上の言葉だけで説明としては十分だったはず。学園長が言うように月原は学園内で有名な生徒で、彼女が何事にも熱心なのは周知の事実。ならばある程度までの真実を語れば、それ以後は相手が勝手に納得してくれるだろう。その計算目論見はキツチリと的を射てくれた。

ただ問題があるとすれば……相手が学園長だと言うこと。

これまでの調べで、学園長と月原との間には浅からぬ繋がりがあることを突き止めている。四方の言葉を借りれば、月原の「実質的な保護者」である学園長が、さて大上の言葉をそのまま受け取ってくれるのか……。

「ですが気をつけてくださいよ、大上神父。あなたにやましい事が無いと私は信じていますが、今学園内で妙な噂になっていますから」

「どうやら軽い注意で流すようだ。大上は心中で安堵の溜息をつきながら、反省の言葉を口にする。

「そのようですね。いや、大変申し訳ありません」

反省の言葉は口になっているが、月原との関係はまだまだ続くだろう。

ただ今夜は、違った関係への転化になるかもしれない。どう転ぶかは全く予測できないが……願わくば、良い関係を築けますように。

満月の夜は、刻一刻と近づいていく……。

天然の毛皮にトレンチコートを羽織る。防寒としては充分な格好なのだが、やはり寒空の下に長時間身を晒していると多少震えもする。風がさして強くないのが救いだ、大上は腕組みをして僅かな防寒効果を得ようとしていた。

誰もいない深夜のオフィス街、その裏道。初めて月原と出会った場所。大上はその場所が一望できるビルの屋上から見下ろしていた。

今夜、月原はここを訪れるだろう。それは確信していた大上だったが、気がかりなことがあった。故に彼は以前のようにわざと姿をさらすような事は避けた。

はたして、月原は一人で来るだろうか？

月原は武闘派グノーシス主義に属している修道女^{シスター}。ならば同胞に報告はしているだろうし、確実に敵^{かたき}を仕留めるならその同胞達に助力を願い出て当然。そう考えると、むしろ月原一人で来るとは考えにくい。それならそれで、異端教団^{カルト}の規模や他にどのような者がいるのかを確認できる為、大上にとつて悪い事態とは言えない。そこで大上は集団で来ることを踏まえ、へたに姿をさらして多数を相手に乱戦という事態にならないよう、ビルの屋上から観察という方法を選んでいた。

しかし、出来れば月原一人で来て欲しい。そう大上は切に願った。

最終的な目標は異端教団^{カルト}ではあるが、今大上の脳裏に浮かぶのは月原のことばかり。彼女をいかにして救い出すか、そればかりを考えている。

らしくないな。それはカウンターハンターとしていかなものかと、大上は自分を責める。がしかし、責めきれないのは相手が自分自身だからか。大上はビルの上から現場を見下ろしながら、長い口の端をつり上げていた。ハードボイルドに行こうぜ、ハードボイルドに。そう何度か自分に言い聞かせたが、あまりうまくはいかない。

程なくして……月原はやって来た。布にくるまれた長い棒のような……おそらく槍だろう……それを片手に持ち、もう片方の手はコートの襟をつかみ、コートの前がはだけないように気を遣っている。全身を包むコートの下は、おそらく尼僧服だろう。さすがに尼僧服のまま街中は歩けまい。

周囲を注意深く見渡す月原。間違いなく大上……が正体だとは知らない^{ウェア・ウルフ}狼男を探している。そしてターゲットとなつている大上から見て、月原の他に人影は見えていない。一人で来たのだろうか？ 他の仲間と手分けして探している可能性もあるが、少なくとも彼女の周囲に人影は見あたらない。彼女一人で来たとしても、他に仲間がいるとしても、接触するなら今しかない。大上はビルの屋上から、跳んだ。

人ならば即死するだろう高さからトレンチコートをなびかせ急降下するその姿は、まる

でSFXを駆使したハリウッド映画さながら。ストン、と軽やかに月原の背後へ着地した大上を、月明かりが彼の後方よりスポットライトのように照らしている。

ハードボイルドらしい、見事な登場だ。大上は自分に酔い始めていた。地面に向けられた視線をゆつくり上げ、月原へ顔を向ける。そして格好良く台詞を決めれば完璧だ。

「よ……うおお！」

口からは決め台詞とはほど遠い、間抜けな叫び声が飛び出した。

槍にくるまれていた布を取り払い、着ていたコートを手早く脱ぎ捨て、月原は「狼男」を見るやすすぐさま戦闘態勢に入っていた。素早い一突きは見事だったが、すんでの所でかわされた。

「ちよっ、落ち着け。まずははな……っとお！」

月原に敵の声を聞く耳など持ち合わせてはいない。ただただ、前回の雪辱をはらし見事に敵を討つ事しか頭がない。月原は何度も何度も、狼男へ槍を突き出していく。

当然月原が素直に話を聞くことは無いだろうと思っていた大上ではあったが、台詞の一つも言わせてもらえぬほどとまでは考えていなかった。しかしそれでもどうにか槍をかわし、鞘から刀を抜き取る。

「積極的なのはベツドの上だけにつ……て、ゴメン、嘘、「冗談！」

ちよっとしたお茶目は、むしろ月原を怒らせるだけ。より厳しくなった攻撃を、大上は刀を駆使して受け止める。

確かに大上の余計な一言も月原を激昂させた要因ではあるが、それだけではない。減らず口を叩きながらも全ての突きをかわされ、受け流されている。その現実、力量の差が、月原をますます苛立たせていた。

一方大上としては、月原を激怒させるのも一つの作戦であった。このままでは一言も聞く気は無いだろう月原に、強引にでも話を聞かせるためには、疲れさせ、士気を剥ぎ、無理矢理にでも聞く姿勢を整えさせるしかない。

幸いにも……と言うべきか迷うところだが、月原の戦闘技術はさほど高いものではないのは、大上にとつて救いだ。ずいぶんと訓練を受けているであろう事は、手合わせした感触として感じるが、しかし経験不足は否めない。例えるなら、プロを相手に部活動レベルで挑むようなものか。

月原の戦闘レベルが異端教団全体のレベルに対する指標となるかは定かではないが、この程度ならハンターとしては三流、良くても二流の集団と言わざるを得ない。

……さてよ？ 大上は槍先を弾きながら一つの疑問にぶち当たった。

カウンターハンターは、不当な狩りを行うハンターを逆に退治するのが仕事。大上はハンターを誘い出す為に身を晒し、そしてそれに食らいついたのが月原だった。だからこそ月原をハンターの一員とし、彼女が所属する教団をハンター集団だとして調査を開始したわけだが……その推測は正しかったのか？

月原の腕前は、どう良く見積もってもハンターと呼べるレベルではない。敵討ちを口にしてはいるが、おそらくまだ一度も魔物を手にかけてことはないだろう。そんな月原に槍の技術を教え込んでるのは教団の誰かなのだろうが、本人の資質以前にあまりきちんとした指導も訓練も出来ていないように思える。とすれば、異端教団自体が月原同様未熟な技術しか持ち合わせていない烏合の衆なのではないか？

しかしそれとは別に、月原が口にする両親の敵^{かたき}や学園長の過去など、あからさまに怪しい点もたくさんある。何より、腕はともかく月原は本気で大上を刺し殺そうと必死なのだから、実はただのマニア集団でした……といった冗談ではないのは確かだ。

いずれにせよ、月原には話を聞いてもらい、出来れば話を聞き出したい。徐々に槍先が下がり気味になり月原の方が大きく揺れ始めている今が、頃合いと見て良さそうだ。大上はそう確信し、次の行動へと移し始める。

突き出される槍をまず斜め下へ弾き流し、大上は一步前へと踏み込む。月原が槍につられるように若干前のめりになったところで、肩を軽く押す。するとバランスを崩した月原は転倒しそうになるのをどうにか立て直そうと足を踏ん張り槍から片手を放してしまう。その機を逃さず、大上は槍をつかみ強く引つ張る。そうして月原は槍を奪われ、同時に首筋に刀の冷たさを僅かに感じる状況に陥ることとなった。

「今日は殺したらどうだ、なんて言わないでくれよ？」

余裕の言葉に、月原はただ目を細め相手を睨み返すことしかできなかった。

「……なあ、キミは何を根拠に^{ウエァ・ウルフ}狼男^{ウエァ・ウルフ}を両親の敵^{かたき}だと思っただけ狙う？」

質問に対する返答があるとは想定していなかった大上。僅かだけ答えを待ったが、やはり返ってくるのは憎しみのこもった視線だけ。大上は少しわざとらしく溜息をつき、話を続けることにした。

「悪いとは思ったが、キミのことを少し調べさせてもらったよ。月原恵美さん」

細めていた目蓋が見開く。この状況で自分のフルネームを呼ばれば、誰だっけと驚くだろう。それは当然月原も例外ではない。

「ご両親が殺害されたのは事実のようだね。しかしそれが^{ウエァ・ウルフ}狼男^{ウエァ・ウルフ}の仕業だと何故言えるんだい？ まして放火まであつて証拠らしい証拠は何も残ってないと聞いたが……」

可能性のある証拠は、月原本人が現場を見ていた場合だが……彼女は記憶を無くしていると大上は聞いている。もし記憶を取り戻しているのならそれを確認したいが、はたして彼女はどう出るのか……。

「……お前達は、敵^{かたき}だ……」

やはりか。大上はまた溜息をついた。

これ以上の質問は無駄だろうと諦め、大上は……やはりこちらも無駄になるかもしれない説得へと話を切り替える。

「前にも話したが……キミの両親を殺したのが^{ウエァ・ウルフ}狼男^{ウエァ・ウルフ}だとしても、それは俺と同一人物か？ ^{ウエァ・ウルフ}狼男^{ウエァ・ウルフ}なら全てが敵^{かたき}だつてのは乱暴すぎるだろう。まして魔物は全員が邪悪だつて決めつけるのな」

大上が言っていることは正論だ。しかしだからといってそれを素直に聞き入れるのは、魔物の存在自体が信じられない人間にとってはとても難しい事。まして^{ウエァ・ウルフ}狼男^{ウエァ・ウルフ}を憎んでいる月原なら尚更だ。それは判っている大上だが、根気よく説得を続けていく。

「俺はカウンターハンターってのをやっている。不当な狩りを続けるハンターを懲らしめるのが仕事だ。例えば、今のキミとかね」

睨む眼光はなおも鋭いが、ひるむことなく大上は口を動かし続けた。

「キミの話が本当なら、キミの敵^{かたき}は俺の標的にもなり得る。俺は別に、人間を全て狩りだそうなんて思っちゃいない。不当に魔物を狙うハンターも、不当に人間を惨殺する魔物

も、俺にとっては全てが標的。善悪の区別は付けている……キミはどうだい？」

善悪の区別は付けているだろう。魔物は、ウヘア・ウルフ狼男は全てが悪だと区別しているのだから。しかしそれは一方的な価値観であり、誤りである。

そもそも月原にとってのおおかみおとし狼男は野蛮で野性的で、荒々しい魔物をイメージしていた。しかし初めて巡り会ったウヘア・ウルフ狼男は全くイメージとは異なり、トレンチコートなどを羽織って格好を付け、道具まで使う文明的な姿を見せている。そしてあろう事か人間に説教を始めるとは。自分の常識、価値観が崩壊し始めている月原は、その崩壊と共に少しずつ大上の言葉を理解しようとしている。その一方で、何故かたき敵の言葉に耳を傾けると警告を促す自分もいる。

両親のかたき敵を討つ為に訓練を続け、実在するかどうかも疑わしかったおおかみおとし狼男を探し続け、そしてようやく見つけ出したウヘア・ウルフ狼男は正論を唱えてくる。何を基準に何を判断すればいいのか、今の月原に指標などあるはずもない。

端的に言えば、月原は混乱していた。

その混乱は正論という説得を、月原にとってのの七年間を全て否定する言葉へと変えてしまふ魔力が宿っていた。

「お前は……敵だ……」

そう結論づけるのが、もっとも楽で、判りやすい結論。受け入れてしまえば、月原にとってこれは正義になり得る。

そう、人間は楽な方を選ぶ傾向にある。混沌とした今の世に、明確な正義や悪は定義付けが難しい。しかし正義と悪と、二極で物事を考える方が楽だから、人々は簡単に、手取り早く、善悪を明確にしたがる。自分の中にある正義という物差しだけで。だからこそ、今月原が下した結論に異論を唱えることなど誰が出来るだろうか？

出来る。そうつぶやいたのは、他ならぬ月原の心。

「敵なんだ……敵なんだ……」

口ではそうつぶやきながら、心の片隅でその定義づけに異論を唱えていた。

正論は正論だ。ウヘア・ウルフ狼男が言うように、何故彼が両親のかたき敵だと言える？ 証拠など無い

に等しいではないか。

いやしかし、この男はおおかみおとし狼男だ。そもそも邪悪な魔物を退治して何が悪い？

何故邪悪だと言い切れる？ だいたい、本当に両親のかたき敵はおおかみおとし狼男なのか？

え？ 自問自答の中で、月原は奇妙な疑問を今更感じ始めた。

両親を殺したのはおおかみおとし狼男。それはあの夢が私の記憶なのだから……そう言い訳を自分に語りかけながら、おかしな事に気付く。確かに、夢におおかみおとし狼男は登場する。しかし両親を斬りつけたのは……誰？ 何故夢に出ただけのおおかみおとし狼男を犯人だと？ だって、夢でパパとママを斬りつけたのは……あれ？

何故？

あれ？

何故？

おかしい……おかしい……何故、なんで、なんで、私、なんで、私、だって、そう言うから……犯人はおおかみおとし狼男 だって言うから……誰が？

「いや、だって……そう言うから……犯人は魔物だって……だって……」

「ん？ どうした、おい大丈夫か！」

明らかに様子がおかしくなった月原に、大上は刀も槍も落とし肩をつかみながら呼びかけた。常に無表情だった少女の顔は狼狽し、讒言のように意味不明なことをつぶやき続けている。

何が起きた？ 月原の心で行われていた葛藤と混乱を知るよしもない大上は、慌てた。少女の身体を揺さぶり、叫び、正気呼び戻そうとするがうまくいかない。

もはや説得どころではない。何が少女の中で起きているのかは全く予測できないが、自分の説得が引き金になったのは確か。大上は自信も混乱しながら、それでも月原の正気を呼び戻そうと必死だ。

必死に揺さぶっていたからだろうか。大上は月原の肩がじんわりと熱くなってきたのに気付いた。発熱？ 月原は突然の熱病に冒されたともいうのか？ それでも大上はしっかりと月原の肩をつかみ、何度も何度も呼びかける。

「いや、いやっ！」

しかしそれを月原本人が拒絶し、大上の手を乱暴に払いのける。慌てて駆け寄る大上の手を無闇に振り回す手で叩き、一歩二歩と後ずさる。

「誰？ 誰？ 私……パパ、ママ……いや、いやっ！ やめてえ！」

月原の絶叫。その天をも突き抜かんばかりの大声と共に、空へと立ち上る真っ赤な光源。

「なっ……」

大上はあまりの光景に、言葉を詰まらせた。

炎。月原の全身を赤々と炎が包み込んでいる。その勢いは激しく、まさに火柱と化していた。

「まずい！」

何が起こったのか。それは大上にも月原本人にも判らない。判るのは、この状況は全てものを悪化させるに過ぎないということ。

炎をどうにかしなければ。大上は急ぎ着ていたトレンチコートを脱ぎ、それで月原を包み込み、抱きしめた。

大上が着ていたトレンチコートは、蜘蛛女アルケニーの糸で作られた特注品。あらゆる厄災から身を守る効果があり、それは当然防火も含まれる。

「落ち着け、月原、落ち着け、大丈夫だから！」

自身の体毛が焦げる異臭に咽せそうになりながら、大上はまた何度も呼びかける。

流石はレディウェブのブランド物。コート自体は一切燃えることなく、鎮火に一役買っていた。しかし炎自体が月原を熱源にしているためか、完全な鎮火には至らない。

「私……私……」

大上がコート越しに月原と接触し声をかけ続ける。それが鎮火へと自体を導いたのか。月原が徐々に正気を取り戻すと、炎はそれに反比例して鎮火していく。

「大丈夫か？」

大上は月原を抱きしめたまま声をかけ、ゆっくりと頭を撫でた。

「はい……」

声は完全に普段の月原……大上が知る、学園での月原に戻っていた。

状況を理解するのに、月原は僅かな時間を要した。その間、月原は黙って狼男ウエア・ウルフに抱

きしめられ頭を撫でられている。

敵を討とうと狼男に迫り、反撃され、説教され、そして……混乱して……抱きめられている。状況を整理しても、今何故こうなっているかという事に対し戸惑いはある。あるが……何故か悪い気はしなかった。

自分が混乱に陥った事。そして自分の身体が突然燃え上がった事。その事実はいつかりと覚えている。その内容も。だが今それを思い返すことは状況を蒸し返すことになりそうで、月原はひとまず拒絶した。

今彼女に出来ること。まずは一言声をかけることだった。

「あの……もう、大丈夫ですから……」

言われて、大上は自分がずつと抱きしめたままだったことを思い返し、慌てて彼女を腕から解放した。と同時に、ちらりと月原を見て、そして慌てて後ろを振り返る。

「その、なんだ……コートは返さないで良いから、しっかりと着込んだ方が……」
言われて月原は自分の状況をもう一つ確認した。

裸だ。着ていた尼僧服は燃え尽き、トレンチコートだけを軽く掛けられている姿。月原は表情を変えず、しかし頬だけは炎のように赤く染め、言われたとおり大きすぎるトレンチコートに袖を通ししっかりと前を手で押さえる。

「一つだけ確認させてくれ」後ろを向いたまま、大上は尋ねた。「さっきのは……キミも初めてのことが？」

「……はい」

月原は初めて、ウヘア・ウルフ狼男の質問に対し素直に答えた。

「そうか……キミ自身も色々と困惑しているのだろう。今日はこれくらいにしようか」
本音を言えば、聞きたいことはいくらでもある。しかし今それを尋ねられる状況ではない。なにより、月原自身が心配だ。今はあらゆる状況から解放してあげるのが得策。

「しばらく……俺の言ったことを考えてみてくれ。それでも俺を敵だと言うなら……いや……いずれにしても、また近いうちに会おう」

振り返ることなく、大上はそのまま場を後にしようとして歩きだし、数歩目からは大きな跳躍に変えビルとビルの狭間に消えていった。

月原はただその背中を見つめ見送った。姿が消えた後もしばらく。

自分は……何者なのだろうか？ これまで築き上げてきた自分の中にある様々な物が音を立て崩壊していくのを、月明かりの下で実感していた。

「バツカじゃないの、アンタ。どーして半裸の女の子をその場に置いて行けるのよ！」

大切なトレンチコートを無くした言い訳も含め、大上が妖精学者の館で先ほどの一件を語ったところ、同席していた蜘蛛女が激怒した。自分の作品を紛失された事ももちろん彼女にとって腹立たしい報告なのだが、それ以上に大上の女性に対する配慮の無さが彼女の逆鱗に触れていた。

確かに月原をあの場合に残したのは良い対処とは言えなかったが、しかしだからといって大上が狼の姿で送っていくわけにもいかず、当然人間の姿になることも出来ず、偶然を装って第三者に接触させるのも、月原の羞恥心を刺激してしまうので望ましいとは言い難く

……対処が難しいケースだったのは事実だろう。そこで大上は一度離れた後に遠くから見守りつつ帰宅できるまで無事を確認するという方法をとったのだが……考えられる最善策だったかもしれないが、大上には一つ大きな配慮が欠けていた。

「どうして自分の服を脱いで渡さないのよ！ トレンチコートだけって、まるでどっかの変態みたいじゃないの！」

そもそも狼の姿になった大上は、裸の方が自然な姿に見えるだろう。だったら自分の服を渡すくらいの配慮は確かに欲しいところ。その事に言われて気付いた大上は、あまりにハードボイルドらしからぬ対応だったと落ち込んでいた。加えて、今彼は反省を促す意味でアルケニーに正座を強制されている。全裸で。

「まあ、そのくらいにしといてやれって……だいぶ反省しているようだし」

顔も肩も耳も尻尾も下げ、シユンとなった大上に館の主がフォローを入れた。

「まったく……いつも言ってるでしょ、もっと女性の扱いを学びなさいって。それでよくハードボイルドを気取れるわね」

キツイ一言に、より丸く小さくなる大上。だがひとまずこれで気が済んだのか、アルケニーは溜息を最後に口を閉ざした。

「さて……」話題を切り替えるために一呼吸置いてから、天道寺は顎に手を当てながら語り出す。「発火能力か……ますますオカルト方面に傾き始めたな」

月原の身に起こった奇つ怪な事実。本人も全く予知していなかった能力の発動に、誰もが首をかしげていた。

「チャコ、彼女の血筋は何か特別な家系か何かなのか？」

天道寺はあらかじめ招集を呼びかけていた、月原の身の上に関しては一番詳しい四方に話を振る。本人が自覚していなかった能力ということは、何らかの儀式や修行を行ったわけではないだろうと推測出来る。となれば、いわゆる「潜在能力」の発動ということなのだろうが、そうなる原因は血筋などに関わるのでは……そう天道寺は答えを導いた。三流小説などに見られがちな話だが、しかし現実として潜在能力は発動され、そして考えられる原因は定番通りだが特別な家系しか思いつかない。

天道寺の言葉を受け、四方は目を瞑りしばらく考え込んだ。それは月原の家系図を脳裏に浮かべる為の沈黙というわけではなく、どう伝えるべきかを思索しているが為の沈黙だった。

「……彼女の祖母は、我らが女神ブリージットの加護を受けられたケルト人です」

四方の言葉に驚いたのは、天道寺とメイドの、妖精を良く知る二人だけだった。場の反応を予見していた四方は、そのまま詳しい説明に入った。

「ケルト人とは、アイルランドやイギリスなどヨーロッパの一部地方で栄えた民族です。しかし他の民族に攻め滅ぼされて途絶えた……事になっています」

途絶えたと言っても根絶やしに抹殺されたわけではないため、当然ケルト人の血は他民族と混ざり合う形で引き継がれている。単純に民族という形では滅んだというだけの話だ。

「そのケルト人達が崇拜した神々の中に、女神ブリージットもいたわけですが……」

「えっ、でもチャコちゃんの修道院ってキリスト教の修道院じゃないの？」

説明の途中で、角川が口を挟んだ。その疑問に四方は丁寧な解説を始める。
「表向きはそうになっています。女神ブリージットへの信仰や文化はアイルランドに

根強く残っていたのですが、そこへ宣教師として訪れたパトリックがその信仰や文化を追い出す代わりに取り込むことで布教しました。そしてブリージットはケルト人の女神からキリスト教の聖女へと姿を変え信仰されるようになりました」

「聖パトリック女学園とブリージット女子修道院に深い繋がりがあるのは、こういう歴史背景があつてなんだよ」

四方の解説を補足するように天道寺が言葉を足した。

「ですから、表向きブリージット女子修道院はキリスト教の修道院として活動しています。しかし我らの修道院は密かに、女神ブリージットを崇拜し続けています……そのような意味において考えると、私達も異端教団と言われておかしくはないのですが」

僅かに自嘲気味な笑みが四方からこぼれた。異端教団と言うと聞こえは悪いが、しかし異端の全てが悪というわけではなく、当然四方たちの修道院は怪しげな教団ではけして無い。それはこの場にいる全員がよく判っていること。

「話を戻します……月原さんの祖母は純粋なケルト人ではありませんでしたが、女神の加護を受けながら信仰とケルト人の文化を引き継がれていました。しかし結婚を機にその役目を終えています。娘さん、つまり月原さんの母親は女神への信仰こそされていましたが、一信徒という立場でしかありませんでした」

そして月原本人は祖母から母親へと流れてきた自分の生い立ちをまだ知らされていなかったはずだと、四方は付け加える。

「月原さんの祖母は女神の加護こそ受けてらしたのですが、特別な力を持っていたとは伺っておりませんし、おそらくそのような事実もなかったと思います。ですから何故月原さんにそのような力があったのか……考えられるとすれば……」

「ブリージットの加護か。かの女神が司っていたのは……火と電かまどだったな」

ここでようやく、天道寺が驚いていた訳を他の者達が理解した。一致したキーワードに、今更ながら今度は大上達が驚く。

「いやでも……じゃあなんで今更彼女に？」

大上の疑問には、誰も答えられない。月原自身はブリージットを崇拜していたわけではなく、むしろ全く別の異端教団カルトに身を置きながら、しかも本人は「信仰心はない」と公言している。そんな彼女に女神の加護が受けられるのか？

誰もが疑問符をいくつも頭上に並べる中、アイリンが静かに話を切り出し始める。

「……問題はむしろ、彼女がその発火能力バイロキネシスを発動するきっかけだと思うのですが。ケンの話では、説得を試みた途中から混乱し始めていたようだというのですが……何故そこで混乱し始めたのが気になります」

アイリンは一度言葉を切り、自分の推理を再び披露し始める。

「混乱の原因は……というよりも、ケンはこの話しかしていないと思いますが……敵かたきの定義が曖昧になったことから生じていると思われます。そもそも当時の記憶がない彼女が、どうして両親の敵をウエアー・ウルフ狼男だと断定するようになったのか……それはおそらく、彼女が関わる異端教団カルトが関与しているのは間違いありません。ではどのような方法で、異端教団は彼女に両親の敵がウエアー・ウルフ狼男だと思ひこませることが出来たのでしょうか？」

メイドの言葉を待たずして、おおよその見当は皆付け始めていた。そして全員の見解を代表して、アイリンがその言葉を紡ぎ出す。

「その手段は、彼女を混乱に陥おちいらせるような方法を用いたとしか考えられません。となれば、その方法は……催眠術のような、何らかの記憶操作ではないかと」

場は静まりかえっているが、全員の意見が一致しているのはその静かな空気が皆に伝えている。

「そついやあの学園長、オカルト方面ばかりじゃなく催眠術とかにも興味を示していたらしいな……そつちか、そつちで繋がったか……」

自分が仕入れた小さな情報が実を結んだ瞬間、天道寺は独り言のようにつぶやいた。しかし実は結んだが、その実が結局なんなのか、そこまでは至らない。歯がゆさばかりが残るのみ。

「……あのさ。」角川にしては珍しく、遠慮がちに口を開く。「学園長がエミりん（；）に催眠術をかけたとしたら……なんで？ 洗脳して自分の仲間にするため？」

角川が感じた疑問は場の誰もが持つており、そして誰も答えを求め、そして尋ねた角川も含め皆同じ推測をしていた。その答えを、代表して大上が口にする。

「それもあるだろうが……もう一つ、証拠隠滅という目的もあっただろう。月原さんは両親殺害当時の記憶がないとはいえ、何時思い出してもおかしくはない状態だったはず。ならそのままよりは、記憶を上書きして完全に封じ込めた方が安心だと考えた……」

それはつまり、月原の両親を殺したのは学園長だと、皆が推理しているということが前提。そしてこの推理に誰も異論は唱えない。

もしこの推理が正しかったとすると……月原にとって本当の両親の敵は、彼女が所属する異端教団カルトの代表者で今現在彼女の実質的な保護者である学園長ということになる。それは様々な意味で、とても危険な関係だろう。

月原の腕前は今一つで、実践的なハンターとは呼べないものではあったが……推理が正しければ……少なくとも異端教団カルトの長は人を二人殺していることになる。ならばカウンターハンターとしてとても見過ごせない。大上は改めて、今回の一件を無事解決しなければと心に誓う。

「……明日もう一度あの学園長を洗い直してみるか。ケン、お前は どうする？ 明日は学園休みだろ」

大上は天道寺に尋ねられるまでもなく、明日の行動を心に決めていた。

ふと窓の外を眺める。そこには大きな満月。無事に帰宅したのは見届けたが、本当に大丈夫だろうか？ 大上はただ、彼女の身を案じるのみだった。

大上の心配をよそに、月原は彼が心配するよりも前に無事帰宅し、既にトレンチコートを脱ぎ服に袖を通していった。

替えの尼僧服に。

そして月原は今薄暗い礼拝堂の中で、両手を胸の前で握り瞳を閉じ、静かに祈りを捧げていた。いや……祈りを捧げるふりをしていた。

アレは何だったのだろうか。突然自分の身体から炎が噴き出した、あの現象は。その事はかりが頭の中を駆けめぐり、グノーシス主義が信仰する神アインへ祈りを捧げる余裕などどこにもなかった。

そもそも月原は、真剣に神を信じ祈りを捧げたことなど一度たりとも無かった。復讐を。ただその事ばかりが彼女の心を占めていた。

そんな彼女の心に、大きな変化が訪れようとしている。いやもう、訪れている。

礼拝堂では教壇に立つ異端教団カルトの教祖的な代表……木宮司教が信者達に話を言って聞かせている。信者達は熱心に耳を傾け司教の言葉を聞いているが、唯一月原の耳には全く届いていない。信仰心がないことを自覚している月原だったが、話そのものはいつも聞いていた。聞きながら、復讐の心を忘れないうように常に努めていた。それなのに、月原はその努めも放棄している。

私は……本当に復讐をしたいのだろうか？ ふと湧き上がった疑問。そんなことを僅かでも感じた自分に驚き、そしてほんの僅かだったその疑問が急速に膨らんでいくことにまた驚いている。こんな疑問、一度だつて考えたこともないのに、何故今になって。疑問を感じたことに疑問を持ち始めた月原は、これまでの自分を振り返り始めた。

両親が亡くなった事への悲しみ。そして失っている当時の記憶に対する不安。それは今でも持ち続けている。しかし復讐を果たそうなどと考え始めたのは何時から？ それは両親の敵かたきを初めて知ったときから……おおかみおとし狼男おおかみおとしの存在を知ってから。その狼男おおかみおとしは実在し、これで敵かたきが討てると信じていた。しかしあの男は、信じてきたものをことごとく打ち崩し、そして……炎が身体を包んだ。

そうか……月原は一つのことと思いがたつた。グツグツと煮えたぎっていた復讐心が薄れたのは、炎に包まれてからだ。まるで煮詰まっていた復讐心が炎と共に全て放出されてしまったかのよう。

それだけではない。あれだけ拒絶していた……初めておおかみおとし狼男おおかみおとしと出会ってから頑かたくなに拒絶していた彼の言葉が、今は素直に受け止められる。この心境の変化はいったい何故起きたのか？ 自分の身に起きたことが炎の噴出という奇跡まじなだけでない事に、月原は改めて驚いていた。

何が起き、何が変わったのだろうか。月原はじつと、それを何度も何度も自分に問いかけていた。

「どうかしましたか？ シスター月原」

声を掛けられ、月原は意識を現実へと引き戻された。ふと辺りを見回すと、信者達が腰を上げ帰り始めている。どうやら集会が終わったことにも気付かぬほど、自問自答に没頭していたらしい。

「いえ……なんでも……」

何でもない訳がない。それは本人にも声を掛けた木宮にも判りきっている。しかし月原はこう答えるより他になかった。

「あの、木宮司教……」

自らは引き出せなかった答えを、月原は司教から……失った過去を見せてくれた司教から得ようと問いかけた。

「何故、私の敵かたきを探す手伝いをしてくださらなかったのですか？」

司教は一度、月原の目撃報告を信者達の前で公表した。いよいよ我らの敵が現れた、と。しかしそれから、度々集会の時にその話題は持ち出すものの、具体的な搜索をしようとはしなかった。今日のこと、満月だから現れるはずだと進言したにもかかわらず、司教は

特に何もしなかった。

「言っているでしょう？ シスター月原。全ては神アイオーンの導きのままに。また時が来ればあなたの敵かたきにきつと出会えます。ですから今は、心乱さず待ちなさい」

月原の口ぶりから、木宮は狼男ウエア・ウルフとの接触がなかったものと早合点している。それは月原も感じたが、正そうとはしなかった。今日彼に出会えたことは黙っていた方が良さそうだ。何故かそう月原は判断した。

「私が差し上げたお香アロマテラピーは毎晩使っていますか？ どうやら今日は興奮し心も信仰も乱れている様子。あのお香アロマテラピーを焚いて、今夜はゆっくりお休みなさい」

にこやかに告げ、木宮は場を後にした。月原は司教の背を礼拝堂から見えなくなるまで見送っている。

お香アロマテラピー……月原は思い当たった。あのお香アロマテラピーを焚く度に、あの夢ドリームを見ていること。そして同時に、復讐心をかき立てられることを。

鬱積うつせきしていた復讐心が薄らいだ今、月原は司教が渡してくるお香アロマテラピーに怪しさを覚えた。

そういえば……毎晩焚くようにと言いつけられながらも、滅多に使う気になれなかったのは、本能が無意識に警告を発していたからかもしれない。今ならそれを実感できる。なぜならば、既にあのお香アロマテラピーを焚く気になれない自分がそこにいるから。

初めて、月原は木宮司教という男に何らかの疑いを向け始めていた。

翌朝。木宮大介という男を再度調査しはじめた天道寺は、彼が聖パトリック女学園の学園長に就任する以前の職歴や学歴、そしてその周囲に関して徹底的に洗い出していた。角川が学園のサーバから持ち出した木宮の個人情報に頼りに、天道寺は自らの足で情報の収集に駆け回る。

聞き込みそのものはさして問題にならなかった。天道寺は聖パトリック女学園の制服を着た角川を連れ回し、「学園長のことを校内新聞で記事にする」という名目で木宮のことを先々で尋ねたが、まず疑われることはなかった。ただ問題は、もっと別のところにあつたのだが……。

「友達いなかっただんじやないの？ こいつ^(^_^)」

朝から聞き取り調査を始めてそろそろ夕刻^(^_^)という時間にさしかかったところで、角川がこぼした愚痴がこれだった。

そう多い人数とは言えないが、それでも十数人の元同僚、元担任、元同級生に話を聞いた結果、ほぼ全員的一致した見解は「印象に薄くて覚えていない」だった。暗かつたわけではないが目立たない人物で、一人でよく本を読んでいたというのも、ほぼ一致している。これでは確かに角川が言うように、親しい友達がいたかどうかは疑わしい。

「いただろうけど……少数で、色んな意味で濃い友達^{デューブな}だったろうなあ」

有り体に言えば、オタクだったと思われる。そんな印象だったからか、現在木宮が学園長を務めていると伝えると驚く人は多かった。

「なんかもー、これ以上は無駄じゃない？ その濃い友達^{デューブな}つてのがいるとしても、特定出来そうにないしさあ^(;)」

既に飽きている角川は、暇な時間を早く終わらせたいと天道寺を急かした。

「もうちょっと待て。とりあえずこれを読むまでな」

今二人は、木宮が通っていた高校の資料室にいる。天道寺が今目を通して居るのは、木宮が卒業した際に制作された卒業アルバム。高校時代の木宮が卒業文集として何を書き記したかを調べていた。

「……この頃から既にオカルト方面へはまっていたみたいだな」

木宮は卒業文集の中で、クトゥルフ神話について熱く語っていた。およそ卒業する生徒が書き記すような事とは思えぬその内容は、誰かに読ませるといよりは、それこそクトゥルフ神話のような怪奇^{ホラーミステリー}幻想の主人公が書き残す日記のような……一方的な狂言に近かつた。

「うわ、マジキモイよこいつ……いつちやてない？^(A)」

横からのぞき見していた角川が完全に引いている。この手の物になれている天道寺ですら眉間にしわを寄せるほどだった。

あまりにも聞いているイメージと違いすぎる。天道寺が文集を読んで真っ先に感じたのは、大上や四方^{よも}から聞いていた学園長の人柄と、文集を書いた人物とのギャップ。柔和な笑顔が印象的で温厚そうな人……という評価を受けた人物が、若かりし頃に狂氣的な詩文を書いていたとは、実物を見ても頭の中ではどうにも繋がらない。しかしこれが現実で、間違いなく繋がっているはずなのだ。

「一人の作家が生み出した物語が、後に神話へと昇華していった。なら初めから神話を創造していけば、本物の神が生まれるのではないだろうか……か。なんか所々、しっかりと

した文が紛れているな……内容はまともとはいえないが」

文集の一文を読み上げながら、天道寺は内容を批評する。確かに角川が言うように気持ちの悪い狂気的内容のだが、支離滅裂な文章ではなく、むしろ理路整然としていた。言い換えるなら、「読ませる狂気」とでも言えるだろうか？

「でもなんかさあ、マジいつちゃってるっぽいよね……これでよく学園長だとか教授だとかになれたね。なんだっけ、グノーシスとかってのもこないっちゃってる教団なの？」
角川の疑問に、天道寺は否定の言葉を口にしようとして……ふと思いとどまった。答える代わりに天道寺は手にした卒業アルバムを見直し、木宮が記した狂気の言葉を目で追った。

「そうか……そうか！ 思い違いをしていたのはそこか……」

「え？ なになに、なによ、なんなの？」

突然声を張り上げる天道寺に、角川が驚き狼狽えた。そして何も言わずアルバムをしまい急ぎ部屋を出る天道寺の後を訳もわからぬままついて行く。

「判ったよ。どこかで思い違いをしているとは思っていたが……そうだよ、俺達は最初から間違えていたんだ」

角川の動揺に天道寺は足早に廊下を歩きながら答え始めるが、当然それは角川にとって何の答えにもなっていない。

「藤美、ケンは確か学園に行ってたな？」

「う、うん。今頃エミリンと会ってると思うけど……」

「よし、ケンを拾ってから戻ろっ。そうか……これはやっかいなことになってきたな……」
一人天道寺だけが納得し、混乱気味の角川を引き連れて学校内の駐車場へと向かった。

いつもの時間……ほんの数日での事なのに、いつもの、と感じた事を今更ながら不思議に思う。不思議に思うが、違和感はない。

平日なら授業が終わり、各生徒が帰宅なり部活なりを始める時間帯。休日の際は熱心な運動部員が汗を流しているのがちらほらと見られるにとどまっている。そんな中、大上は学園内の教会に来ていた。

教会の扉を開け、礼拝堂に光と、大上の影が入り込む。影の先、最前列の長椅子には一人の女生徒が座っていた。

「……来てくださると思っていました、大上神父」
立ち上がり振り返る女生徒。長い髪が揺らめき、差し込む光を浴びてキラキラと輝いている。

女生徒……月原は静かに頭を下げ、大上が歩み寄るのを待っている。

会いたかった。双方共に会いたがっていた。しかし何一つ連絡はせず、ただ「いつもの時間」に「いつもの場所」へ向かっただけ。ただそれだけで、二人はすれ違うことなく約束も無しに出会えた。

「待たせてしまいましたか？」

大上の質問に、月原は首を横に振り答える。

それから……次の言葉が出てこない。

会いたかった。そして会えた二人は、それだけでひとまず幸福と安堵を得てしまった。その余韻が、静寂という間をしばし作り出している。二人はその静寂の中、ただ相手を見つめ続けていた。

「……聞いて欲しいことがあります」

静寂を打ち破り口を開いたのは、月原からだった。

「私は七年前に両親を……殺されました」

一瞬視線を落とした月原であったが、すぐに視線を戻し、まっすぐに大上を見つめ話を続ける。

「その現場に私もいたようなのですが……記憶がありませんでした。しかし私は、夢を見ることで当時の記憶を断片的に思い出したんです」

「夢？」

月原はゆっくりと首を縦に振る。

「三年前、この学園に入学してから……父の親友だったという学園長に、催眠療法というのを施していただきました」

やはりか。大上は予測通り学園長が絡んでいたことに納得し、そして怒りが沸々と沸いてきた。なにが催眠療法だ、と。

「夢の中では……両親が殺され、おおかみおとし狼男が私に手を伸ばして来て……そして……」

突然月原はうつむき、まるで寒そうに腕を胸の前で組み小刻みに震えだした。それでも月原は、どうにか唇を動かし言葉を絞り出す。

「家が、両親が……炎に包まれていくんです……」

何故こんなにも震えるのだろうか。大上がそう疑問を持つのは当然だが、当の本人である月原も、自分が何故こんなにも震えているのか疑問だった。

トラウマになっていたのだろうか？ それとも……やはり心のどこかで認めているからなのか。それでも告げなければ。月原はありったけの勇気で胸の内を明かす。

「私が……私が燃やしたのかもしれない……」

「え？」

突然の、そして予想外の告白に、大上は一声発することしか出来ずにいた。大上にとつては月原の言う「おおかみおとし狼男が手を伸ばして来た」という発言の方が重要だと思っていたのだが、予期せぬ方向に話が動き戸惑った。しかしここで動揺しては月原を不安にさせるだけ。大上は黙って、月原の言葉を待った。

「全然……今の今まで、考えないようにしてたのに……」

本当に、つい先ほどまでは考えもしなかったこと。何故今になって突然思い出したのか。止まらぬ震えに苦しみながら、月原はそれでも独白していった。まるで神に懺悔ざんげをするかのように。

「そう……初めて夢を見たときもこうだった……その事を学園長に話したら……そうだ、その時学園長が、私のせいじゃない、みんな私が見たおおかみおとし狼男がやった事ですって、何度も何度も……」

震えが大きくなる。まるで封じられたかのようなその記憶が鮮明になるにつれ、月原は何故自分が震えているのかを理解し始める。

怖いのだ。認めることが。

「だから私、全てを狼男おおかみおとこのせいにして……狼男おおかみおとこを探して倒せば良いんだって……だから木宮司教の言われるままに……でも、それは間違ってるって、間違ってるから……それに気付いたから私……」

なんということだろうか。大上は今月原が怯えている原因を作り出したのが自分であることを悟り、胸が張り裂けそうになる。むろん大上がしたこと、彼の説得が間違っていたわけではない。それは重々承知しているが、しかし今こうして月原を苦しめている原因の一端に自分が関わっている事に、大上が責任を感じてしまうのは無理からぬ事かもしれない。

「だから本当は……本当は私が……パパと、ママを……私が……」

いけない！ 大上はまた混乱し始めた月原に危機感を募らせた。このままでは発火能力バイロキネシスをまた誘発してしまうかもしれない。

「あ……」

咄嗟とつさだった。どうしてこのような行動に出たのか、大上自身もよく判ってはいない。だがこれが良いのだと、行動に出るからそう思えた。

抱きしめていた。大上は月原を抱きしめていた。

「大丈夫、キミじゃない……キミじゃないよ……」

あやすように、頭を撫でながら大上は囁くように言い聞かせる。

まるで昨夜のように。

あの夜、月原から噴き出した炎が大上に抱きしめられながら鎮火していったように、月原の震えも次第に弱まり、そして収まった。

「キミのご両親には、刃物で切られた痕あとがあつたそうじゃないか……大丈夫、キミのせいじゃないよ……」

月原は自分に発火能力バイロキネシスという力がある事を知り、その力と夢で見た光景がシンクロしてしまったのだろう。大上に夢の話をしようにとしたことで。月原は突然のフラッシュバックフラッシュバックと身震いが生じた原因を、温もりの中で突き止めていた。

暖かい。まどろみそうな感触に気を緩めながら、月原は抱擁ほうようされている。

この感触、この暖かさ……どこか懐かしい。ふと月原は記憶をたぐる。

遠い昔、父に抱きしめてもらったあの暖かさ。懐かしい思い出……でも、もつと最近、この暖かさをどこかで……月原の記憶は、瞬時にごく最近へと引き戻される。

あの人だ。あの人と同じ……月原はいつの間にか、自らも腕を大上に回していた。

「懺悔ざんげを……私の懺悔を聞いてください、月原神父……」

誰へ向けての懺悔か。それを突き詰めるのは、もう月原の中では愚問となっていた。確信は全くないが、月原の中で聞いて欲しい人と謝るべき人は、もはや同一か思えなかった。

「私で良ければ……」

よくよく彼の声を聞けば、あの人と同じではないか。もし確信があるとすれば、その声と、この抱擁。それだけで月原には充分だった。

「ずっと……私は敵かたきを討つことばかりを考えていました。それが正しいと信じていました。だから友達も作らず、趣味も持たず……敵を討つための修行をする為に、神様を信じ

るぶりまでしました」

ふりか……大上はその言葉に安堵していた。もし真剣に武闘派グノーシス主義を信仰していたらと悩んでいたが、これで一つ解決できた。

そういえば以前、彼女は信仰心が無いことと、神を信じる人達の好意に甘えることの狭間に悩んでいた。それは彼女が敵討ちのために異端教団カルトを利用していたことも含んでいたのだろう。

「敵だと思っていた狼男おおかみおとこを探したり調べたり……槍の使い方も学びました。そして気付いたら私……みんなから冷たい人って言われてました。私、怒ることしか出来なくなっていました……」

冷静な人と見られていた月原の根本。それはあまりにも悲しい経緯。そこへ誘ったのは詐欺師木宮大介。大上は異端教団への怒りを再燃し始めていた。

「私……ちゃんとあの人に謝りたい。あの人にお礼を言いたい。でも……どんな顔をして謝ればいいのか、お礼を言えいいのか……もう判らないんです。言葉だけじゃ、冷たい私じゃダメですよ……」

今も泣きたかった。しかし涙の出し方も忘れてしまった。昨日までは気にもとめなかったことが、本当はこんなにも辛いことなんだと月原は痛感していた。

「そんなことないですよ……」

月原の頭を撫でながら、大上は声を掛ける。

「言霊というのを知っていますか？ 言葉に宿る力のことですが……それはすなわち、感情のことです」

自らの言葉にもその言霊を乗せ、大上はゆっくりと語り聞かせていく。

「心を込めた言葉には、ちゃんと感情がこもり、伝わるものです。大丈夫。あなたなら、伝えることが出来ますから」

もう伝わっているから。口にはしないがそこまでの感情を言葉に乗せる大上。

「どうしても気になるのです……こうして顔を見せないまま伝えても良いじゃないですか。私で良ければ、いつでも胸を貸しますよ」

あなたの言う「あの人」は、すぐ目の前にいるのだから。そこまで言ってしまったかった大上だったが、それはさすがに口を閉ざした。しかしもう……バレているような気がする。大上は何となく、月原から伝わる「言霊」で、それを感じていた。

「ありがとうございます……ごさいます……ごめんなさい……」

今自分はどんな顔をしているのだろうか。言葉に感謝と謝罪を乗せながら、月原は思う。少しでも、ほんの少しでも、笑えていたらいいな。

再び静寂が二人を包む。それはとてもとても、暖かくゆったりとした一時。

「困りましたね……注意したはずですよ？ 大上神父」

幸福は本当に一時しか持続しなかった。突然二人に掛けられた声。我に振り返り周囲を見回すと、奥の扉から学園長が数名従え乱入している。振り返ると、入り口の扉からも神父の姿をした者が三人ほど、扉を塞ぐように立っていた。

「生徒に手を出すとは……それも神の前で。恥を知りなさい」

言葉こそ説教、そして表情こそ柔和だが、態度は侮蔑ぶべつ。笑顔の仮面を剥がせば、そこには意地の悪い笑みが素顔に張り付いているのだろう。

先ほど大上が言霊の話をしたが、それはこの学園長にも同じ事が言えた。これまで大上が感じていた学園長の温厚そうな人柄は、彼の言葉からは全く感じられない。代わりに、刺々しく攻撃的な意志が伝わってくる。これが彼の本性なのだろう。

まったく、たいした役者だ。大上は口元をつり上げ苦笑していた。

「怪しいとは思っていましたよ……来て早々、シスター月原と接触を図ったところからね。どうやって理事長を騙したのかは知りませんが、まったくんだ詐欺師ですよあなたは」
「その言葉、そっくり返しますよ。木宮学園長」

月原を、生徒を、理事長を、あらゆる人を欺いた男を、大上は睨みつけた。

学園長の言葉をそのまま信じるなら、どうやら大上は初めから目を付けられていたらしい。確かに自分が目を掛けている月原にすぐさま接触すれば警戒はするだろうし、なにより突然決まった研修員の訪問だ。後ろめたいことを山ほど行ってきた男なら、あらゆる事に敏感となり、唐突な状況に神経を尖らせるのは当然のことだろう。木宮は静かに、大上の動向を監視していたようだ。だからこそ、このタイミングで待ち伏せすることも出来た。

「シスター月原。その男はあなたを惑わす悪魔です。さあ、こちらへ来なさい」

手を伸ばし月原を呼び込む学園長。しかし月原は大上の腕にしがみつき動かなかった。その態度に、学園長の眉がぴくりと動く。

「なるほど。私が思っていた以上に、巧みな話術をお持ちだったようだね、大上神父……いや、いたいいけな子羊を惑わす悪魔め」

可愛い信徒に無視されながらも、学園長の顔にはまだ余裕が見られる。

「どのような言葉でシスター月原の心を乱したのかは知りませんが……愚かなことです。神の子が、そう易々と悪魔に心を許す事は無いのです。それを思い知るがいい」

ほくそ笑む学園長。彼には何か、決定的な切り札があるのだろう。大上は黙ったまま身と心を構える。

「シスター月原、その男こそ、あなたが探していたご両親の敵、狼男なのですよ！」
バレていたのか？ この発言にはさすがに驚かされたか、大上は動揺する。が、同時に醜態をさらすな、ハードボイルドでいると、自分に叱咤する。それが功を奏したのか、少なくとも態度にはほとんど表れることはなかった。

それよりも気になるのは、月原の反応。大上は自分の腕にしがみついている月原へと視線を移す。

「……違う」

首を横に振り、月原は学園長の言葉を否定していた。

「大上神父は……敵じゃな……」
月原も学園長の言葉に一瞬動揺したが、惑わされることはなかった。誰の言葉が正しく、そして信用できるか。昨日までの月原なら、間違いなく学園長の言葉に従っていただろう。しかし大上の説得と優しさ、そして不意に感じた学園長……木宮司祭への不信任が、月原の決断に大きく関与していた。

しがみついていた大上の腕に、月原はよりぎゅっと力を込める。自分が初めて木宮司祭に逆らったことに対する僅かな恐怖が彼女の腕に力を込めさせたが、しかし月原は自分の発言に確信を持っており、後悔などするはずもなかった。

対して木宮は、誰の目から見ても判るほどに驚愕していた。絶対の自信を持っていた

一言がこうもあっさり拒絶され、二の句が継げずにいる。よほどおおかみおとこ 狼男 というキーワードが月原を揺り動かすものと自信を持っていたのだろうが、こうもアツサリと効果を示さなかったのが想定外だった様子。

「……どうやら当てが外れたようですね、学園長」

月原の言動にホッと胸をなで下ろした大上。同時に反撃の機会と勇気を与えてもらった大上は、余裕を無くし柔和な仮面の剥がれた木宮に言葉で切り返した。

「そっくりそのまま、あなたの言葉をお返ししましょうか……神の子が、そう易々と悪魔に心を許す事は無いんですよ」

ニヤリと不適に微笑み、大上は鎌を掛けに出る。

「洗脳がうまくいっていると思っていましたか？ 残念ながら、彼女はあなたの信じる邪神を信仰するほど愚かではないんですよ」

さて、相手の反応はどうだ？ 大上は木宮をじっと睨みつけた。

結果はあからさま。先ほど以上に驚愕し動揺を隠さない異端教団カルトの教祖がそこにいる。

そして驚き動揺しているのは彼一人ではない。周囲を囲んでいる邪教徒も、そして月原も目を見開き木宮と大上を交互に見つめていた。

ハッキリした確証は無かったが、月原の口から「催眠療法」の事が聞けた大上は、これまでの推理と合わせ答えを導き出した。それを担保にして大きな賭に出たわけだが……予想以上の大当たりだった様子。

だが問題は、あまりにも大当たりすぎたことか。

「おのれ……貴様何者だ！ 世迷い言を神の前でよくも……みなさん、あの悪魔を捉えシスター月原を救い出すのです！」

挑発としての効果が大きすぎた。囲まれている以上、どこかで隙を見て逃げ出す公算をしておくべきだったが、調子に乗りすぎた。

動揺していた異端教団カルトの信徒達だったが、教祖の一言でそれも収まり、彼の言葉に従い二人に詰め寄ってくる。

このままではずい。焦り逸る気持ちを落ち着かせながら周囲を見渡す大上。信徒は前と後ろに三人ずつ。前から迫る信徒はまっすぐやってくるが、後方の信徒達は礼拝堂に設置されている長椅子が邪魔でまっすぐには来られない。椅子と椅子の間、中央の通路に三人が並んで迫ってくる。

「走って！」

大上は月原の手を引き、礼拝堂の横へと走り出す。そこから長椅子の脇を通り正面の扉へと向かった。中央にいた信徒達はそれに気づき長椅子の間を通るように脇へと進もうとするが、十分なスペースがないためたついている。

しかし一人がすぐに引き返し、大上達を先回りする。

「走って、逃げて！」

大上は先回りしてきた信徒と組み合いながら叫んだ。

しかし月原は立ち止まってしまふ。このまま逃げて良いのか……それに、どこへ逃げるというのか。なにより、大上を置いて行くなど出来ようものか、と。

「かまうな！ 逃げるんだ、早く！」

後ろから追いついた他の信徒達を食い止めながら叫ぶ大上。しかしそれでも、月原は決

断しかねている。

そこへ、大上が食い止めきれなかった信徒が月原に迫ってきた。

捕まっちゃいけない。それは本能が下した決断だったのか、月原は迫る元^元同胞に恐怖を感じ、扉へと急いだ。

大きな扉を開けると、月原の肩に手が掛かった。それを振り払い、外へと駆け出す。とにかく逃げなくては。月原はそのまま学園の外へ、校門へと走り出した。後ろからは二人の男が迫ってくる。

元々運動神経の良かった月原。すぐに追いつかれはしないが、しかし男女の、そして子供と大人の身体能力の違いは大きく、振り切れるほどには至らない。

それでも外へ。誰か助けを呼ばなければ。不運なことに、部活動に熱中している生徒達は月原達のことを……見えていたとしても……誰も気にとめてはくれなかった。

徐々に絶望が月原の心を覆い尽くす。息を切らし懸命に走るが、どこまで走ればいいのか……そんな月原に、希望の光が差し込んだ。

校門のすぐ近くに、赤い自動車が停車している。そして二人の人影……一人は学園の制服を着ていた。助かるかも。

「ちよっ、鷹丸ちゃん！」

女生徒が気付いてくれた。もう一人の男性に声を掛けている。男は追われている月原を見て驚いていたが、すぐさま行動を起こした。

「藤美、彼女を中に！」

懐に手を入れ、駆け寄る男。彼はそのまま月原を通り過ぎ、後方の男達に向け何か小袋のようなものを投げつけた。

キラキラと輝く、それはどうやら何かの粉が入った小袋。突然顔に小袋を投げつけられ目の前できらめく粉が舞う。男達は慌てて顔を拭うが、目に入った粉はなかなかとれない。それどころか、視界がチカチカし意識も多少朦朧^{もうちゅう}となっている。

「妖精の粉だ、しばらくはそうしてな。クリス、出るぞ」

既に車の中へ乗り込んだ二人は何も手を付けていないのに、運転席の扉が独りでに開く。そこへ男が乗り込み、シートベルトを付けながらハンドルに手を掛けないまま、走り出した。

「まっ、待つてください！ まだ大上神父が、教会の中に！」

息もまだ整えられないまま、月原は素性を知らない二人に訴える。

「えっ、ケンちゃんが？ ちよっ、どうする鷹丸ちゃん……」

月原同様に狼狽^{うつた}始めた女生徒。しかし車は止まらなかった。

「……残念だけど、今の俺達にケンを助けられるだけの戦力はないよ。あいつなら大丈夫。後できっと助けるから……」

非情なようだが、それは正しい判断だろう。仮に多少戦えたとしても、相手の人数もハッキリせず、なおかつ今逃げ出してきたばかりの月原を連れて戻るわけにはいかない。先に逃げてもらったとしても、太った男と非力な女生徒で何が出来るというのか。

「でも……」

月原にもその事情は判っている。判ってはいるが、しかしそう簡単に割り切れるものではない。それでも車は、どんどん学園を離れていった。

強く強く後ろ髪を引かれながら、三人は運転手の館……妖精学者の館へと向かっていた。

「俺達は最初から、大きな思い違いをしていたんだ」

館に戻った天道寺は、まず月原を落ち着かせ、彼女から教会で起こった一連の出来事を聞き出していた。その上で、今後の対策も含め館に集まった大上を除くメンバーに自分の推理を披露し始めた。

「ケン是最初に月原さんと出会ったとき、彼女が着ていた尼僧服にグノーシス十字の印を見つけ、月原さんを「グノーシス主義の一派」で「武闘派」の「ハンター」と断定した。それに俺達も異論はなかったが、そもそもこれが間違っていたんだ」

しばし間をおき、反応を伺う天道寺。一通り場の面子を見渡してから、言葉を続けた。

「まずケンは、不当なハンターを見つける手段として噂を藤美に流させ……月原さんがその噂に飛びつき、ケンを見つけすぐに襲ってきた事から、ケンは月原さんのことをハンターだと思った。そしてグノーシス十字を見て、グノーシス主義の武闘派だと推測したわけだが……実際には、月原さんはハンターではなくご両親の敵が討ちたかっただけだった……そうですね？ 月原さん」

天道寺に尋ねられ、月原はこくりと一度頷いた。

月原は館に到着してから、大上が満月の夜に二度出会った狼男と同一人物なのだと聞かされた。何となく察していた月原は特にもう驚かなかったが、むしろ月原がどう反応するか構えていた天道寺達の方が月原に驚かされていた。そして天道寺は、月原を自分達の事情を知る仲間として迎え入れ、彼女を含め話を進めていた。

「その事は俺達も調べを進める中で知ることが出来たが……「武闘派グノーシス主義」という勘違いはしたままだった」

「えっ？ でもさ、実際にその通りなんじゃないの？ エミりんもそう言ってるしさ」
角川が月原に顔を向けながら異論を唱える。月原は呼ばれ慣れない「エミりん」という名称に多少戸惑いながら、しかし角川の言葉に頷いた。

「いや……確かに月原さんや他の信徒も自分達はグノーシス主義の教団だと思っているだろう。しかし肝心の、彼らを導いている木宮の本心は全く違っていたはずだ」

天道寺の推理に興味半分疑問半分で、月原は耳を傾ける。自分達が教えられていた教義が偽りだと言われれば……熱心な信者なら怒鳴り散らすところだろう。しかし月原は元々信仰心が薄く、しかも今は木宮への信頼を完全に失っている。自分がどのように騙されていたというのか……彼女の怒りはむしろ、木宮に向けられている。

「今日藤美を連れて木宮が通っていた高校を訪れ、卒業文集を読んできた。その文集で奴はクトゥルフ神話について熱狂的なほど熱く語っていた」

ここで天道寺はクトゥルフ神話を知らない月原に簡単な説明をし、それから話を戻し推理を続けた。

「文集は狂気じみた、誰もが気味悪がりそうなものだったんだが……問題は、狂気じみている割に藤美が読んでも理解できるほど判りやすい文だったところにある」

「あ、今なんかバカにされた気分？ (-#)」

角川の抗議は完全にスルーして、天道寺は続けた。

「つまり、書いている本人はキチンとした理性を持って卒業文集を書いていたということになる。まあこれは、原作者のH・P・ラヴクラフトや他のクトゥルフ作家だつてやっていることだ。特別なことじゃない」

一度言葉を切り様子を見る天道寺。回りくどい言い方になってしまっているが、皆ついでにきているようだ。角川を除いて。

「そんな文をわざわざ文集に何故書いたのか……これは単純に、書きたかったからだろう。思春期の青年が当時熱中していることを、十年後の自分が読み返して恥ずかしくなるとかそんな事も考えずに書き散らすのは、まあよくあることだよな」

そして思い当たることがある天道寺は、思わず苦笑いを浮かべてしまう。

「それだけ、当時の木宮青年はクトゥルフ神話に熱狂的だった……今で言うクトゥルフオタク、オカルトオタクつてところか。で、肝心なのはここからなんだが……」

ようやく本題にはいる。天道寺は腕を組み直し、切り出した。

「そこまでクトゥルフが好きだった木宮青年が、何故大学に進学してから宗教学の道へ進んだのか。ここなんだよ。もつと言えば、彼は少なくとも高校を卒業するまでは全くキリスト教に関わりなんか持っていない。信仰していたのはむしろクトゥルフ神話に登場する邪神達だからな」

突然の問いかけに、天道寺以外皆が眉間にしわを寄せる。

天道寺が言うように、彼や角川の調べで木宮が大学に入学するまではキリスト教に関わりがなかったことは判っている。そして大学は宗教学を専攻し、途中教員免許なども取りながらそのまま教授になったことも調べが付いていた。つまり、高校卒業までと大学入学からとでは、木宮の傾向がガラリと変わっている……ように見えている。ここまです天道寺が復習するかのよう一度話してから、また推理の続きへと戻った。

「人間、そう根本が変わるもんじゃない。それに大学受験は高校生の時、つまりクトゥルフやオカルトに熱狂的だった頃に受けている。奴は意図して宗教学の道を選んでいるはずなんだ。そして奴は教授になってからもクトゥルフやオカルトに興味を示していた……と言うより、元から彼の根本にはオカルト方面への熱意がずっと続いていたんだよ」

「でも……それなら宗教学というのはおかしな話ではなくて？ どちらかといえば、民俗学など、もつと幅の広いオカルト向けの学問を専攻すると思うのですが……」

アイリンの指摘に、天道寺は「そこなんだよ」と指をさしながら言葉を続ける。

「卒業文集の話に戻るが……狂気的な内容に紛れて、こんな事が書かれていた」

「一人の作家が生み出した物語が、後に神話へと昇華していった。なら初めから神話を創造していけば、本物の神が生まれるのではないだろうか……だな。こんな内容だ」

内容は……端的に言えば馬鹿げている。しかし現実として、馬鹿げた文を書いた男は後に異端教団の教祖になっている。見逃せない一文だろう。

「神話を創造する……奴の言う神話は、紙面上の絵空事では物足りなかつただろう。だから民俗学を学んで小説家になる道ではなく、宗教学の道へ進んで宗教の成り立ちを学び、自ら教団を立ち上げたかつた……全て推測の域を出ない話だが、こう考えると色んな事をつじつまが合うんだ」

その色んな事とつじつまを、一つ一つあげていく天道寺。

まず教授時代にオカルト方面に興味を示していたこと。これは彼の情熱がそもそもそこから方面だったのだから当然だろう。彼の熱狂的なオカルト信仰は、教授という隠れ蓑の中で着実に燃焼し続けていたのだ。

またオカルトの中でも「人知を越えた力」に興味を示していたのも、神話を生み出すために必要だと思っていたからだろうと推測できる。それが現実にあるのかどうかというよりは、現実にするために必要だと……実際彼は、催眠術を学び活用している。

「そして何故グノーシス主義なのか……これは自分が学んできたキリスト教と関連があり、そしてクトウルフの元ネタにも使われていることから選んだのだろう。つまり初めから、木宮にとってはクトウルフ……というか、奴の狂氣的な興味が根本だったんだよ。俺達の勘違いは、グノーシスありきで考えていたことだ」

グノーシス 知識を追い求めるはずの教団が、何故武装しているのか。これも教祖が元から知識ではなく狂気を求めていたからだろうと、天道寺は付け加える。

「でもさ……そんなに違いがあるの？ よくわかんないんだけど」

角川の疑問は、少なからず他の者達も持っているようだ。皆が説明を求めている。

「根本が違えば行動そのものが違ってくる。もし本当に知識を求めただけなら、武闘派なんか野蛮なものを結成したりはしないさ。実際俺達はそこで引っかけたわけだし。そして狂気が根本なら、行動が大胆で物騒になってくるもんだ」

「例えば……人殺しとか、ですか？」

天道寺もあえて口にしなかった言い辛い例えを、月原本人が不意につぶやくよう口にする。彼女のつぶやきに、天道寺は黙って頷いた。

月原の言う人殺しとは、当然彼女の両親のこと。木宮の性根に狂気があるからこそ、手段に殺人を平気で選ぶのだと天道寺は伝えている。もし彼が本当に知性を求めていたなら、学園を乗っ取るのに殺人などという凶行は犯さず、もっと外堀から……法律や流言などをを用いるような、卑劣だが合法的な手段を選ぶだろう。

月原は肩を抱き震えだした。自分で口にした言葉だが、自分で口にしたからこそ、木宮のしてきたこと、その狂気に気づき、恐怖と激怒で震えが止まらなかった。

「……まだいくつかが気がかりな点はある」月原を気遣いながらも、しかし天道寺の唇は彼女のために動き続ける。「月原さんのご両親とどんな関係だったのか、そして木宮が学園長になった直接の要因だった、前学園長の遺言というのがどのよう……」

突然、電話の音が鳴った。非常にシンプルな電子音。それは月原の持つ携帯電話にメールの着信があったことを告げるものだった。月原は慌てて携帯を制服のポケットから取り出し、メールを確認する。

「……木宮司祭からです」
場に緊張が走る。

メールの内容はおおかた予測できるが……はたして全くその通りの文面が届けられていた。

「大上神父を助けたければ、一人で学園の教会まで来い……との事です」

沈黙が場を支配する。天道寺の推理が正しいかどうかはもはや関係がない。大上が捉えられ、それを餌に月原を呼び出している状況で、相手の思想がどのようなものだったかな

ど何の役に立つとこののか。

「私、行ってきます」

考えるまでもなく、もうそれしかない。月原は立ち上がり、急いで向かおうと身を翻ひるがえそうとする。

「待ちなさい」慌てる月原を、天道寺が慌てて止める。「あなたが身一つで向かってても、ケンを助けることは出来ませんよ。幸い時間の指定はありませんから、もう少し準備くらはしてから向かいましょう」

天道寺は月原を落ち着かせながらメイドメイドに軽く指示を出し、なにやら準備をさせている。時間の指定がないとはいえ、ゆっくりしているられる状況ではないだろう。そう思うと居ても立ってもいられない月原だったが、天道寺の言うことはもっとも。そわそわしながらも、月原は黙って天道寺達の準備を待った。

「まずこれは、妖精フェアリーダストの粉が入った袋です。本当は色々用途があるんですが、これはこのまま相手の顔にぶつけて目つぶしに使ってください。うまくいけば相手の戦意をも喪失させられるかもしれません」

学園から逃げ出すときに使ったのと同じ物を、天道寺は三つほど手渡す。

「それと……これは刃を落とした槍ですから、多少傷を負わせてしまおうでしょうけど致命傷を与えるようなことはないはずですよ」

魔物相手になら殺傷力のある槍も振り回せるだろうが、人間が相手ではそうも行かない。もつとも今の月原なら魔物相手でも躊躇ちゅうちゅうするだろうが……いずれにせよ、なにも武器を持たないのはあまりにも無謀。月原はありがたく受け取った。

「最後にこれは、新しい尼僧服です。ケンの着ていたトレンチコートと同じアルケニーの糸で作られた服ですから、もしあなたが発火能力バイロキネシスを発動させてしまったとしても、とりあえず服が燃えてなくなる事はないはずですよ」

大上の話を聞いてから、いつか必要になるかと考えたアルケニーが事前に準備していた服だった。その尼僧服は炎をまとうシスターをイメージしてか、真っ赤に染められていた。

「それに着替えたら外に出てください。車を回しておきます」
「えっ、でも……メールには一人で来いと……」

メールの指示が気になっていた月原は、同行すると申し出ている天道寺に異論を唱えてしまう。

「ここから学園までの道は判らないでしょう？ それに教会まで……ですから。俺達は教会の外で待機しますよ。具体的な作戦は、道中で立てましょうか」

天道寺はそう言いながら月原の肩を軽く叩き、リビングを後にする。

「心配いりませんよ。私達もケンも、このような自体には慣れていきますから。まずはあなたが気をしっかり持つことが大事です。さあ、早く着替えてしまいましょう」

主のフォローをするように、メイドメイドが声を掛ける。

彼女が言うように、出ていった天道寺も捕らわれている大上も、幾つもの修羅場はくぐり抜けていた。それらに比べれば、今回の件はむしろ楽イージーな事件と言える。とはいえ、カウンターハンターの仕事を知らなかった月原にしてみればそんな事を知るはずもなく、また月原自身には当てはまらない事。彼女にしてみれば、今は一大事だ。そう簡単に落ち着けられるはずもなかった。

「ケンなら大丈夫。今は、あまり多くの人に狼の姿を見せられないので大人しくしているだけで、本来なら一人で簡単に脱出できたはずです」

そしておそらくは、他に何か考えがあつて捕らわれたままになっているのだろうと、アイリンは付け加える。ただ月原を巻き込むのは得策とは言い難いが……その事については黙っていた。

「でも……今日はもう満月ではありませんし……」

狼の姿になった大上がいかに優れているか。それは直接戦った月原にも判つてはいた。しかし満月の夜は昨日で、今日の月は若干欠けている。それを月原は危惧していた。

「え？ ……ああ、大丈夫ですよ」アイリンは脱いだ制服を受け取りながらくすりと笑いだし、そして彼女の不安を取り除こうと語りかける。「なにも満月の夜にだけ変身するわけではないのですよ、^{ウェア・ウルフ}狼男は。というより、本来の姿が狼で、人の姿の方が変身した姿なんです」

狼男の伝承は様々だが、満月の夜に変身するとか、噛まれた者も狼男になるとか、そのような言い伝えは全て誤りなのだと、アイリンは説明する。

「なんの不安も心配ありませんよ。あなたは、ただ真実を確かめに行くだけです。もしかしたら……戦う相手は学園長ではなく、あなた自身かもしれません……」

推理しきれなかった事実。それは月原にとって、とても辛いものばかりだろう。大上の救出や木宮の打倒よりも、それはとても難しくデリケートな問題。それをすっかり乗り越えられるかどうか……月原にとって本当の勝負は、そこにあるだろう。

「がんばりなさい。あなたに、ブリージッド様のご加護がありますように」

着替え終えた月原は深くアイリンに一礼すると、玄関へと駆けだしていった。デザインは色を除いてほぼ変わらないのに、これまで着ていた尼僧服とは違いどこか暖かみがある。何故か月原はそう思える。

来客の外出を見送るメイドは、ただ再び訪問してくれることを願うばかりであった。

月原と天道寺、そして角川は、天道寺が運転する車の中にいた。

いや厳密に言えば、運転しているのは車本人^{クルマ}なのだ。

「クリステイン^{クリスティーナ}っていうの。アメリカ産だけど九十九神^{つくもがみ}の一種なんだって^(^_^)」

紹介を受けた真つ赤なアメ車は、挨拶代わりなのか自らクラクションを鳴らした。

「あつ……お世話になります」

どこに向けてれば良いのか判らないが、月原はとりあえず頭を下げた。端から見ると滑稽^{こっけい}だが、月原は至つて真面目だ。

そもそも月原は、^{ウェア・ウルフ}狼男こそ親の敵^{かたき}だとその存在を信じてはいたが、むしろ信じていたのは^{ウェア・ウルフ}狼男の存在だけで、他の魔物^{まぶつ}については無関心……というより、存在するとも考えていなかった。そんな状況で九十九神^{つくもがみ}などと紹介されても、自分の中でどう消化して良いのか戸惑ってしまう。先ほど角川に文車^{ぶんぐるま}妖妃^{まよひ}だ電脳^{でんぶ}霊^{れい}だと自己紹介されたが、人間ではないと説明されてもどう解釈して良いのか……月原が思考出来る容量を既に超えてしまい、混乱を通り越し、もはや言われたままを素直に受け入れるしかできなかった。そんな月原が動揺もせず普段通りのポーカーフェイスを通してのを見て、角川は「やはり

お嬢様学園の優等生は理解力が違う」と感心していたが、それはまあ、そう思わせておくのが良さそうだ。

「さて、今後の作戦だけど」天道寺はハンドルに手を添えながら、助手席の月原に話しかける。「正直、特になんなんだよね」

苦笑いする天道寺に、月原が僅かに目を見開いて天道寺を見る。無表情な彼女なりに驚いたという精一杯の顔だ。

出かける間際、天道寺は「具体的な作戦を」と言っていたにもかかわらず、無いと言われれば面喰らうのも仕方ない。

「特にないつていうか、立てる必要があまりないというか……奴はおそらく、教会の中で他の信者を引き連れて待ちかまえていると思う。当然、縄かなんかでふんじばったケンと一緒にね」

わざわざ場所を指定して呼び出した以上、それは間違いないだろう。月原もうなずき同意した。

「さつきも言いましたが、ワイヤーなんかで縛られていたら別ですけど、普通の縄ならケンが狼に戻れば問題ないはずです。あいつはあいつなりに、考えがあつてあえて捕らわれただんだと思いますよ」

それともう一つ理由があるとすれば、そう安易に変身して人前に狼の姿をさすわけにはいかないという事情もある。ハンターをおびき寄せるためにあえて姿をさらすようなことはするが、それは狼の姿だけであり、人から狼へ変わる姿を見られるのは、後々人の姿で活動するときによっかいなことになりかねない。特撮番組の変身ヒーローが正体を明かさないと理由はよく似ている。まあ大上に言わせれば、「隠した方がハードボイルドっぽい」ということにもなるのだろうが。

「おそらく流れとしては……あなたの身柄とケンの身柄を交換するように話を持ちかけてくるでしょう。しかし当然、ケンをそのまま解放するつもりはないはずですよ。ですからこちらの方が圧倒的に不利……ですが、おそらく奴らはあなたを傷つけるつもりもないでしょう。ですから、交渉は必ず強気で行ってください。それとお渡しした妖精の粉の袋は常に投げられるようにしてください。それと……」

ここが一番肝心と、念を押して天道寺が説明する。

「ケンが猿ぐつわか何かされて話せないような状況だった場合は、必ずあいつを話せるような状況にしてやってください。おそらくそれが出来れば、その後は問題ないでしょう」
そこで何故か苦笑いを浮かべる天道寺を、月原は怪訝に感じたが、特に聞き返すことはなかった。

真つ赤な車が減速し始める。決戦の場、慣れ親しんだ学園の教会まであと僅かと迫っていた。

扉を開けると、正面には大きな十字架が掲げられている。しかし今はその十字架に、二匹の蛇が交差し円と十字を象ったグノーシス十字が祀られている。

ここは夜になると、武闘派グノーシス主義……に見せかけた、教祖木宮の歪んだ願望によって結成された異端教団の集会場になる。月原はここで昼も夜も、信仰無き祈りを捧げ

ていた。

「お待ちしてりましたよ、シスター月原」

威厳をまとい柔和な仮面を貼り付けた、恰幅の良い男が一人。両手を広げ非力な美少女を歓迎している。

不気味だった。今までならその姿に信頼と安らぎすら感じていたはずが、その内に狂気を宿していると知ったとたん、同じ容姿なのにもかかわらず一目見ただけで背中に悪寒が走ってしまう。

「……大上神父はどこですか」

視界の範囲に大上の姿は確認ではない。今礼拝堂にいるのは月原と木宮、そして彼の周囲にいる信徒が四人。月原が知る限り、その四人は木宮がもつとも信頼している人物達。ある意味側近と呼んでも良い者達だ。おそらくこの四人は、木宮の内に秘めた狂気についても知っているのだろう。そうでなければ、この後展開が予測される、他の信徒達には聞かれて困る展開を目撃させられないはずだ。

「シスター月原、あなたは誤解しています」

月原の質問には答えず、木宮は言い訳を始めた。

「彼はあなたを墮落させる悪魔であると同時に、あなたのご両親の敵である……」

「大上神父はどこですか」

聞く耳は持たない。月原は再度、木宮に問いかけた。

「……シスター月原。何故そこまであの男にこだわるのですか？」

それでも木宮は答えず、代わりに質問を返してきた。

「あの男に何を吹き込まれたのかは判りませんが、真実は一つなのです。そして真実は常に知識を求める我らに神が示してくださいさるもの。あの男の戯れ言に欠片ほども知識は宿ってはいないのですよ？」

「クトウルフだかなんだか、そういうものに夢中なあなたより、とても信頼できる方だと思えます」

木宮の眉が動き、柔和という仮面に若干亀裂が生じる。彼の眉を動かしたものは、月原がクトウルフの名を口にしたことか、それとも木宮を「あなた」呼ばわりしたことか……おそらく双方だろう。加えて言うなら、月原が一夜にして急速に自分への信頼を無くしている事への動揺もあるのだろう。

木宮は近くの信徒に合図を送る。受け取った信徒は一度礼拝堂の後ろへと姿を消し、そして別の信徒と共に姿を現した。縄で腕を縛られ布で口を塞がれている大上を引っ張りながら。

「大上神父！」

月原の呼びかけに、大上は片目をつぶり答える。が、余裕あるその行為に反し彼の姿はとても痛々しい。顔が明らかに暴行を受け腫れ上がっているのが遠目からも判るほどに。

「シスター月原。彼を助けたいというならば……汚れてしまったあなたの心を清めるために、洗礼の儀式に参加してもらいますよ。むろん構いませんね？」

もし大上や天道寺の言葉を信じるなら……この洗礼は、「礼」の字が「脳」に変わっているものだろう。

これまでも遠回しな催眠による洗脳を続けてきた木宮が、月原の様子を見てその洗脳が

溶けてしまったのを察したのだろう。ここへ来て直接的な洗脳をしようと画策しているらしい。

「大上神父と話をさせてください」

木宮の交渉には応じず、月原は一方的な注文を付ける。しかし木宮は、これを交渉の一段階だと受け取り、素直に彼女の願いを聞き入れた。

「ふう………つたく、息苦しいつたら無いな」

猿ぐつわを解かれた大上が、大きく息を吐き出しながら愚痴をこぼす。見た目よりも元氣そうな大上に、月原はひとまず安堵した。

「それにしても洗礼ねえ………洗脳の間違いだろ？」

直球過ぎる言葉に激怒したのか、大上の腕を掴んでいた信徒が顔を殴った。月原の短い悲鳴と木宮のなだめる声で信徒は落ち着いたが、このやりとりの間も他の信徒に何の動揺も見られない。やはり殴った者も含め、ここにいる信徒は木宮の根底にある汚れた信仰を知ったうえで帰依^{きえ}している、木宮にとって真の同胞と言うべき者達で間違いない。

良く見渡せば、信徒の中には大上が見知った顔もいる。学園内で、特に神学科の職員室で見かけた顔だ。職員にも信徒がいたことに不思議はないが、衝撃的な事実ではある。

思えば、大上の動向を監視していたのもその神学科の先生だったのだろう。月原が大上を訪ねて職員室に来たところを目撃している事を考えれば、あの時から既に目を付けられていた事になる。そう考えると、大上の潜入調査は失敗こそしていないものの成功していたとは言いがたい。

「口を慎んだ方がよろしいですよ、大上神父。正しいことではありませんが、冒瀆暴言に敵しい者もいますからね。私としては何事も暴力で片付けるのは好みませんが」

よく言う。武闘派を結成している張本人の言葉ではないだろうと大上は苦笑した。月原にしても、これまでに深く疑わなかった木宮の言葉にあからさまな嫌悪を感じてしまう。

「冒瀆？ 暴言？ 凶星の間違いだろ？ いきなり殴るってことは、大当たりだったってことだよなあ？」

それでも慎むどころか加速する大上の口。またしても脇にいる信徒が拳を振り上げたが、今度は振り下ろされる前に木宮が手振りで止めさせた。

「人は見かけによらぬとは言いますが………あなたがこれほど下品な方だとは思いませんでしたよ」

「お互い様だろ？ 俺もあんたがオカルトマニアだとは思わなかったねえ」

腫れた口元をつり上げながら、軽口を叩く余裕を見せる大上。対して木宮は張り付いた笑顔を崩さないようにするのに精一杯。立場は明らかに大上が不利なのだが、状況は大上優位に傾きつつある。

「さあシスター月原。この男をどうしても助けたいならこちらへ………」

「来るんじゃないぞ！ 月原さん」

状況の優位を取り戻そうと強引に話を進めようとする木宮を、大上が止める。月原は一瞬歩を進めようとしたが、大上の言葉でその足を止めた。

「学園長………いや、殺人犯。月原さんの両親を殺^やったのはお前だな？」

突然の追求に、木宮は動揺するどころかむしる落ち着きを取り戻したかのように堂々と反論を始める。

「何を言い出すかと思えば……どこにそのような証拠が？ 根拠も無しにいい加減なことを口にするものではありませんよ。それとも、私がおのうなくだらない誘導に引っかかるでも思いましたか？」

スラスラと話し出す木宮を見て、大上は確信した。間違いないと。彼が落ち着きを取り戻したのは、言われるだろうと予測し事前に台詞を用意していたからこそだと大上は睨んだ。ならば準備した台本がどこまで優れているのか見届けてやろう……大上は唇を舐め、言葉責めという猛攻の準備を整える。

「月原さんのお父さん、つまりここ聖パトリック女学園の前学園長が、死後あなたに次期学園長の座をゆだねるよう遺言書を残していたらしいが……本当にそんな物が実在したのか？」

「当然です。キッチンと弁護士に預けられていた遺言書が残っていました。私はそれに従い、彼の意志をくみ学園長を務めることになったのです」

「彼は当時まだ若かった。そんな彼が、何故遺言書なんて残そうとしたんだ？ ちよつと不自然すぎやしないか？」

「当時彼は、自分が魔物に狙われているのを察していました。その為、万が一の事態に備えていたのでしょう」

「ほほう……だつたら当然、遺言には学園以外のことも書かれていたんだよな？ どんな事が書かれていたんだ？ まさか自分の一人娘のことを一筆も認めてないってこともねーだろ？」

「彼のプライバシーに関わる問題です。私は学園のこと以外聞かされておりません」

「なるほどね……月原さん、キミはご両親の遺言について何か聞いているかい……そう、聞いてないんだね。おかしいな、いくら何でも娘の彼女が遺言の話は一切知らないというのは不自然だろ」

「そこまで疑うのなら、担当の弁護士や学園の理事長に確認をとつたらいかがか？」

「理事長にはある人を經由して確認をとつてもらったよ。遺言書があつたこと自体は確かだつてね。だがその一方で、月原さんに関する遺言がなかったことも確認している。これは月原さんの保護者である修道院長、シスター春川の証言だから間違いない。なあ、おかしいとは思わないか？ 学園のことは書き残して、娘のことはほつたらかして……どこ考えても、その遺言書自体が怪しいよな？」

「でしたら、執筆鑑定でもなんでも気が済むまでしたらよろしいかと。いいかげん根拠のない妄言を続けるのはおよしなさい。見苦しいですよ？」

「見苦しいのはどつちだろうね。あなたがそこまで自信があるのは……無理矢理書かせたからだろ？」

「馬鹿な。まだ根拠のない戯れ言を続ける気ですか？」

「あなたは月原さんが直接ご両親が殺される現場を見たから「催眠療法」で思い出したつて言つたらしいな。なあ、彼女が現場で目撃していたなら、何故火事に巻き込まれず、現場近くで発見されたんだ？」

「……私が現場から連れて逃げたんですよ。その後犯人である狼男を追うために、仕方なくシスター月原を置いて奴を……」

「おいおい、ずいぶんな仕打ちだな。いくら何でもその場に幼子を置いていくのかアンタ

は。それに現場にいたって？ だったら月原さんに催眠療法なんかするまでもなく、私は見たって何故言わなかった」

「それは……」

言葉に詰まりだした。ずいぶんと台本を用意していたようだが、ほころびが見え始めている。どんな役者でも、台本通りに読むだけなら緊張などしない。しかし実際には観客の目にさらされ緊張するからこそNGも出るというもの。用意した台詞を吐き続けながらも、木宮は追い詰められ焦り始めていた。

さて、仕上げだ。ここぞとばかりに、大上は口元をつり上げまくし立てる。

「殺したのはアンタだ、木宮大介。月原さんを入質に両親を脅し、遺言書を書かせたんだろ。その後殺害して……」

「何をしているのです！ すぐにシスター月原を捉えるのです！」

強硬手段というアドリブに出た木宮。突然の号令に戸惑った信徒達だったが、すぐに動き出した。槍を構える月原に、三人の信徒が襲いかかる。

ここまでか。もう少し引き出せるかと期待していた大上だったが、これで充分だろう。確かに木宮が言うように、これといった確証があったものは少ない。が、少ない証拠と推理と、そして舌先で相手を追い詰められたなら、もうこの暴挙が証拠になる。カウンターハンターとしてはこれで本気を出せる大義名分は整った。

大上は自分の腕を掴み逃げないように見張っていた二人の信徒を振り払い、縛られたまま距離を取る。

「ぐおおおおおおおおおお！」

まさに獣の咆哮。突然張り上げられた声に驚き、場の全員が大上を凝視し、驚愕する。

顔が口元からまつすぐに伸び始め、全身が次第に毛で覆われていく。耳が尖り、牙が伸び、気付けば縛っていた縄はちぎれ落ちていく。自由になった腕は大きく開かれ、指先からは天に向け鋭い爪が伸びている。

気付けば、神父服を着た ウエア・ウルフ 狼男 がそこにいた。

「ばつ、馬鹿な……」

啞然とした。ここはハリウッドの撮影現場でもゲームソフトの開発室でもない。人が狼の姿へと変貌していくのを間近で見ながら、邪神の崇拜者達は驚異と恐怖に固まった。

「おいおい、俺のことを おおかみおとし 狼男 だとか言わなかったか？ 良かったな、大正解だぜ」

ニヤリと口元をつり上げる ウエア・ウルフ 狼男。対して他の男どもは顔を引きつらせていた。唯一表情を変えないのは月原のみ。

木宮が大上のことを おおかみおとし 狼男 だと言い出したときは、大上も月原も内心焦っていたが、何のことはない。ただ大上に対する月原の信頼を崩したかった、口先だけの出任せ。それがまさか本当だなどと思いつかなかった木宮は狼狽するしかなかった。

「うつ…… ああ、うああああ！」

信徒が二人、月原を無視し外へと逃げようとした。しかしそれを月原が妨害する。このまま外へ逃がすのは得策ではないと判断した彼女は、信徒二人にそれぞれ預かっていた妖精の粉入り袋を投げつける。パチパチと細かな閃光ばかりが目飛び込み、意識朦朧となる信徒達。月原は槍の柄で脇腹を強く突き、その意識を完全に奪った。

残った信徒は恐怖に顔を強張らせながらも、果敢に、しかし無謀に、ウエア・ウルフ 狼男 へ向かつ

ていった。

これが常人の反応だろう。向かってくる信徒達を見て大上は再認識する。そう考えると、たった一人で ウエア・ウルフ 狼男 に立ち向かった月原は、敵を討つためとはいえ勇敢だったのだなと感心する。

「来な。十秒で片付けてやる」

人差し指をチヨイチヨイと動かし挑発する大上。手に剣や槍を持った男達が、一斉に襲いかかる。

コンベーションなどまったくなく、ただ闇雲に襲いかかる男達は、武器を手にしているとはいえ有象無象。大上の敵ではない。

軽いフットワークで振り下ろされる剣を交わし、突き出される槍を左手で掴み、男の脇腹に強烈なフック。別の男にはミドルキック。残った男には顎を砕く空中廻し蹴り。

「ちっ、二秒多かつたか」

床に崩れうめく男達を見下ろしながら、大上が愚痴る。漫画のように一撃で気絶はさせられないものの、戦意は充分に削げただろう。動けなくなっただけで充分だ。

「ハードボイルドなクライマックスとしちゃあ、ちょっと物足りないけどな……ま、現実つてのはこんなもんだろ」

ゆつくりと、非現実的なバケモノが木宮へ歩み寄る。

「ひっ、ひい……」

悲鳴になりきらない声を上げ、木宮は後ずさりする。さしものオカルトマニアも、実在した ウエア・ウルフ 狼男 を目の当たりにし腰が引けている。それはこの魔物の存在に戦っていると言うよりは、身の危険、命の危険を感じていることだろう。

「ひいい！」

そして振り返り、教会の奥へと逃げだそうとする木宮。

「おっと、さすがにアンタを逃がすつもりはないぜ」

瞬く間に回り込んだ大上が、木宮を指さしながら不敵に笑う。

瞬時にまた振り返り、今度は入り口へ逃げようとする木宮。しかし今度は近づいていた月原がふさがる。

「違う、違うんだ……私は、私は……」

狂気を夢見た男が、その狂気に怯えていた。もっとも大上にとって自分がその狂気の対象となるのは本意だろうが。

「私が悪いんじゃない……君は、女神になるべき人なんだ……」

「女神？」

突然木宮が口走った単語に、大上も月原も思わずその単語を口にした。

「そう、そうだ。君は女神になれるんだ……」

必死に語り出す木宮に、もはや威厳さも温厚さも、一切感じることはなかった。むしろうちに秘めていた狂気が、徐々に漏れ出してきた……そんな風にも見受けられる。あるいは、さらさられた危険に対する恐怖をごまかすために口を動かしているようにも。

「きつ、君は知っているのかね？ 君に特別な力が宿っていることを」

表情を滅多に変えない月原が、目を見開いて驚いた。それは大上も同じ事。何故木宮が知っている？ それとも、これも大上を オホカミオトシ 狼男 だと言い出した当てずっぽうな発言と同

じなのか？

「君のご両親も知らなかった力だ……そう、あれはそう、あは、はははははは！　そうだ、あれこそ、アイオン神の、いや邪神か、それとも炎の邪神か……そうだ、炎の邪神のお導きのだ……はは、あははははははは！」

クトウルフの邪神名を口にし、偽りのグノーシス信仰よりも本質だったクトウルフ神話への信奉が際だち始めていく。

恐怖をごまかすために狂気へと走る……その様子はまるで、ラプクラフトが書き残した怪奇幻想小説そのもの。

「そうだ、彼は愚かだった。この私が、学園をより有効に活用してやると提案してやったのに断った。愚かだ。だから私は、君を誘拐し脅して言ってやったんだ、遺書を書けと。そうしたら、やっと素直になったよ……だから私は、私は……違う、私が悪いんじゃない……娘を返せなどと聞き分けのないことを言うから……そうだ、あいつが悪いんだ……」

ハッキリと明言しないが、もう何を言い出しているか見当は付いた。

こいつだ。やはり犯人はこいつだった。

唯一表情に出せる感情……月原は怒りの形相で木宮を睨みつけている。

「そうしたら、おおそうだ、その時に炎の邪神が君に力を与えられた……泣き叫びながら、あるゆる物を燃やしていったよ君は……ああ、素晴らしい、素晴らしい光景だった……」

月原の発火能力は、既に身につけていたというのか。そして火事の原因が月原の不安通リ彼女によるものだった……しかしこれで、彼女の能力が両親を殺めた原因ではない事がハッキリした。それは彼女にも大上にも良い知らせではある。良い知らせではあるが、それを公言した男への怒りが緩和するものではなかった。むしろ炎のように熱く滾っていくのを二人とも感じていた。

「だからこそ、君は女神になる、なれる……なるべきなのだ。そして私達を導いておくれ……神を、私は神を生み出すんだ……」

よろよろと月原へ歩み寄る木宮。もはや彼には、彼を狂気へと誘ってしまった狼男の事など眼中にない。

「許さない……」

つぶやく月原。木宮の狂言など彼女にはどうでも良かった。重要なのは、本当の敵が誰なのかという事実。そして今、ようやくと念願の敵討ちが果たせるという現実。

「よせ！」

大上が制止する。しかし激怒している月原にその声は届かない。

ごう、という音と共に、真っ赤な尼僧服がより赤々と……月原の全身を炎が包みだした。押さえることの出来なかった、出来るはずもなかった怒りが、彼女の発火能力を発動させてしまった。

「おお、おおおお……素晴らしい、なんと素晴らしいことか……」

火柱と化した聖女を、神々しく見つめる木宮。

敵を討つ。月原は手にした槍を構え、木宮の胸めがけ突き出した。

「がっ……」

槍先は木宮の左胸を見事に突いた。しかし元々刃を落としていた槍であり、そして燃える手で槍を握っていたためか、槍は木宮を貫くことなくアツサリと折れてしまい、ただ木

宮に無様なうめき声を上げさせるに止まった。

それでいい……大上は胸をなで下ろした。いくら敵討ちとはいえ、人を故意に殺してはいけない。罰する必要があるが、なにも木宮と同じ殺人犯にまで身を落とす必要など無いのだから。

そして月原は、ありつたけの想いを込めた一突きが見事に当たり、しかし見事なまでに効果を出さなかった事へ、複雑な想いが去来した。一突きで気が晴れたと言いが、人を殺める事への躊躇いが戻り、仮に槍がもう一本あったとしても再び突き刺そうという気にはなれなかった。

しかし神は……何処のどの神かは定かではないが……木宮を許さない。

「女神よ……おお、私の女神よ……」

胸への衝撃で正気に戻ることもなく、木宮の狂気と暴走は止まらない。

よろよろと月原に近づき、木宮は炎の中へとを伸ばし、月原の腕をガツシリと掴んだ。突然の暴拳に月原は一瞬戸惑ったが、すぐに木宮を振り払おうと試みる。慌てる心が、炎を沈めるどころかより強く燃焼させてしまう。月原の力が弱いのか、たがの外れた木宮の力が強いのか、なかなか振り払えない。大上が後ろから木宮を引きはがしたときには、もう木宮の腕は真つ赤に燃えていた。

「これだ、これが女神の……ああ、熱い、熱い……はは、あは、ははははははは！」

燃える両腕を高々と掲げ、木宮は笑う。張り叫ぶように笑う。

まるで……いや、そうとしか思えない。炎が意志を持っているかのように、腕から肩、そして全身へと、一気に燃え広がっていく。

急ぎ大上が消化器を手にして戻ってきたときには、木宮は……木宮だけが、真つ黒に燃え尽きていた。

事件の噂は瞬く間に学園内外を問わず広がった。

学園長の失踪。そして数名の先生が精神病院へ入院。広まった事実はこれだけで、その真相が伝えられることはなかった。むろん噂に尾びれが付きミステリアスに語られてはいったが。

しかしそれでも、新聞沙汰になることはなかった。一部のオカルト雑誌に記事が載ったものの、それを真剣に受け止めるものは雑誌の愛読者くらいでしかない。

「理事長には毎度恐れ入るよ……よくマスコミに流れなかったな」

大上がこぼした一言に、天道寺が苦笑しながら答える。

「手腕家だからな……としか言いようがないけどね」

全ては有栖学園の理事長……カウンターハンターと妖精学者の支援者が手配してのことだった。学園長失踪から数日、大上は後処理を全て天道寺と理事長に任せたままだったが、そのほとんどを片付けていた。

武闘派グノーシス主義を信仰していた人々は、その信仰度合いによって適切な処理……カウンセリングなどを受け、平常へと戻りつつある。大上の正体を見てしまった五人の信徒にも処置は施され、彼らが見た狼男は夢だったのだと思いきませているのだとか。

ある種の洗脳に近いが、木宮のような悪質な物ではないのだから、そこは大目に見るべきだろう。

そして月原は……今、ブリージッド女子修道院で洗礼を受けている。彼女はこれまでの行いを恥じ、そして先祖が信じた女神を信仰することで本当の自分を取り戻すのだと、月原に付き添い心神のケアを行う四方が言っていた。同時に身につけてしまった発火能力をコントロールする修行も修道院で兼ねるらしい。

発火能力は木宮が求めた炎の邪神の力ではない。女神ブリージッドが彼女に与えた聖なる炎なのだと、誰もが信じている。

「それにしてもさ……未だに良く判らねえんだが」大上はソファーもたれかかっていた身を起こし、天道寺に尋ねる。「なんで月原さんの夢に、狼男が出てきたんだ？」

今回の事件は、狼男を敵だと信じ込んだ原因は、彼女が木宮によって見せられた夢に登場したから。狼男を敵だと信じ込んだ原因は、彼女が木宮によって見せられた夢に登場したから。

しかし夢は真相の半分しか見せることはなく、狼男にいたっては完全に無関係。にも関わらず月原の夢に狼男が現れた理由が、大上には理解できなかった。

「これは……夢を見せた張本人が死んだ今となっては確認のしようもないが……」

天道寺は前置きをした上で、彼なりの推理を語り出す。

「まず月原さんに夢を見せたのは、もしかしたら洗脳するためではなく、発火能力を目覚めさせるためだったんじゃないかと思うんだ」

その根拠として、天道寺は木宮が月原に嗅がせたお香をあげた。天道寺がその成分を調べたところ、幻覚作用のある成分が多分に含まれていたらしい。天道寺が言うには、これは洗脳催眠よりむしろ逆行催眠……過去を思い出す催眠術に用いるものらしい。むろんこんな用途は正しい催眠のやり方ではなく、オカルトを信じていた木宮だからこそ用いた手なのだから。

「ところが力を目覚めさせることはなく、代わりに狼男がいたと口にした。そこで木宮はそれを逆手に取り、月原さんを洗脳する口実に使った。その為に、自分の教団を武闘

派に仕立て上げたんだろう」

側近という立場だった五人の信徒から聞き出した話によると、木宮が教団を武闘派へと移り換えていったのは月原の入団かららしい。木宮にとってまず一番大事だったのは月原を自分達の女神に仕立て上げること。だからこそ、月原に合わせ教義を変えることに何の抵抗もなかったのだろうと、天道寺は言う。

「いや、それは判るんだが……なんで ウエア・ウルフ 狼男 ウエア・ウルフ が出てきたんだ？ そこが判らん」

天道寺の推理はおそらく正しいだろうと大上も思っている。しかしこの推理は、月原の夢に ウエア・ウルフ 狼男 ウエア・ウルフ が出てきた事への説明にはならない。大上にしてみれば、自分のことではないにしても、同族が悪役に仕立て上げられたのはいささか不本意なのだ。

ふんがい 憤慨する大上を見て、天道寺は嫌らしく笑う。そして不意に、天道寺は大上へと手_を伸_ばした。

「……なんだよ、急に」

伸ばされたその手を握り……握手をする大上。天道寺の動作は突然だったが、大上は反射的に伸ばされた手を取ってしまった。

「月原さんはこう言ったよな。 おおかみおし 狼男 おおかみおし が手_を伸_ばしてきた、って」

手を放しながら言う天道寺の言葉に、大上はまだ頭が追いついていかない。

「つまり、だ。夢の おおかみおし 狼男 おおかみおし は、なにも月原さんを襲おうとして手を伸ばしたんじゃない。手_を差_し伸_べようとしたのさ」

同じ動作でも見る側の状況で印象は全く異なる。もし大上が天道寺に敵意を持っていたら、先ほど天道寺が伸ばしてきた手に悪意があると感じただろう。

「予知夢さ。月原さんは、お前に助けられるってブリージット様から告げられていたんだよ。他の場面にしたって、ブリージット様が見せていたに違いない。火事のシーン、両親が殺されるシーン、どれも彼女にとつて重要な場面だ。それによく考えてみる、そもそも木宮は催眠に関しては素人だ。あの アロマテラヒ お香 アロマテラヒ だって粗悪な出来だったぜ。あいつの催眠がうまくいっていたと考える方が不自然だ」

どうだろうか？ 普通に考えれば予知夢などという方が不自然だが、しかし月原は女神の加護を受けていた女性。少なくともオカルトそのものとも言える ウエア・ウルフ 狼男 ウエア・ウルフ にしてみれば、予知夢の存在を疑うことの方が不自然。

「いやでもさ……それは出来過ぎだろ？」

天道寺の話が本当だとすると……全ては女神の導きということになる。

そもそも今回の事件、本来はカウンセラーハンターの大上が関わる事件ではない。結果論だが、木宮達は悪徳ハンターではなかったのだから、これはむしろまっとうなハンターなどが関わるべき事件だったはず。にも関わらず大上が月原と出会ったのは……やはり女神の導きなのだろうか？

「ま、それを決めるのは俺じゃなく……」天道寺の言葉を遮るように、リビングのドアがカチャリと小さな音を立て開いた。「お前達が決めることだ」

ドアを開けたそこには、洗礼を受けたばかりの月原が真っ赤な尼僧服を着て立っていた。

「その、なんだ……良かったね」

何を話せばいいのか。月原とリビングで二人きりにさせられた大上は、ソファから立ち上がりやや緊張気味に声を掛ける。

月原は黙って頷く。特に言葉はなく、沈黙があたりを支配する。この雰囲気、どこか懐かしいな……月原と教会で会っていた頃はそう昔のことではないのだが、それを懐かしいと大上は振り返る。

「ありがとうございます」

最初に沈黙を破ったのは月原だった。深く頭を下げ、月原は礼を述べる。

そして顔を上げまたしばしの沈黙。すると月原は、そっと大上に近づいた。

「ちよつ、え？」

そして月原は、腕を回し大上の胸に顔を埋めた。

「また……胸を貸してください。私、どんな顔をして良いのかよく判らなくて……」

いつでも胸を貸すと言ったのは大上だった。月原はあの時の言葉に自ら甘えだす。あの時と違うのは、大上が狼の姿でいること。あれほど憎々しかった狼の毛並みが、今はとても心地良い。

「何も知らなかったんですね、私……両親のことも、あなたのこと……」

ただ闇雲に敵かたきを探していた月原。そして見つけたウエア・ウルフ狼男は、彼女に手を差し伸べ常闇から月明かりの美しい世界へと引き上げてくれた。

あの夢のように。

「みんな、あなたのおかげです……大上さん。ありがとうございます……」

素直な感謝に、大上は思わず照れた。その照れ顔を月原が見られないのは、大上にとって救いだった。

「いやでも、それもブリージッド様のお導きだよ……」

照れ隠しに、大上は出来過ぎだと批判した天道寺の言葉を引用する。それを聞いて月原は、顔を埋めながらふるふると顔を振った。

「シスターの方々にも言われましたが……正直、私はまだ自分の信仰というものに自信が持てません」

元から彼女は、キリストもグノーシスも傾倒出来なかった。信仰心の無さに悩みすらしていた。そんな彼女もブリージットの洗礼は受けたが、まだ信じ切れてはいなかった。

「今信じられるのは……大上さん、あなただけです」

一瞬鼓動が高鳴った。大上はこの音を月原に聞かれただろうか、また鼓動を早めてしまふ。それを確かめようとしてか、月原は回した腕に力を入れている。

「あ、いや、そう言ってくれるのは嬉しいけど……」

どう切り返せばいいのだろうか。ハードボイルドに語るなら……いや、もうそこどころではない。男としてどう対処すべきか、大上には全く何も浮かばない。

「……迷惑ですか？」

ああ、そんな尋ね方をされたら……もう大上に、感情を偽る余裕など無かった。

そうか……俺やつぱり惚れてるわ。今更、大上は自覚した。

「そんな事ありませんよ。むしろ、その……ね」

もつと気の利いた言葉はないのか。歯がゆい想いを自分に向ける大上。言葉にならない分を、大上は月原の頭を撫でることで表す。

月原はというと……まるで子猫のように、撫でられることに心地よさを感じていた。いつだったか、大上に抱きしめてもらうことに懐かしさと暖かさを感じたことがあった。あれは父親への追憶にも似た感覚……月原は大上の中に、父親の姿を重ねていた。

それだけだろうか？ 月原は自問する。大人の異性に対するあこがれはあるだろうし、そこへ父親の姿を見出そうとするのは、ずっと敵かたきを捜し続けた月原にしてみれば当然の行為だったかもしれない。

彼女は愛に飢えていたから。

愛……その言葉に、月原は頬を赤く染める。大上に求めていたのは父親の代わり……だけではない。求めていたのは家族愛ではなく……月原も今更、自分の感情を明確に意識した。いつからだろう……やっと自覚できた感情を振り返ろうとしたが、止めた。今の彼女にとって過去よりも今の感情を大切にしかつたから。

「側にいてください……ずっと……」

なんと大胆な告白だろうか。自分で口にしながら、月原は恥ずかしさにのたうち回りたくなるのを、より腕に力を入れることで逃れる。

さて、大上はなんと答えるか。

「……いつもね、俺はハードボイルドってのを意識してたんだが……ダメだね、こういう時になんて言えばいいのか、まったく言葉が浮かんでこない」

だから……大上は一度月原を自分から放し、一度まっすぐに彼女を見つめる。

赤い糸という女神の導きは、関係ない。ウェア・ウルフ狼男は人間より獣に近いんだから、自分の感情に素直になるのが得策だ。

大上はそつと耳元に大きな口を近づけ、至ってシンプルな言葉を囁いた。

そして月原は大上を見つめ……微笑んだ。